プラトン全集10

ヒッピアス(大)

北嶋美雪訳

ヒッピアス(小)

イオン

メネクセノス

津村寛二訳

岩波書店

編集
田中美知太郎
藤　沢　令　夫

目次

凡　例

一、本全集は底本として、バーネット版プラトン全集(J. Burnet, *Platonis Opera*, 5 vols., Oxford Classical Texts)を用い、これと異なる読みをした箇所は注によって示す。
二、訳文上欄の数字とＢＣＤＥは、ステファヌス版全集(H. Stephanus, *Platonis opera quae extant omnia*, 1578)のページ数と各ページ内のＡＢＣＤＥの段落づけとの対応――おおよその――を示す(ただしＡは省略した)。引用は、このページ数と段落により示される(例えば『パイドロス』253C)。
三、各対話篇における章分けは、一八世紀以降フィッシャー(J. F. Fischer)の校本に由来すると見られる一般に慣用のものに従う。ただし対話篇により章別の一定していないものもあり、この場合は適宜区別を設けた。
四、対話篇名につけられている副題(ないものもある)は、ローマ時代のプラトン全集(トラシュロス)以来の、あるいはさらに古い伝承によるものである。所伝によって異同のある場合は、適切と判断されるものを選んでつけた。
五、ギリシア語の片かな表記は、ΦΧΘとΠΚΤとを同じように「プ」「ク」「ト」とし、母音の長短は普通名詞においてのみ区別し(例、ソピアー)、固有名詞においては区別しない(例、ソークラテースでなく、ソクラテス)。
六、〔　〕の括弧は訳者による文意の補足を示す。
七、略記号　DK＝H. Diels u. W. Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*.　Diog. L.＝Diogenes Laertios.　古注＝*Scholia Platonica* (ed. W. C. Greene).
八、本全集における対話篇の収録順と各巻への配分は、右のトラシュロス編全集における九つの四部作集(tetralogia)の順序と括り方に従っている。

ヒッピアス(大)

――美について――

北嶋美雪訳

登場人物

ソクラテス
ヒッピアス

一

ソクラテス　美しく賢いヒッピアス、たいそう久しぶりですね、わがアテナイに来てくださったのは。(1)

ヒッピアス　暇がなかったのでね、ソクラテス。というのはわが国エリス(2)は、どこかの国と何か事を取り決める必要にせまられると、それぞれの国からどのような話がもち出されようと、そうした話を裁定したり報告したりする力量にかけては、このぼくにまさる者はいないと考えて、いつでも市民たちのうちの誰よりも先にこのぼくのところにやって来ては、ぼくを使節に選ぶものだから。それでぼくは何度となく他のいろいろな国に使節としておもむいたものだが、しかしいちばんひんぱんに、そしていちばん多くの、かつ重大な用件でおもむいたのはラケダイモン(スパルタ)へだった。で君のお尋ねだが、まさにそういうわけで、このあたりにはあまりたびたび来なかったのです。

B

ソクラテス　いま言われたようなことこそ、とりもなおさず、ヒッピアス、しんじつ知恵があり、完璧な人間であるということです。つまりあなたは一個人としても、青年たちから多額の金銭を受けとり、その受けとるものよりもっと大きな利益をさずけることができるだけの才覚をおもちですし、また公人としても、大衆の間でさげすまれることなく名声を博そうとする人なら当然そうあるべきであるように、あなた自身の国に恩恵をほどこすことが充分おできになるのですから。

C

ところでしかし、ヒッピアス、知恵ゆえにその名前が大々的に喧伝されているあの昔の人たち、ピッタコスと

かビアスとか、ミレトスの人タレスとその弟子たちとか、さらにもっと後世のアナクサゴラスにいたるまでの人たち(3)、こうした人たちの全部または大多数の者が、国家社会に関わる事柄からは明らかに手をさしひかえていたのは、いったいどういうわけなのでしょう？

D **ヒッピアス** それは、ソクラテス、彼らの知恵をもってしては、公私両面のことに及ぶわけにはいかなかったし、またそれだけの力量も充分なかったからだと考えるほかないではないか？

二

ソクラテス してみると、ゼウスにかけて、ちょうど他のいろいろな技術の分野には進歩がみられ、今日の職人に較べると昔の職人は劣っているのと同じように、あなたがたのソフィストの術知にもまた進歩ということがあって、昔の人たちのうち知恵に関わりをもっていたあの人たちは、あなたがたに較べたら劣っている、とわれわれは言ってもよいでしょうか？

---

1 「来てくださった」と訳した καταίρω は字義通りには「船が港に入港する」という意味である。ヒッピアスの郷里が次に述べられるようにエリスであるところから、文字通りの意味をもつと同時に、彼がわざわざアテナイに立ち寄ってくれたという多少の揶揄もこめられている。

2 ペロポネソス半島の北西部、オリュンピアの聖地を擁する地。

3 レスボス島ミュティレネのピッタコス、プリエネのビアス、ミレトスのタレスはいわゆる「七賢人」のなかに数えられる人たちで、前七世紀から六世紀に生存。アナクサゴラス（前四六〇年頃壮年）はイオニアのクラゾメナイ出身の哲学者で、アテナイに来訪中、ペリクレスと親交があったと言われている。

ヒッピアス　そう、君の意見はまったく正しいとも。

ソクラテス　するといまわれわれの前に、ヒッピアス、ビアスが生き返ってきたとしたら、あなたがたに較べてみて、彼はさぞかし嘲笑を買うことでしょうねえ。ちょうどあのダイダロス(1)もしいまの世に生まれてきて、昔、その名声をかちえたゆえんの作品と同類の作品を作るとしたら、彼は笑いものとなるだろうと彫刻家連中が言うように。

ヒッピアス　それはまさに君の仰せのとおりだ、ソクラテス。とはいえ、ぼくとしては、昔の人々やわれわれの先輩たちのほうを、いまの時代の人たちより先に、またいっそう、ほめたたえることにしてはいるがね、――生者に対してはその嫉妬を気づかい、故人に対してはその憤怒を恐れて(2)。

B

ソクラテス　あなたの言葉の使い方といい、考え方といい、なかなか結構だと思いますね、ヒッピアス。そしてわたしは、あなたの言われることは真実であって、じじつ確かに、あなたがたの術知は個人的なことばかりでなく、公けのことをもまたあわせ行なうことができるという方向に進歩を遂げてきたということを、あなたに加勢して証言してあげることができます。例のレオンティノイのソフィスト、ゴルギアス(3)は、レオンティノイの人たちのうちで国家公共のことを行なう力量にかけては彼にまさる人はないというわけで、彼の祖国から国家使節としてここアテナイに派遣されてきました。そして民会できわめてすばらしい演説をしたとの評判ですし、また個人的にもその弁論ぶりを披露し、青年たちと接することによって、多額の金銭をこの国からかせぎ、もうけて行きました(4)。

C

さらにわれわれとはなじみの深いあのプロディコス(5)ですが、ここには公用で他の機会にもたびたび出向いてき

ましたが、最後にごく最近ケオスから公用で出向いてきた際、政務審議会で演説を行なって大好評を博しましたし、また個人的にもその弁論ぶりを披露し、青年たちと接して、驚くばかりの金銭をもうけました。ところが他方、あの昔の人たち(6)ときたら、その誰一人として報酬として金銭を要求するのが妥当だなどとけっ D して考えはしなかったし、また雑多な群衆の間で自分の知恵を披瀝してみせるべきだとも思わなかった。そのように彼らはおひと好しで、金銭に多大な価値があろうなどとは気づきもしなかったのです。これに引きかえ、いま言ったご両人は、二人とも、他の職人たちが何であれそれぞれの技術でかせいでいるより多額の金銭を、その

---

1 巧みな細工や工夫で知られた伝説的な名匠。彼の手になった彫像はひとりでに動き出すことができたと噂されるほどの腕をしていたと伝えられている。『エウテュプロン』11B〜C, 15B、『メノン』97Dsqq.、『国家』VII. 529Eなど参照。

2 このあたりの原文における表現、εὐλαβούμενος μὲν φθόνον τῶν ζώντων, φοβούμενος δὲ μῆνιν τῶν τετελευτηκότων. に見られるパリソーシス(二つの節を等しい長さにする修辞法の一種)とパロモイオーシス(二つの節の初めか終りの端の音が等しくなるようにする修辞法の一種)(くわしくはアリストテレス『弁論術』第三巻(1410^{a}25sqq.)参照)の使用は、ゴルギアスの修辞法をうかがわせるもので、次のソクラテスの言葉の冒頭はこのことを指していると思われ、またゴルギアスそのひとへの言及もおそらくこれがきっかけとなったのであろう。

3 シケリア(シシリイ)島のレオンティノイ出身の高名なソフィストで弁論家。前四八〇年頃の生まれ。ペロポネソス戦中四二七年、祖国の外交使節の主席代表としてアテナイに来訪した。

4 スウダによればゴルギアスは弟子一人につき一〇〇ムナーを謝礼金として請求したと言われる。

5 ケオス島出身の高名なソフィスト。彼の「五〇ドラクマ講義」は有名(『クラテュロス』384B、アリストテレス『弁論術』第三巻(1415^{b}15)参照)。また彼は言葉の正しい使用法、とくに同義語の区別に強い関心を寄せていたことが、プラトンの他の対話篇から知られる(『ラケス』197D、『カルミデス』163D、『プロタゴラス』337Asqq. 参照)。

6 先に言われたピッタコス、ビアス等々。281C参照。

知恵によってかせいでいるのです。それにまたこの人たちよりもっと前にプロタゴラス(1)がそうしました。

三

ヒッピアス ああ、ソクラテス、君はこのことについて肝心なことを何も知らないのだね。というのも、ぼくがかせいだ金額がどれくらいか、君は知ったら、さぞびっくりするだろうからだ。ほかの場合はさておき、いつかシケリア(2)に出かけた時のこと、そこにはプロタゴラスが滞在中で、大評判をとっており、年もぼくより年長だったわけだが、そのプロタゴラスよりずっと若輩のぼくが、ほんのちょっとの間に一五〇ムナー(3)をはるかに上まわる額をかせいだのだ。また何と、ほんの小さな一地方にすぎないイニュコス(4)からだけでも二〇ムナー以上もね。それでそれを家へ持って帰って親父に進呈したところ、親父も他の市民たちもびっくり仰天するありさまだった。そこでこのぼくは、他のソフィストたちの誰でもよいが、二人分合わせたよりも多い金額を、一人でかせいだと言ってよいかと思うのだ。

E

283

ソクラテス ヒッピアス、あなた自身と今日の人々の知恵が昔の人たちに較べてどれほどまさっているかということの、実に立派な、そして実に強力な証言をしてくださいましたね。じっさい、あなたのお説からすると、以前の人々にはずいぶん無知なところがありますからね。げんに、アナクサゴラスの身に起こったことは、あなたがたとは全然逆のことだったということですし。すなわちアナクサゴラスには莫大な遺産があったが、彼はそれに少しも関心をはらわず、すっかりなくしてしまった――そのように彼は知性を欠いた知恵のつかい方をした(5)というのですから。また彼以外の昔の人たちについても、これに類したことがほかにいろいろ言われています。

こうしてたしかにあなたはこの点を、今日の人々の知恵が以前の人たちのそれに較べてどれほどまさっているか
B ということについての立派な証拠として示されたように思います。また「賢者はとりわけ自分で自分自身のことに賢くなくてはならぬ」とは、世人の賛同するところですが、このことのきめ手はというと、してみると、いちばんたくさん金銭をかせぐ人、というわけなのですね。

四

さて、こういうことはもうこれでよしとして、次の点をどうか聞かせてください。あなた自身としては、行か

1 プロタゴラスに関してここではゴルギアス、プロディコスに較べて申しわけ程度にしか言及されていないが、アブデラのプロタゴラスは伝統的にはみずからソフィストをもって任じ、徳の教師として、そのための報酬を要求した最初の人(『プロタゴラス』349A 参照)。またDiog. L. IX. 52によれば授業料として一〇〇ムナーを最初に要求した人と言われる。

2 弁論術発祥の地。この地で発祥した弁論術をゴルギアスがアテナイにもたらしたと言われる。

3 一ムナーは一〇〇ドラクマ。古代ギリシアの貨幣を現邦貨に換算することは不可能と思われるので、ゴルギアス、プロディコス、プロタゴラスが請求したと言われる授業料の額、あるいはソクラテスがクリトンなど友人の勧告を容れて裁判において申出た科料が三〇ムナーであったこと(『ソクラテスの弁明』38B)、さらにふつうの結婚費用が三〇ムナー程度であったこと(『書簡集』XIII. 361E)など比較参照のこと。

4 シケリア西岸の一小都市とする説、アクラガス(アグリゲントゥム)とヒメラ河口の間の南岸に位置づける説、あるいはアクラガス内の地域とする説など諸説あるが、確定しがたい。

5 知性(ヌゥス)というのは、アナクサゴラスが、これを万物の原因と考え、これをもって万物を秩序づけようとしたもので、彼の学説の基本原理であることが踏まえられている。『パイドン』97C sqq. 参照。

れた先々の国のうちで、どこからいちばんたくさん金銭をかせぎました？　いや、それはもういうまでもなく、いちばんたびたび行かれたラケダイモン(スパルタ)からでしょうね？

ヒッピアス　いや、誓ってそれがそうではないのさ、ソクラテス。

ソクラテス　なんですって？　はて、ではいちばん少なかった？

C

ヒッピアス　それはもういまだかつてびた一文もさ。

ソクラテス　なんとも奇妙で不思議な話ですねえ、ヒッピアス。どうか言ってください。いったいあなたの知恵は、それに接しそれを学ぶ人たちを、徳においていっそうすぐれた者にするような性質のものではないのですか？

ヒッピアス　ええ、大いにそうだよ、ソクラテス。

ソクラテス　しかしイニュコスの人たちの子息をよりすぐれた者にすることはできたが、スパルタ人の子息たちのほうはそうはなしえなかった？

ヒッピアス　とんでもない。

ソクラテス　しかしそれなら、シケリア人はよりすぐれた人間になることを望むが、ラケダイモン人は望まない？

D

ヒッピアス　ラケダイモン人だって、ソクラテス、たしかに望むさ。

ソクラテス　では金銭がないのであなたとのつき合いを避けていたのですか？

ヒッピアス　けっしてそんなことはない。金銭は充分彼らにはあるのだから。(1)

ソクラテス　では希望はしていたし、金銭はあったし、しかもあなたは彼らに最大の利益を与えることができたというのに、彼らがあなたに謝礼金をたんまりもたせてお帰ししなかったのはいったいぜんたいどういうわけでしょう？　いや、まさか、こういうわけではありますまいね――ひょっとしてラケダイモン人は彼らの子供たちに、あなたよりもっとよく教育をほどこすことができるのかもしれないなどというのでは？　それともそれはそのとおりだと言ってもよいでしょうか？　そしてあなたはこれを認めますか？

E

ヒッピアス　いや、全然。

ソクラテス　それではあなたはラケダイモンで青年たちに、彼らがあなたにつくほうが、彼らの身内の者たちと交際するよりも、徳に向かってはるかに進歩するだろうと説得できなかったのですか？　あるいはまた彼らの父親に、もし少しでも息子のことを気づかうのなら、自分で面倒をみるよりもむしろあなたに任せるべきだと説得するだけの力がなかった？　というのは、自分自身の息子ができるだけすぐれた人間になるのを、彼らがこころよく思わなかったとは思えませんからね。

ヒッピアス　ぼくとしては彼らがそれをこころよく思わなかったとは思えないね。

ソクラテス　しかし、ラケダイモンは法秩序がよく保たれている国です。

ヒッピアス　むろんそうだ。

1　「金貨や銀貨は、全ギリシアにあるものが、スパルタで私有されているものに及ばない」(『アルキビアデス　I』122E)。

ソクラテス　また法秩序がよく保たれている国では、徳がこの上なく尊重されるはずです。

ヒッピアス　たしかに。

ソクラテス　そしてあなたは誰よりも見事に、それを他の人に伝授するすべを心得ておられる。

ヒッピアス　それはもう大いにね、ソクラテス。

五

ソクラテス　それでは馬術を最も見事に伝授するすべを心得ている人は、ギリシアじゅうでテッタリアにおいて(1)最も尊敬され、最も多くの金銭をもうけることができるのではないでしょうか？　そのほかまた、この術に並ならぬ関心がはらわれているところがあれば、そこにおいても？

ヒッピアス　当然そうだろう。

ソクラテス　したがって、徳の習得に最も有用な学問を伝授することができる人は、ラケダイモンにおいて、またその他ギリシア諸国のうちで法秩序がよく保たれている国ならどこでも、最も尊敬され、またもしその気になれば最も多額の金銭をかせぐのではないでしょうか？　それなのに、ねえ、あなた、あなたはシケリアとかイニュコスにおけるほうが、ずっとそういうことになるとお考えなのですか？　そう信じてもよいでしょうか、ヒッピアス？　というのはあなたの命令とあれば信じなければなりませんからね。　B

ヒッピアス　それというのも、ソクラテス、ラケダイモン人にあっては、法律をみだりに改変したり、あるいはまた慣わしに反して子息の教育することは、父祖伝来のしきたりではないのでね。

C

ソクラテス　なんですって？　ラケダイモン人にとっては、正しい行ないをせず、間違ったことをするのが、父祖伝来のしきたりなのですか？

ヒッピアス　そんなことを言おうとするのではないよ、ぼくは、ソクラテス。

ソクラテス　それなら青年たちにより善き教育をあたえ、より悪しき教育をほどこさないなら、彼らは正しい行ないをすることになるのではありませんか？

ヒッピアス　正しい行ないだろう。けれども外来の教育を行なうことは、彼らにとって法習に適ったことではない。なぜなら、いいかね、もし仮にあのラケダイモンで、自分のほどこした教育のために、かつてそこから金銭をかせいだというような人が誰かあったとしたら、とりわけぼくこそ莫大な額をかせいでいただろうからね――じじつとにかく、彼らはこのぼくからよろこんで話を聴き、ほめそやすのだから――ところがそれは、いまも言ったように、法ではないのだ。

D

ソクラテス　ではおっしゃるところの法というのは、ヒッピアス、国の害になるものですか、それとも益になるものですか？

ヒッピアス　それは益になるようにと制定されるのだが、しかしもしその法が悪く制定されれば、害になることも時にはあると思う。

ソクラテス　ではどうですか？　法の制定者は法を国家のために最大の善きものとして制定するのではありませ

1　テッタリア人の馬術にたけていることで有名なことは『メノン』70A に言及されている。

E

せんか？　またそれがなければ国家が秩序をもって治められることはできないものとして？

ヒッピアス　君の言うとおりだ。

ソクラテス　すると法を制定しようと企てる人々は、善をとらえそこなうと、法習に適ったことも、法をも取り逃してしまうことになる。それともあなたはどう言われます？

ヒッピアス　厳密に言えば、ソクラテス、それはそのとおりだ。もっとも人々はそういう言い方は普通しないが。

ソクラテス　どちらの人々がです、ヒッピアス——知っている人々が、ですか？　それとも知らない人々が、ですか？

ヒッピアス　大多数がだ。

ソクラテス　彼らは——大多数の人々のことですが——真実を知っている人々ですか？

ヒッピアス　いや、けっして。

ソクラテス　しかしきっと、知っている人々なら、より有益なもののほうが有益でないものよりも、真実には、すべての人々にとって法に適っていると考えるでしょう。それともあなたは賛成しませんか？

ヒッピアス　いや、賛成するよ、少なくとも、真実には、そうだということには。

ソクラテス　では知っている人々の考えるとおりなのですね？

ヒッピアス　たしかにそうだ。

六

285

ソクラテス　しかるにラケダイモン人にとっては、あなたの主張されるところによると、あなたによる教育——これは外来の教育ですが——を受けるほうが自分の国の教育を受けるよりは有益だということです。

ヒッピアス　そう、しかもぼくの言っていることはほんとうのことでもある。

ソクラテス　いかにも。そしてさらに、より有益なことは、より法に適っている、とこうも主張されますね、ヒッピアス？

ヒッピアス　たしかにそう言った。

ソクラテス　してみると、あなたのお説に従えば、ラケダイモン人の息子たちにとっては、ヒッピアスから教育を受けるほうがより法に適っていて、父親による教育のほうはより法に適っていないということになる、——ほんとうにあなたによる教育のほうがいっそう彼らのためになるはずならばですね。

ヒッピアス　むろんためになるはずだよ、ソクラテス。

B

ソクラテス　してみると、ラケダイモン人は、あなたにお金を払って自分たちの息子を任せないのですから、法に違反していることになります。

ヒッピアス　それは認める。君の言っていることはぼくの立場を支持してくれるもののように思えるし、そのことにぼくが反対する筋合いは何もないのだから。

ソクラテス　かくてラケダイモン人は、これはここだけの話ですが、実は法に違反しているということが、し

かもいちばん重大な問題でそうなのがわかりますね、――最も法に適った人々だと見なされていますけれども。それはそうとヒッピアス、ほんとうのところ、彼らがあなたをほめそやし、喜んで聴きたがるのは、どういう事柄なのですか？　あるいはそれはもうわかりきったことで、あの、あなたがきわめてすばらしく精通しておら

C れること、つまり星や天体現象に関すること(1)ですか？

ヒッピアス　いや、まったくちがうね。そういうことには彼はとてもしんぼうすることはできない。

ソクラテス　それなら幾何学(2)については喜んで聴こうとしますか？

ヒッピアス　全然。彼らときたらその大部分の者が、計算すらできないといってよいくらいだからね。

ソクラテス　してみると、算術(3)などはあなたの講義をしんぼうして聞くどころではないのですね。

ヒッピアス　それはもう誓ってそれどころではない。

D **ソクラテス**　それなら、あなたが誰よりも厳密に類別することがおできになること、つまり字母や綴りや音律や音階の機能については(4)？

ヒッピアス　音階や字母だって？　君！

ソクラテス　しかしそれなら、彼らがあなたから聴きたがり、またほめそやすのはいったい何なのです？　あなたご自身の口からどうかおっしゃってください。わたしには発見できませんから。

ヒッピアス　英雄や人間の家系についてとか、ソクラテス、昔どのように国々が建設されたかという建国の話とか、要するに、何でも昔話を大そう喜んで聴きたがるのだ。それでぼくとしては、彼らのおかげでどうしても

E そういった類(たぐ)いのことを一つ残らずすっかり暗記し、完全に習熟しておかざるをえないことになってしまったの

さ。

ソクラテス　やれやれ、ヒッピアス、ラケダイモン人がソロンをはじめとするわれわれアテナイ人の代々のアルコーン(5)のことを一々列挙するのを喜ばなくて、あなたはなんとしても好運でしたよ。さもなければあなたはさぞかし暗記にてこずったことでしょう。

ヒッピアス　どういうわけで？　ソクラテス。いっぺん聞けば、五〇人の名前をぼくは憶えてしまうだろうよ。

七

ソクラテス　あなたの言われるとおりです。ところがわたしときたら、あなたがそういう記憶術を心得ておられる(6)のにうっかり気がつきませんでした。それであなたがラケダイモン人に喜ばれるのも当然であることがわかるし——それはあなたが博識だからです——また彼らがあなたに対してとる態度も理解できます、——彼らはちょうど、快く物語を聞かせてくれるために子供がお婆さんに接するのと同じような態度で、あなたに接するわけなのですね。

1　『プロタゴラス』315C, 318E参照。
2　同318E参照。
3　同318E参照。
4　字母、音律、音階に関するヒッピアスの業績については『ヒッピアス(小)』368D参照。
5　アルコーンの呼称は前七世紀中葉にまでさかのぼるが、ここではしかしソロン(前五九四—五九三年にアルコーンの任にあった)がアテナイ民主制の樹立者と考えられているようである。
6　『ヒッピアス(小)』368D参照。

ヒッピアス　そう。それにね、誓って言うが、ソクラテス、あの国で最近はまたさまざまの美しい仕事のことについて、ぼくは青年が業とすべき営みを詳しく語って好評を博したのだ。というのはこうした問題について、他の点もさることながら、とくに言葉の表現の点できわめてうるわしく構成された物語がぼくにはあるのだ。その物語の前置きと出だしは次のようなものだ。

B　トロイア陥落後、ネオプトレモス(1)がネストル(2)に向かって、ひとが若いうちにそれを業とすれば最も評判の高い人となるような、そうした美しい営みとはどのようなものでしょうか、と尋ねるところをその物語は語る。その後でネストルが彼に答えて、彼にきわめて多くの、きわめて美しい法習に適った営みの数々を課することになるのだ。

こうした話をあそこでも披露したが、ここでも明後日、ペイドストラトスの講義場(3)で披露するつもりだ。またそのほかにもいろいろ聴く価値のあることをね。アペマントスの子のエウディコス(4)にぜひともと頼まれたものだから。

C　どうか君自身もぜひその場に臨(のぞ)んでくれるように、それにまた他の人たちも、その話を聴いて相応な評価を下すことのできる人なら誰でも連れてくるようにしてください。

八

ソクラテス　ええもう、それはそういうことになりましょう、神のみこころがそこにあるなら、ヒッピアス。でもどうか、いまはそのことに関するちょっとした質問に答えてくれませんか。ちょうど折よく(5)わたしに思い出させてくださったことでもありますし。

実はごく最近のことなのですが、ある人[6]がですね、あなた、わたしがある議論において、あるものを醜いとして非難し、あるものを美しいとして賞讃していたら、何かこんなふうな調子で、きわめてぶしつけに質問をしてきて、わたしを行詰りにおとしいれたのです。「ねえ、君は」とその男は言うのでした、「ソクラテス、どういうものが美しく、どういうものが醜いかを、いったいどうして知っているのかね？ というのは、さあ、〈美〉とは何か[7]、君は言うことができるかね？」と。そしてわたしは自分の至らなさのために行詰ってしまい、彼に適切な返答をすることができなかった。それでその話合いから立ち去って行きながら、わたしは自分自身に腹をたて、われとわが身を責め、そしてあなたがた知者の誰かに今度出会ったなら、聴き、学び、練習をつみ、そのうえで

D

1　アキレウスの子。トロイア攻略中アキレウスが戦死したのち、この都市の奪取に不可欠の人物としてギリシアから呼び寄せられ、そしてトロイアにあっては、「戦略の会議の席でも智将オデュッセウス、ネストル(次注参照)に次ぐ才略を示し、合戦に及んでは他に一人ぬきんでて果敢な勇士」であったことが、ソポクレス、ホメロスなどから知られる。

2　ポセイドンの孫で、ピュロス王。『イリアス』のなかで、彼はしばしば老齢の助言者、忠告者として描かれている。

3　ペイドストラトスについては不祥。たぶんソフィストが、ここで講義場と呼ばれている場所を、ちょうど『プロタゴラス』で一私邸が随意に使われているような仕方で、借り受けていたのであろうと推測されている。

4　ヒッピアスはアテナイ滞在中、彼の家に逗留していたのであろう。『ヒッピアス(小)』の冒頭では、ヒッピアスとソクラテスとの対話をさそいだす役割をつとめている。

5　「折よく」と訳した εἰς καλόν には、同時にこの対話篇の主題である「美について」という文字通りの意味が掛けて使われていると見ることができる。

6　ここで突然登場するソクラテスの論争の相手、「ある人」とは誰を指すか、また「ある議論」とは何かに関しては、多くの論のあるところである。ソクラテスに忌憚なく語らせるための一つの工夫とみるシュタルバウム説が妥当であろう。288D, 298C ほか参照。

7　ここでこの対話篇の主題である「美とは何か」の問題が導入される。

改めて捲土重来、その質問した男のところに論議をたたかわすべくとってかえそうと、こう肝に銘じたのです。そこでいまも言ったように、あなたはちょうどいま折よくここに来てくださったことですし、またもや反駁されてふたたび笑いものにされることがないように、どうかわたしに〈美〉そのものとは何なのか、満足のいくように教えてください、また、答えるという形[1]でできるだけ正確にわたしに言ってくださるようつとめてください。と

E

いうのはあなたなら確実に知っておられるでしょうし、またおそらくそれは、あなたの心得ておられる該博な学問知識のうちの、ほんの些細な部分にすぎないでしょうから。

ヒッピアス　些細だとも、まったく、ソクラテス。そして何の価値もないと言ってよいだろう。

ソクラテス　それならわけなくわたしは学ぶでしょうし、もはや誰にも反駁されずにすむでしょう。

ヒッピアス　むろん誰にもさ。さもなければぼくのやっていることは、とるにたりぬ、素人じみたことになるだろうからね。

287

ソクラテス　これは、ヒッピアス、ヘラの女神の名にかけて、ありがたいお言葉です、――もしわれわれがその男をやっつけることになるのでしたらね。しかし、どうでしょう、あなたができるかぎりわたしを鍛えあげてくださるように、あの男の役をわたしが演じて、あなたが答えてくださるとき、その言説にわたしが抗弁することにしてもかまいませんか？　というのはわたしには多少、そうした抗弁には経験があるものですから。だからもしあなたに格別さしさわりがなければ、抗弁を試みたいと思います、そのほうがしっかり学べるでしょうから。

B

ヒッピアス　いいとも、抗弁したまえ。というのも、いましがたも言ったように、そんな質問は大したものではないのだし、いやそれよりはるかにむずかしい質問にだって答弁できるように君に教えて、この世の誰ひとり

として君を反駁できないように、ぼくはしてあげられるだろうから。

九

ソクラテス ほう、これはなんとも結構なことをうかがいました。ではさあ、あなたも勧めてくださることですし、できるだけあの男になりすまして、あなたに質問してみるとしましょう。というのは、もしあなたがあなたの主張される言説、つまりいろいろな美しい営みについての言説を彼に披露されるとしたら、彼はそれを聴いたうえで、あなたが話を打ち切ると、何はさておきまず〈美〉について質問し——そうするのが彼の癖みたいなものですから——、そしてこう言うでしょうからね、「エリスの方、そもそも正しい人々が正しいのは、正しさによってではありませんか?」。——ではどうか、ヒッピアス、彼が質問したつもりで、これに答えてくれませんか。

ヒッピアス 正しさによってだ、と答えるだろう。

ソクラテス 「ではこのもの、つまり正しさは、何かあるものではありませんか?」。

ヒッピアス たしかに。

ソクラテス 「ではまた知恵によって、知恵ある人たちは知恵があるし、善によってすべて善いものは善いのでは?」。

---

1 一問一答の対話ということが含意されている。

D

ヒッピアス まったくそのとおり。
ソクラテス 「少なくともそれら知恵や善が何かあるものであることによって、ですね。どうしたって、何かあるものでないことによって、などということはありえないでしょうから」。
ヒッピアス 何かあるものであることによって、だとも。
ソクラテス 「それではすべて美しいものもまた、美によって美しいのではありませんか?」。
ヒッピアス そう、美によってだ。
ソクラテス 「少なくともそれが何かあるものであることによって、ですね?」。
ヒッピアス 何かあるものであることによって、だ。でなくて、他の何によってでありえようか?
ソクラテス 「ではどうか、エリスの方、言ってください」と彼は言うでしょう、「ほかならぬその〈美〉というのは何なのです?」。
ヒッピアス すると、ソクラテス、そういう質問をする男は、ほかでもない、何が美しいかを聞くことを要求しているのだね?
ソクラテス わたしにはそうとは思われませんね、そうではなく、美とは何かを聞くことを要求しているのだと思います、ヒッピアス。
ヒッピアス だが、それとこれとはどう違うのかね?
ソクラテス あなたにはぜんぜん違いがないと思われるのですか?
ヒッピアス そう、少しも違いはないものね。

ソクラテス　そうでしょうとも、それはむろんあなたのほうがよくご存知でいらっしゃる。けれども、あなた、ひとつ考えてみてください。ともかく彼があなたに尋ねているのは、何が美しいかではなくて、美とは何かなのですから。

E

ヒッピアス　わかったよ、君、それならいかにも、美とは何か彼に答えるとしよう、そしてぼくはけっして反駁されるようなことはあるまい。というのは、ソクラテス、いいかね、ほんとうのことを言わなければならないとしたら、〈美しい乙女(おとめ)〉こそ美なのだ。

288

ソクラテス　犬に誓って、ヒッピアス、これはまことに美しい、そして人々の思わくどおりの答えをされましたね。では、わたしとしてもそう答えるならば、まさしく尋ねられたことに答えることになり、しかも正しく答えることになるのですね？　そしてわたしは、もうけっして反駁(はんばく)されるようなことはないのでしょうね？

ヒッピアス　どうして反駁されることがありえよう、ソクラテス、いやしくもすべての人々にそう思われ、聴いている人たちが誰もみな君は正しいことを言っていると、君のために証言してくれるであろう事柄に対して。

ソクラテス　結構です。まったくそのとおりですとも。ではさあ、ヒッピアス、あなたの言われることをわたしは自分に向かって復唱してみるとしましょう。

その男はわたしに何かこんなふうに質問するでしょう、「さあどうか、ソクラテス、答えてくれたまえ。君が美しいと主張するそれらすべてのものだが、〈美〉そのものが何であれば、それらは美しいのだろうか？」。——これに対してわたしとしては、「もし〈美しい乙女〉が美なら、その〈美しい乙女〉こそ、それによってそれらすべてが美しくあるであろうところのものである」、と言うべきでしょうか？

B

ヒッピアス すると君は、君が言うものは美ではないと、彼がなお君に反駁しようと企てるだろうとでも思うのかね？ あるいは、そんなことを企てようものなら、彼が物笑いの種にならずにすむとでも思うのかね？
ソクラテス それがなんと、あなた、彼がそう企てるだろうということは、わたしにはよくわかっているのです。が、彼がそう企てたら物笑いの種になるかどうかは、やがておのずから明らかになりましょう。しかしともかく、彼が言うだろうと予想されることを、あなたに申しあげてみたいと思いますが。
ヒッピアス では言いたまえ。

一〇

ソクラテス 「なんとも君は甘い男だねえ」と彼は言うでしょう、「ソクラテス、では美しい牝馬は美ではないのかい？ これを神もまた神託のなかで賞揚されたがね[1]」。——何とわれわれは言うべきでしょう、ヒッピアス？

C

牝馬も、美しいのは、美だと言うほかないのではありませんか？ というのは美しいものが美でないなどと、あえて否定することがどうしてできましょう。
ヒッピアス 君の言うことはほんとうだ、ソクラテス。じっさいまた神がそう言われたのは正しいことでもあるしね。なぜならわれわれのところ〔エリス〕には、たとえようもなく美しい牝馬がいるからね[2]。
ソクラテス 「よろしい」と彼はそうしたら言うでしょう、「では美しい竪琴（たてごと）はどうかね？ 美ではないかね？」。——われわれは肯定したものでしょうか、ヒッピアス？
ヒッピアス そう。

ソクラテス　するとさらに、これにつづけて彼は言うでしょう――彼の性格から推して、わたしにはほぼよくわかっているのです――、「ねえ君、では美しい土鍋はどうかね？　するとこれは美ではないかね？」。

D　**ヒッピアス**　ソクラテス、いったいそいつは誰なのだね？　おごそかな問題に、かくもくだらないものの名をあえて口にするとは、実に教養のないやつだ。

ソクラテス　彼はそういう男なのですよ、ヒッピアス、気のきいたところがなく、どこにでもザラにいる屑(くず)みたいなやつで、真実以外は何も気にかけない、といったね。しかしそれにもかかわらず、その男に答えなければなりませんし、ここはまずわたしが意見を表明します。いやしくもその土鍋が、すぐれた陶工の手によってつくられたものであって、滑らかで、まろやかで、焼も美しく、たとえば六クゥス(3)ははいるあの美しい土鍋のなかには幾つかそういうのがありますが、両耳のついた、比類なく美しいのなら、もしそのような土鍋のことを彼が尋E　ねているのだとしたら、どうしてもそれは美しいということを認めねばなりますまい。だってどうして美しいものを、美しくないなどと否定することができましょう。

1　注釈家たちはこれを、メガラ人に与えられたデルポイの神託(v. Schol. ad Theocr. XIV, 48)と関係させている。自負心に溢れたメガラ人はアポロンに、「自分たちよりすぐれているのは誰か？」と尋ねたのに対して、この神の答えは次のような数行で初まるものであったと言われる。
「世界中のどこの土地よりもすぐれているのはペラスゴイ族の住まうアルゴスの地　トラキアの牝馬　そしてラケダイモンの女たち」

2　エリスは名馬の産地として知られていた。ただしここは、神のお告げをただちに自分の郷里に当てはめるヒッピアスの人柄が皮肉に描かれている。

3　一クゥスを約三・四リットルとして、六クゥスで約二〇リットル。

ヒッピアス　けっしてできないさ、ソクラテス。

ソクラテス　「それでは土鍋もまた」と彼は言うでしょう、「美しいのは、美ではないかね？　答えたまえ」。

ヒッピアス　そう、そのとおりだと思うね、ソクラテス。その器(うつわ)もまた、美しくつくられているのは美しい。しかし、馬や乙女やその他すべてそういった美しいものと比較して、それを全体として美しいと判定するには値(あたい)しない。

289

ソクラテス　いいでしょう。わかりました、ヒッピアス、つまり、そういうことを質問する男には、こう反論すべきなのですね、「君ねえ、ヘラクレイトスの言っていることは名言だということを知らないね、『猿のなかでいちばん美しいものといえども、人間の種族に較べれば醜い』のだ。また土鍋のなかでいちばん美しいのでも、乙女の種族に較べれば醜いのだよ、知者ヒッピアスの主張するように」。——そうではありませんか、ヒッピアス？

ヒッピアス　そうだとも、ソクラテス、君の答えは正しいよ。

一一

ソクラテス　それでは聴いてください。ついで彼はこう言うだろうということはよくわかっていますからね。

B

「ではどうかね、ソクラテス、乙女の種族を神々の種族ともし較べてみるならば、土鍋の類いを乙女の種族と較べた場合とちょうど同じ印象を受けるのではないだろうか？　いちばん美しい乙女といえども醜く見えるのではあるまいか？　あるいは君が引合いに出しているヘラクレイトスもまた、まさしくこのことを言おうとしている

のではないかね、いわく、『人間のなかで最も知恵ある者といえども、神に較べれば猿に見えよう、知恵でも、美しさでも、その他いかなる点でも』。——われわれは認めるべきでしょうか、ヒッピアス、最も美しい乙女といえども、神々の種族に較べれば醜いということを？

C

ヒッピアス　ことそのことに関するかぎり、誰が反対できよう、ソクラテス。

ソクラテス　かくていまや彼は、われわれがこれを認めるなら、笑って、そして言うでしょう、「ソクラテス、すると君は質問されたことを覚えているのかねえ？」と。——「ぼくとしては覚えているつもりだ」とわたしは言うでしょう、「〈美〉そのものとは、いったい何かということだろう？」。——「それでいて」と彼は言うことでしょう、「まぎれもなく〈美〉のことを質問されていながら、君は、君自身も認めるように、美しくもあるが、それに劣らずまた醜くもあるもののことを答えるのかね？」。——「どうもそうらしい」とわたしは言うでしょう。それとも、あなた、あなたはわたしに何と言えと忠告されますか？

ヒッピアス　ぼくとしてもそう言うさ。それにじじつまた、ほかならぬ神々に較べれば、人間の種族は美しくはない、と彼の言うのはほんとうのことでもあるだろうからね。(1)

D

ソクラテス　「だがもし仮に」と彼は言うでしょう、「最初からぼくが君に、何が美しくもあり、かつ醜くもあるのか、と質問をしたのだったら、君がいま答えたとおりの答えをぼくに対してすれば、君は正しい答えをしたことになったのではなかろうか？　ところがそうではなくて、〈美〉そのもの——他のものはみな、それによって

1　ここでもヒッピアスは問題にされた点のうちで最後の特殊な点だけを捉えていることに注意。288C参照。

飾られ、またその相がつけ加わる場合につねに美しく見えるもの——そういうものが、乙女であるとか、馬であるとか、竪琴であるとか、君にはまだこのうえ思えるのかね？」。

E

ヒッピアス　いや、ソクラテス、彼が求めているのがそういうものなら、〈美〉とは何であるか、すなわちそれによって他のものはみな飾られ、またそれがつけ加わることによって美しく見えもするところの、その〈美〉とは何であるかを彼に答えるのは、なによりもたやすいことだ。とにかくその男はなんともおめでたいやつさ。そして美しい所有物についてなんにもわきまえていやしない。というのは君がもし彼に、その、彼が尋ねている〈美〉とは黄金にほかならないと答えるならば、彼は行詰ってしまい、君を反駁しようなどと企てはしないだろうからね。なにしろこのものがつけ加わるなら、そのつけ加わるところどこでも、たとえそれ以前には醜く見えていたものでも、この黄金によって飾られて、美しく見えるだろうということは、たぶんわれわれ誰でも知っていることだろうからね。

ソクラテス　あなたは、ヒッピアス、その男がどんなに強情で、何事もそうやすやすとは受け入れない男であるか、ご存じないのですよ。

290

ヒッピアス　だからといって、それがどうしたというのだね、ソクラテス？　正しい言説は、彼はどうしても受け入れざるをえないか、それとも受け入れなければ、笑いものにならざるをえないのだからね。

一二

ソクラテス　けれどもそんな答えは、あなた、彼はけっして受け入れますまい、それどころか、大いにわたし

を嘲（あざけ）りさえして、そして言うでしょう、「君、少々おかしいのではないかね？　ペイディアス[1]がへたな工匠だと思うのかね？」と。そしてわたしとしては、「けっしてそんなことはない」と言うだろうと思います。

ヒッピアス　そして君がそう言うのはじっさい正しいだろうよ、ソクラテス。

ソクラテス　正しいですとも。だからこそ彼は、わたしがペイディアスは優秀な工匠だということに同意すると、「それでいて」と言うでしょう、「君の言うその〈美〉なるものをペイディアスは知らなかったと思うのかね？」。 B ——そこでわたしは「それはいったいまた、なぜだね？」と言うでしょう。——「それはね」と彼は言いましょう、「アテナの眼を、彼は黄金にしなかったし、顔のそのほかの部分にしても、足や手にしても、もしそれらがほかならぬ黄金だったならば、最も美しく見えることになったはずのものを、そうはせずに、象牙にしたからだ。こういう過ちを彼が犯したのは、言わずと知れたこと、彼の無知のせいであって、実は黄金こそはそれがどこにつけ加わろうと、すべてのものを、美しくするものだということを、彼は知らなかったからだ」。——そこで、こういうことを彼が言ったら、われわれはどう答えたらよいでしょう、ヒッピアス？

ヒッピアス　なにもむずかしいことはないさ。ペイディアスのしたことは正しい、とわれわれは言うだろうから。 C なぜなら思うに象牙だって美しいものね。

ソクラテス　「ではまたなんだって」と彼は言うでしょう、「眼の中心（ひとみ）もまた象牙にしないで、石にし

1　前五世紀のアテナイの有名な彫刻家。黄金と象牙で作ったパルテノンのアテナ像や、オリュンピアのゼウス像で特にその声名を馳せた。

たのだろう、できるだけ象牙に似た石を見つけ出して。それともまた、石も美しいのは、美なのかね?」。——われわれは肯定すべきでしょうか、ヒッピアス?

ヒッピアス 肯定すべきだとも、とにかくそれがふさわしい場合には。

ソクラテス 「だがふさわしくない場合には醜い?」。——わたしは同意したものでしょうか、どうでしょうか?

ヒッピアス 同意したまえ、とにかくふさわしくない場合には。

D

ソクラテス 「ではどうかね、象牙や黄金は」と彼は言うでしょう、「賢明なる君、それがふさわしい場合には、ものを美しく見えさせるが、ふさわしくない場合には醜く見えさせるのではないかね?」。——われわれは否定すべきでしょうか、それとも彼の言うことは正しいと、彼に同意すべきでしょうか?

ヒッピアス 少なくともこの点には、つまり、それぞれのものにふさわしければ、それはそれぞれのものを美しくする、という点には同意すべきだ。

ソクラテス 「ではどちらのほうがふさわしいかね」と彼は言うでしょう、「ひとが、いまさっきぼくらが言っていた土鍋の美しいのに、いっぱいうまい豆のスープをいれて煮ている場合に、その土鍋にふさわしいのは黄金の杓子(しゃくし)かね、それともいちじくの木で出来た木製のかね?」。

一三

E

ヒッピアス いやはや、君のしゃべっている人間は何たるやつだ! ソクラテス! それは誰なのか、ぼくに

言ってくれる気はないものかね？

ソクラテス　仮にその名を言ったところで、あなたはご存知ないでしょうからね。

ヒッピアス　ところがいまでさえ、ぼくはちゃんと知っているさ、無知蒙昧なやつだということはね。

ソクラテス　まったく厄介きわまりない男なのですよ、ヒッピアス。それにしても、われわれはどう言うべきでしょう？　豆のスープと土鍋にふさわしいのは、二つの杓子のうちのどちらだと？　それともそれはもう言うまでもなく、いちじく製のほうでしょうか？　これはきっとスープの香りを一段と引き立てるでしょうし、同時にまた、これは、あなた、土鍋をこなごなに壊したあげく、スープをこぼし、火を掻き消し、せっかくご馳走にあずかろうという人たちに、大へんすてきなご馳走を、ふいにさせてしまうようなことはしないでしょうからね。ところが問題の黄金製のときたら、いま言ったようなことをことごとく仕出かすでしょう。したがって、少なくともわたしの考えでは、いちじく製の杓子のほうが黄金製のよりはいっそうふさわしい、とわれわれは言うのがよいように思います。もしあなたに何か異存がなければですが。

ヒッピアス　いや、ソクラテス、そのほうがふさわしいことはいっそうふさわしいよ。でもぼくとしてはそんなことを質問するやつとはお互い、話なんかするつもりはないね。

ソクラテス　それはしごく当然ですとも、あなた。なぜといって、そのようなものの名を詰めこまれて耳を汚されることは、かくも美しい服装をし、美しい靴をはき、知恵のために全ギリシアじゅうに名声をうたわれているほどのあなたには、ふさわしかろうはずはないでしょうからね。でもこのわたしがそういう男とつき合ったっ

B

て、それはいっこうにかまわないわけです。ですから、あらかじめこのわたしに教えておいてください、そして

どうかわたしのために答えてください。

「さて、もしいちじく製の杓子のほうが、黄金製のよりいっそうふさわしいとあらば」と、その男は言うでしょう、「そのほうがまた美しくもあるのとちがうだろうか、いやしくも、ふさわしいものは、ソクラテス、ふさわしくないものより美しいということを君は認めた以上は」。われわれとしては、ヒッピアス、いちじく製のほうが黄金製のより、美しいということを認めるほかないのではありませんか？

ヒッピアス おのぞみなら言ってあげようか、ソクラテス、〈美〉を何であると言えば、君はもう、あれこれ議論しないですむか——。

C

ソクラテス ええ、ぜひとも。でもそれは、ついいましがたわたしが言っていた二つの杓子のうちで、ふさわしくもあり、いっそう美しくもあるのはどちらのほうだと答えたらよいか、言ってからのことにしてください。

ヒッピアス よろしい、君のおのぞみとあれば、いちじく製のほうだ、と彼に答えてやりたまえ。

ソクラテス ではいまこそ、たったいま、あなたが言おうとしていたことをおっしゃってください。というのは、「〈美〉とは黄金である」とわたしが主張すれば、黄金は、かならずいちじくの木より美しいということになるはずですが、それがいまの答えでは、どうやらけっしてそういうことにはならないでしょうからね。しかしいまや改めて、〈美〉とは何であるとおっしゃるのですか？

D

ヒッピアス ぼくの口から聞かせてあげよう。君は〈美〉とは何かこういったようなもの(1)——つまりいかなる場合にも、いかなる人にも、醜く見えるようなことはけっしてないものとして答えるのを求めているように、ぼく

には思えるからね。

ソクラテス ええ、そうですとも、ヒッピアス。そしていまこそまことに申し分なく、あなたは理解してくださいました。

ヒッピアス では聴きたまえ。というのは、いいかね、もしこれに反対をとなえられる人がいたら、このぼくたる者、何ひとつわきまえてはいない、と言ってもよいのだ。

ソクラテス ではおっしゃってください、お願いですからできるだけはやく。

ヒッピアス それなら言うが、いかなる人にも、いかなる場合にも、つねに最も美しいのは、裕福で健康で、E ギリシア人に尊敬され、老齢まで生き、自分の両親亡きあとこれを立派に弔い、そのあとで自分の子供たちによって、立派に、そして偉大な人間に似つかわしい仕方で埋葬されることだ。

一四

ソクラテス これは、これは、ヒッピアス、ほんとうに驚くばかりに、堂々と、そしてまたあなた自身にいかにも似合わしいおっしゃり様をされましたね。そしてヘラにかけて、あなたには感心しますよ、ご親切に、できるかぎりわたしを助けてくださるように思えるので。とはいえ、われわれはその男を仕留めてはいないのであっ

1 ヒッピアスはここではじめて〈美〉が普遍的なものでなければならないことに気づく。しかし次に見られるように、自分の言った言葉を片寄った自己流の意味で実際には使っている。

て、⑴いまこそ彼は思う存分われわれをあざけり笑うこと、請け合いです。

ヒッピアス それはまったく、ろくでもない笑いというものだね、ソクラテス。なぜなら、そのことに対して

292

何ひとつ抗弁できもしないのに笑うなら、彼はわれとわが身をあざけり笑うことになるのであり、居合わせる人人から自分のほうが嘲笑を買うことになるだろうからね。

ソクラテス おそらくそうでしょう。けれどもたぶん、少なくともいまあなたの言われたような答えをすれば、なんだかわたしにはそんな予感がするのですが、わたしはただ単に彼に嘲笑されるかもしれないばかりではないでしょう。

ヒッピアス ばかりではなく、いったいどうだって言うのだね？

ソクラテス こうなのです——もし彼がたまたま杖を手にしていたら、わたしが彼から逃げようとして逃げおおせないなら、彼はまぎれもなく、わたしに一撃くらわせようとするでしょう。

ヒッピアス なんだって？ そいつは君の主人か何かなのかい？ そんなことをしたら、拘引され、処罰されるようなことにはならないのかね？ それとも君たちの国では、正義がかえりみられず、市民が互いに不当にたたき合うのを許しておくのか？

B

ソクラテス いや断じて許してなどおきませんよ。

ヒッピアス それなら彼は、不当に君をたたくかぎり、罰せられるだろうが。

ソクラテス いいえ、わたしにはそうは思われませんね、けっして、ヒッピアス。少なくともそういう答えをすればですよ。いいや、たたくのは正当だとわたしとしては思いますね。

ヒッピアス それならぼくとてもそう思うさ、ソクラテス、張本人の君がそう思うからには。

ソクラテス それでは、どうして本人のわたしが、そのような答えをしたらたたかれるのは正当だと思うのか、そのわけもあなたに言いましょうか？ あるいは取り調べてもみないで、あなたもまたわたしをたたくでしょうか？ それとも弁明の余地を与えてくださるでしょうか？

C

ヒッピアス そう、そうしてあげないとしたら、大へんなことだろうからね、ソクラテス。だが君は何と言うつもりなのかね？

一五

ソクラテス わたしとしては、彼がわたしに対しては口にするでしょうような、荒っぽい変てこな言葉をあなたに向かっては直接つかわないために、さきほどとまったく同じやり方で、彼の役を演じてあなたに言ってみましょう。さて、いいですか、

「どうかぼくに言ってくれたまえ」と彼は言うでしょう、「ソクラテス、いったい君は、自分が打擲(ちょうちゃく)を受けるのが不当なことだと思うのかね――あれだけ長たらしいディテュランボス(2)を、あれほど調子はずれに歌い、質問の本題からまったくそれた答えをしておきながら？」。――「いったいどういうふうに、ぼくが質問からそれた答

1 287Aのソクラテスの言葉参照。

2 酒神ディオニュソス(バッコス)を讃える合唱舞踏歌。ここでディテュランボスと言っているのは291D～Eのヒッピアスの答えを指す。大げさな表現という意味でのこのことばの用法については『パイドロス』238D, 241E参照。

えをしたというのだね？」とわたしは言うでしょう。

「どういうふうにだって？」と彼は言うことでしょう、「君は覚えていられないのかね？　ぼくの質問していたのは〈美〉そのもの、もしそれがつけ加わるならそれがつけ加わった一切のものが、さっきの石であれ、木であれ、人間であれ、神であれ、どんな行為であれ、どんな学問であれ、みなことごとく美しくありうるところの、〈美〉そのものなのだよ。つまり、ぼくとしては、ええ、君、〈美〉というものがそれ自体として何であるかと尋ねているのだからね。しかもぼくは、君に聞こえるようにといくら声を大にして叫んでみたところで、てんで受けつけてもらえないこと、まるで石に、そう、ぼくのそばにデンと腰を据えている石、それも耳も脳ももたぬ碾臼(ひきうす)に、もの言うがごとくなんだからねえ」。

そこで、もしわたしがおそれをなして、その上さらにこう言うとしたら、ヒッピアス、はたしてあなたは気を悪くされないでしょうか？　「けれどもたしかに、それが〈美〉なのだと、ヒッピアスが言ったのだよ。しかもぼくはあのひとに、ちょうど君がぼくにしたのとまったく同じ仕方で、あらゆる人々にとって、そしてつねに、美しくあるものとは何ですか、と質問したのだ(1)」とね。

そうしたらあなたはどう言われます？　もしわたしがこう言うとしたら、あなたは気を悪くされるようなことはないでしょうか？

ヒッピアス　とにかくぼくにはよくわかっているのだ、ソクラテス、ぼくが言ったあのことは、あらゆる人々にとって美しくあり、かつそう思われもするだろうと。

ソクラテス　「はたしてこれからもそうあるだろうか？」と彼は言うでしょう、「というのも、思うに、〈美〉は

293

つねに美であるだろうからね」。

ヒッピアス　たしかに。

ソクラテス　「ではそうありもしたのではないかね？」と彼は言うでしょう。

ヒッピアス　そうありもした。

ソクラテス　「はたして、アキレウス(2)にとってもまた」と彼は言うでしょう、「両親よりあとで埋葬されるのが美しいことだと、エリスの客人は言ったかね？　それから彼の祖父のアイアコスにとっても、そのほか神々から生まれたかぎりの者たちにとっても、また神々自身にとってもそうだと」。

一六

ヒッピアス　何たることを言うのだ！　くたばってしまえ！　そんなやつの、こともあろうにそういう質問は、ソクラテス、神聖をけがそうというものだ。

ソクラテス　ではどうでしょう？　他の人が質問しても、それがそうだと主張するのは、まったく不吉で不敬ではありませんか？

1　291D参照。

2　アキレウスは次に述べられるアイアコス（ゼウスの息子）の子ペレウスと、テティスとの間に生まれた一子として神の後裔である。『イリアス』第九巻四一二行以下でみずから語っているように、トロイアの戦場にたおれて不滅の栄誉をかちうるか、戦わずして帰国して長寿を保つかの運命のもとにおかれているが、結局親友パトロクロスの仇を討ったのち、パリスに殺される。

ヒッピアス　たぶん。

ソクラテス　「それならたぶん」と彼は言うでしょう、「子供たちによって埋葬され、両親を埋葬することは、あらゆる者にとって、つねに、美しいと主張する君にしてもしかりだ。それとも、そのあらゆる者というなかには、その一人としてヘラクレス(1)も含まれているのではなかったのかね？　それからいましがた、ぼくたちが言っていた者たちも全部？」。

ヒッピアス　しかし神々にとっては、とぼくとしては言わなかったつもりだ。

B

ソクラテス　「英雄神たちにとってもそうではないと、どうやら言うつもりらしいね？」。

ヒッピアス　そう、少なくとも神々の御子であったかぎりの者には、そうではない。

ソクラテス　「しかし御子でなかったかぎりの者には、そうなのか？」。

ヒッピアス　たしかに。

ソクラテス　「してみると、君が改めて主張するところによると、どうやら英雄神のうち、一方タンタロス、ダルダノス、ゼトスにとっては、それは畏るべきこと、不敬なること、そして醜いことなのだが、他方ペロプスおよびその他そのような生まれの者たちにとっては、美しいことなのだね(2)」。

ヒッピアス　ぼくにはそう思える。

ソクラテス　「とすると」と彼は言うでしょう、「君がいまさっき主張していたこととはちがって、両親を埋葬したのち、子供たちによって埋葬されることは、時には、そしてある者たちにとっては、醜いことだというのが

C

君の見解なのだ。そしてどうやら、このことがあらゆる者にとって美しくあったし、また美しくあるということ

は、ますますもって不可能であるようだね。したがってこの規定は、先にわれわれの論じていたもの、すなわち乙女や土鍋の場合と同じことになるのであり、しかもいまの場合、なおさらおかしなことに、ある者にとっては美しいが、ある者にとっては美しくない、ということになっているのだ。そしてきょうに至ってもまだ君は」と彼は言うことでしょう、「ソクラテス、〈美〉について、それは何であるかという質問に答えられないのだね」。
もし彼に、上述のような答えをわたしがするなら、こうした非難やこれに類した非難をわたしがされても、けだし正当と言うべきでしょう。

一七

D とにかく大ていの場合、ヒッピアス、彼はほぼこんなふうにわたしと問答をします。けれども時には、わたしがものの実情にうとく、無教養なのを憐れむかのように、みずからわたしに問題のヒントを与えてくれて、〈美〉とはこれこれのものだとわたしに思われるかどうか尋ねることもあります。あるいはまたそのほか何であれ、たまたまそのとき問われている事柄や、論議の対象になっている事柄に関しても。

ヒッピアス それはどういうことかね、ソクラテス？

1 先のアキレウスと並んで、英雄神の別の例としてあげられている。

2 タンタロスはゼウスとクロノスの娘プルゥトとの間に生まれた子、ダルダノス(トロイア人の祖先)はゼウスとアトラスの娘エレクトラとの子、さらにゼトスはゼウスとアンティオペとの子というふうに、いずれもゼウスとそれぞれの母なる女神との間に生まれた子であるのに対して、ペロプスは英雄神タンタロスとディオネとの子供である。

ソクラテス　わたしがあなたに説明しましょう。「君は驚いた男だね、ソクラテス」と彼は言うでしょう、「そんなことを、またそんなふうに答えるのは止めたまえ――そんな答えはあまりにも無邪気すぎて、反駁されやすいものだから――むしろ次のようなものが美だと君に思われるかどうか考察してみたまえ。つまりそれは、黄金は、それがふさわしいものにとっては美しく、ふさわしくないものにとっては美しくないと、またそのほか、そのことがつけ加わったものはすべてそうだ（美しい）とわれわれが主張していた際、その答えのなかでわれわれがいまさっき捉えたものでもあるのだ。それで、この〈ふさわしいもの〉そのもの、〈ふさわしいもの〉そのものの本性、これがまさに〈美〉であるのではないかを考察してみたまえ」。

E

わたしとしてはたしかに、このようなことにはいつも賛成することにしているのですが――何と言ってよいかわかりませんからね――、しかしあなたとしてはいかがでしょう、〈ふさわしいもの〉が美だと思いますか？

ヒッピアス　むろんそうだとも、ソクラテス。

ソクラテス　よく調べてみましょう、何らかの点で、ひょっとして騙されるといけないから。

ヒッピアス　そう、調べてみなければならない。

ソクラテス　それならさあ、よく見てください。はたして〈ふさわしいもの〉とはこういうもののことをわれわれは言うのですか？　もしそれがそなわるなら、何であれそれがそなわる対象のそれぞれのものを美しく見えさせるもののことですか、それともじっさいに美しくあらしめるもののことですか、あるいはそのいずれでもないのですか？

294

ヒッピアス　少なくともぼくには、美しく見えさせるものだと思われる。ちょうどひとが着物なり靴なり似合

ったのを身につけていると、たとえおかしな姿のひとでも、より美しく見えるようにね。

ソクラテス　するといやしくも〈ふさわしいもの〉は、事物を、それがじっさいにあるよりも美しく見えさせるものなら、〈ふさわしいもの〉は美についての一種のまやかしではないでしょうか？　そしてこれは、われわれの探求しているものではないでしょう、ヒッピアス？　なぜなら、思うにわれわれが探求していたのはあのもの、つまりすべての美しいものがそれによって美しくあるところのものだったのですから。それはちょうど、すべて大きいものが、それによって大きくあるには、超過するものがあればよいのと同じことです。つまりすべてのものが大であるのはこの超過によるのであって、たとえそうは見えなくても、超過の実(じつ)があればそれらが大きくあることは必然だからです――、これとまったく同じような言い方を〈美〉についてもして、たとえそう見えようが見えまいが、とにかくそれによってあらゆるものが美しくあるところの、その〈美〉とは、いったい何なのでしょう？　それは〈ふさわしいもの〉ではありえないでしょうからね。なぜなら〈ふさわしいもの〉は、あなたのお説によると、事物がじっさいにあるよりは美しく見えさせるのであって、じっさいにあるとおりのものとして見えることを許さないのですから。このようなものに引きかえ、われわれは、ついいましがたわたしが言ったように、そう見えようが見えまいが、美しくあらしめるもののほうを、それは何なのか言うようにつとめなければなりません。われわれの探求しているのは、いやしくも〈美〉を探求しているのなら、そういうもののはずですからね。

ヒッピアス　しかし〈ふさわしいもの〉は、ソクラテス、それが現にそこにあれば、ものを美しくあらしめもするし、そう見えさせもするがね。

ソクラテス　してみると、見えさせるものが現にそこにあるかぎり、ほんとうに美しくあるものが、美しくあ

るように見えない、などということはありえないのですね？

ヒッピアス　ありえない。

一八

ソクラテス　それではわれわれはこういうことを認めるでしょうか、ヒッピアス、すべてほんとうに美しいものは、法習にしてもいろいろな営みにしても、つねに、あらゆる人々に、美しくあると思われもするし、見えもするのでしょうか？　それとも全然逆で、それらについて人々は無知であり、そして何にもましてそれらについては、私的には各人のあいだで、公けには国と国とのあいだで、いさかいや争いがあるのでしょうか？ D

ヒッピアス　どちらかといえば後者のほうだ、ソクラテス。それらについては人々は無知である。

ソクラテス　少なくとも美しく見えるということがそれらのものの上につけ加わってあるとすれば、それはそうではないでしょうよ。しかるにいやしくも〈ふさわしいもの〉が美であり、かつ、美しくあらしめるばかりでなく、そう見えさせもするとするならば、その見えるということはそれらのものの上につけ加わって、現にそこにあるはずです。したがって、一方、〈ふさわしいもの〉がもし事物を美しくあらしめるものであるならば、それはわれわれの探求している〈美〉であることになるでしょうが、しかし少なくともけっして見えさせるものではないでしょう。ひるがえって他方もし、〈ふさわしいもの〉が、見えさせるものならば、それはこんどは、われわれの探求している〈美〉ではありえないでしょう。なぜならば、われわれの探求している〈美〉は、事物を美しくあらしめるのですが、ただ美しくという場合にかぎらず、他のどのような場合にせよ、同じものがそう見えさせもするし、 E

あらしめもする、というのはけっしてできないことでしょうから。かくてどちらを選んだものでしょうか――〈ふさわしいもの〉は美しく見えさせるものだと思いますか、それともそうあらしめるものだと思いますか？[1]

ヒッピアス　見えさせるものだ、少なくともぼくの考えでは、ソクラテス。

ソクラテス　それは大へんだ！　してみると、ヒッピアス、〈美〉とはいったい何であるか知ることは、このわれわれのところから逃げて行ってしまっていますよ、〈ふさわしいもの〉は美とは何かちがうものだということがはっきりしてしまった以上は。

ヒッピアス　ほんとうにねえ、ソクラテス、ぼくとしてはまったく心外というほかない。

ソクラテス　けれども、ねえ、あなた、まだそれを断念しないようにしましょう。というのはわたしにはまだなお、〈美〉とはいったい何であるか、明らかになるかもしれないという一抹(いちまつ)ののぞみがあるものですから。

ヒッピアス　もちろんだとも、ソクラテス。それを発見するのはむずかしいわけでもないしね。ぼくには間違いなくわかっているが、もうしばらくのあいだ一人きりになって、自分だけで考察してみれば、比類ない正確さをもって、君にそれを言ってあげることができるだろうよ。

一九

ソクラテス　ああ、大きなことを、ヒッピアス、おっしゃるものではありません！　われわれはこの問題にも

1　この個所の読みはハインドルフに従い καὶ εἶναι ποιεῖν と読む。

B うすでにどのくらい悩まされてきたか、見てもごらんなさい。それはまたもやわれわれに腹を立てて、ますます逃げて行くのではないでしょうかねえ。いやこれは無意味なことを申しました。じっさい、あなたは一人になれば、わけなくそれを発見するでしょうと思いますからね。けれどもお願いですから、わたしの目の前でそれを見つけ出してください。そしてもしよければ、いまと同じように、わたしといっしょに探求してください。そしてもしわれわれが発見すれば、それはもうそれに越したことはないでしょう。が、もしそうはいかないなら、その時にはわたしはわたしのめぐりあわせに甘んじようと思いますし、あなたはあなたで、立ち去ってからわけなく発見されるだろうと思います。それに、もしいまわれわれが発見するなら、あなたが一人で見つけ出したものを、「それは何でしたか？」と、あとで質問してあなたにうるさがられるようなことは、なくてすむでしょう。

C しかしともかく、あなたのお考えでは〈美〉はそれ自体として何であるか、どうか見てください。では言いますが、これが——いや、たわけたことを言わないように、わたしによく注意をはらって、用心していてくださいよ——つまり〈有用であるかぎりのもの〉、これがわれわれの言う美だとしましょう。わたしがこう言ったのは、次のことから推断してのことです。われわれは言いますね、目が美しい、と。この場合の目は、見ることが不能であるような、そのようなものと思われる目のことではなく、見るということに関して、有能で有用な目のことです。そうでしょう？

ヒッピアス　そう。

ソクラテス　するとまた、からだ全体にしても、そういう意味で美しいとわれわれは言うのではありませんD か？　あるものは走ることに関して、あるものは相撲に関してそうなのをね。それからまたすべての動物も——

馬も、鶏も、鶉も(1)――、それにすべての調度品も、陸上、海上の乗物も、海上のは商船も三段櫂の軍船も、それからまたすべての器具にしても、楽器用のも、その他の技術用のも、さらにいろいろな営為も、法も、ほとんどこれらすべてのものを、同じ意味でわれわれは美しいと呼ぶのではありませんか？ それらの各〻のものに関して、それが本来どのようであり、どういうふうに作られ、どういうように定められているかという点に着目して、どの点で有用か、何のために有用か、どういう場合に有用かという観点からして、〈有用なもの〉をわれわれは美しいと言い、それらすべての点で〈無用なもの〉は醜いと言います。あなたにもそう思われませんか、ヒッピアス？

E

ヒッピアス ぼくにもそう思われるさ。

二〇

ソクラテス してみると、いまやわれわれは、何にもまして〈有用なもの〉が美であると言って正しいですか？

ヒッピアス 正しいとも、ソクラテス。

ソクラテス それでは、それぞれのことをなしうる能力のあるものは、その能力をそれのためにもつそのもののために、また有用でもあるが、能力のないものは無用なのではありませんか？

ヒッピアス たしかに。

---

1 シャンツに従い、原文295D1の καλόν を削除する。すなわち「美しい馬も、鶏も……」とはせぬ。

296

ソクラテス　すると、有能は美だが、無能は醜なのですか？

ヒッピアス　まぎれもなくそうだ。じっさい、ソクラテス、それがそうだとぼくらに証言してくれるものはほかにもありはするが、しかし国家公共に関わることは、とりわけそうだからね。つまり国家公共の事柄や自分自身の国において、実力者であるということは何にもまして美しいことだが、無能な者であることは何にもまして醜いことなのだ。

ソクラテス　よいことを言ってくださいました。それでは、神々に誓って、ヒッピアス、知恵もまた、そういう理由で何にもまして美しく、無知は何にもまして醜いのですか？

ヒッピアス　それはそうだが、しかし君はいったい何を考えているのだね、ソクラテス？

ソクラテス　まあまあお静かにねがいます、あなた。実を言うと、いったい今度はまたわれわれは何を言おうとしているのやら心配なものですから。

B

ヒッピアス　だがまた改めて何が心配なのだね、ソクラテス？　今度こそ、君の論議は申し分なく美しく進められてきているがね。

ソクラテス　そうあってほしいものです、がどうかわたしといっしょに次の点をよく考察してみてください。はたして人は、自分が知りもしないし、全然その能力もないことを、何かすることができるでしょうか？

ヒッピアス　けっしてできないさ。ほかならぬそうする能力のないことを、どうしてすることができようか。

ソクラテス　すると、心ならずも、過ちを犯し、悪いことを仕出かしたり、行なったりする人たち、そういう人たちは、もし仮にそういうことをする能力がないならば、けっしてそんなことはしないでしょう？

C

ヒッピアス むろんそうだ。

ソクラテス しかるに、能力のある人々がそうする力があるのは、ほかならぬ能力(有能さ)によってです。無能さ(無力)によってなどということは絶対にありえないでしょうからね。

ヒッピアス けっしてそんなことはありえない。

ソクラテス しかし、何ごとかを行なう人たちはみな、彼らの行なうことをする能力があるのですね?

ヒッピアス そう。

ソクラテス しかるに、人々はみな、子供のとき以来、心ならずも、善いことよりもはるかにたくさん悪いことを行ない、過ちを犯しています。

ヒッピアス それはそうだ。

ソクラテス それではどうでしょう? そういう能力(有能さ)や、そういう、何か悪いことを仕出かすのに役立つという意味で〈有用なもの〉、それをはたしてわれわれは美であると言ってよいでしょうか、それともそれはとんでもないことですか?

D

ヒッピアス とんでもないことだ、少なくともぼくの思うところでは、ソクラテス。

ソクラテス してみると、ヒッピアス、〈有能〉とか〈有用〉というのは、どうやらわれわれの求めている〈美〉ではないようですね。

ヒッピアス いや、そんなことはないさ、ソクラテス、少なくとも有能とか有用というのが、善いことをする能力があり、またそういうことにかけて有用である場合には。

二

ソクラテス　そうなるといまや、あの、〈有能にして有用なもの〉は無条件に美であるということは消えてなくなってしまいました。しかし、とすると、あれはこういうことだったのですか、ヒッピアス？　われわれの本心が言わんとしていたのは、〈何か善いことをすることにかけて有用にして有能なもの〉、これが美である、と、こういうことだったのですか？

E

ヒッピアス　少なくともぼくにはそう思える。

ソクラテス　しかるに、そのようなものは有益である。それともそうではありませんか？

ヒッピアス　たしかにそうだ。

ソクラテス　かくて美しいからだも、美しい法習も、知恵も、それからわれわれがいまさっき言っていたものもみな、そういう意味で、つまり有益なるがゆえに、美しい。

ヒッピアス　明らかにそうだ。

ソクラテス　してみるとどうやらわれわれには、〈有益なもの〉が美であるように思われますね、ヒッピアス。

ヒッピアス　むろんそうだとも、ソクラテス。

ソクラテス　しかし、〈有益なもの〉というのはとりもなおさず、善きものを作り出すものです。

ヒッピアス　ええ、そうだ。

ソクラテス　しかるに作り出すものとは、ほかならぬ原因以外の何ものでもない。そうでしょう？

ヒッピアス　そのとおり。

ソクラテス　すると、美は善の原因です。

ヒッピアス　それはそうだ。

ソクラテス　しかし、ヒッピアス、原因と、原因がそれの原因であるところのものとは別々のものです。なぜなら原因が原因の原因だなどということはありえないでしょうからね。次のようにして考察してみてください。原因というのは明らかに、作り出すものだったのではありませんか？

ヒッピアス　たしかに。

ソクラテス　では作り出すものによって作り出されるのは、作り出されるもの以外の何ものでもないのであって、作り出すものではないのではありませんか？

ヒッピアス　それはそうだ。

ソクラテス　それでは作り出されるものと、作り出すものとは何か別々のものではありませんか？

ヒッピアス　そう。

B

ソクラテス　それゆえに、原因というのは原因の原因ではなく、それによって作り出されるものの原因です。

ヒッピアス　たしかに。

ソクラテス　そうすると、もし美が善の原因なら、善は美によって作り出されるものでしょう。そしてどうやらわれわれが知恵にせよ、その他すべての美しいものにせよ、熱心に追求するのは、まさしくそうした理由によるようですね、つまり、それらが作り出す産物や生みおとす子供――すなわち善――は、熱心に追求されるに値

するからです。それにまたわれわれが発見したことから判断すると、美は善の、いわば父親とでもいうべきものに当たるらしいからなのですね。

C

ヒッピアス　たしかにそうだとも。じっさい君の言っていることはもっともなことだからね、[1]ソクラテス。

ソクラテス　ではこういう点ももっともではありませんか、父は息子ではないし、息子も父ではないという点も？

ヒッピアス　もっともだとも。

ソクラテス　それからまた、原因は作り出されるものではないし、また作り出されるものも原因ではない。

ヒッピアス　君の言うとおりだ。

ソクラテス　ゼウスに誓って、ねえあなた、してみるとなんと、美は善ではないし、また善も美ではない！それともあなたには、これまでに言われてきたことからして、こういうことはありうることだと思われますか？

ヒッピアス　いや、断じて、ぼくにはありうることだとは思えない。

ソクラテス　ではわれわれはそれに満足して、美は善ではないし、また善も美ではない、などと言う気になるでしょうか？

ヒッピアス　いや、断じて、ぼくにはそんなことはとうてい満足できないね。

D

ソクラテス　ええ、それはもうそうでしょうとも、ヒッピアス。このわたしにしたところで、これまでにわれわれが論じてきたどの言説にもまして満足できません。

ヒッピアス　それはそうだろうとも。

二三

ソクラテス　してみると、われわれには、いまさっきは、〈有益なもの〉、すなわち〈有用にしてまた何か善いことをなしうる能力のあるもの〉が美である、という言説が言説のうちでいちばん美しいと見えていたのが、どうもそれがそうではないようで、ことによるとこの言説はおそらく、〈美〉とは乙女だとかそのほか先に挙げられたそれぞれのものだとかわれわれが考えていたところの、あの最初の言説以上に笑止千万なものかもしれませんね。

ヒッピアス　どうもそうらしい。

ソクラテス　それに、わたしとしては、ヒッピアス、どちらに方向転換したらよいか、もはやわからなくなって、行詰ってしまいました。でもあなたは、何かおっしゃることができますか？

E **ヒッピアス**　さしあたっていまのところはできない。しかしさいぜんも言っていたように、(2)じっくり考えてみたうえでなら発見するだろうということは、よくわかっているがね。

ソクラテス　けれどもわたしとしては知りたくてたまらないものですから、あなたが先へ延ばすのをとても待っていられそうもありません。それにともかくたったいま、まさしく何か打開策が見つかったような気もしますしね。とにかく見てください。――

1　ヒッピアスはソクラテスの譬えを指してこう言っている。　2　295A.

もしわれわれを喜ばせるもの——とはいってもそれはけっしてすべての快楽に関してではなくて、聴覚と視覚を通じて喜ばせるものですが——それが美であると主張するとしたら、それによって、われわれの論争はどういう首尾となるでしょうか？　じじつたしかに、ヒッピアス、美しい人間にしても、それからまた刺繡、絵画、彫刻塑像と、何であれ美しいものはみな、それを見る場合にわれわれを喜ばせてくれるように思います。また美しい音声も、おしなべて音楽も、言説も、物語も、これと同じ効果をもたらします。したがって、もしわれわれがあのがさつな人間に、「ねえ、君、美とは〈聴覚と視覚を通じての快〉だ」と答えるならば、われわれは彼のがさつな態度を抑制することができると思いませんか？

298

B **ヒッピアス**　ぼくにはとにかく、ソクラテス、今度こそ〈美〉の何たるかがみごとに言われたように思える。

ソクラテス　ではどうですか？　いったい美しい営みや法は、ヒッピアス、〈聴覚ないし視覚を通じての快いもの〉だからこそ美しい、とわれわれは言うのでしょうか、それともこれらは、それとは違った何か別の種類のものだと主張すべきですか？

ヒッピアス　そう。でもたぶん、ソクラテス、そういうものは、その人間の注意をひくこともあるまい。

ソクラテス　いいえ、犬にかけて、ヒッピアス、それがそうはいかないのですよ。とにかく相手は、このひとを前にして、たわごとを言ったり、無意味なことを言いながら何かひとかどのことを言っているふりをしたりするのを、わたしがとりわけ恥ずかしく思うような人間なのですからね。

C **ヒッピアス**　それは誰なのだね？

ソクラテス　ソプロニスコスの子です。(1)　彼はわたしに、知らないことを知ったかぶりに言うのはもとより、そ

れらをよく吟味してもみないで軽々しく口にするのも、けっして許しはしないでしょう。

ヒッピアス それならたしかに、君に言われてみると、ぼく自身にもまた、この法に関するものは、何か別のものだと思われる。

二三

ソクラテス あせらないで、ヒッピアス。どうやらわれわれは、美についてさっきとちょうど同じ行詰りにおちいっていながら、何か別の打開策があるように思っているらしいですから。

ヒッピアス それはどういうことだね、ソクラテス？

ソクラテス このわたしに見えているところを、わたしはあなたに説明してみましょう、――ひょっとしてわたしの言うことに一理あるかもしれません。つまり、これら法や営みに関するものは、聴覚と視覚を通じてわれわれに与えられる感覚と無関係ではないことが判明するかもしれません。けれどもわれわれは、この、法に関わるものは、議論の中心には一切もちださないで、〈これらの感覚を通じての快いもの〉が美である、というこの言説にあくまでも直面しつづけましょう。

しかし、もしわれわれに、わたしの言うその男にせよ他の誰にせよ、こう尋ねるとしたらどうでしょう？「ではなぜ、ヒッピアスにソクラテス、君たちは快のうちから君たちが美しいと言うかぎりの、そのかぎりでの快を

D

1　ソクラテス自身を指す。

(298)
E

区別して取りだしたのに、他方で、そのほかの諸感覚に従う快、つまり食物や飲物や性のよろこびや、その他そういった類いのものに関係のある諸感覚に従う快のほうは、美しいと言おうとしないのかね？　それともそれらは快いものでもなんでもないし、またそうした類いのもののなかには、つまり見ることと聞くこと以外のもののうちには、快楽などというものは全然ないと主張するのかね？」と。——われわれは何と言うべきですか、ヒッピアス？

ヒッピアス　むろんのこと、ソクラテス、他のもののうちにも非常に大きな快楽があると言うべきだ。

299

ソクラテス　「ではなぜ」と彼は言うでしょう、「あのものに劣らずそれらが快楽なのに、君たちはそれらを美という名称で呼ぶことを拒み、それらから美であるという資格を剥奪しているのかね？」と。——「そのわけはね」とわれわれは言うでしょう、「もしわれわれが、食べることは楽しいと言わずに美しいと言ったり、芳しい香りがするのは快いと言わずに美しいと言ったりしたら、誰一人としてわれわれを笑わない者はいないだろうからだ。また思うに性のよろこびに関わることにしても、それはきわめて快いことではあるけれども、その行為をひとがじっさい行なう場合には、人目に立たぬように行なわなければいけない、人目にふれることはいたって醜いことだから、と誰もかれもわれわれに向かって強く主張するだろうからね」。

——こうしたことをわれわれが言えば、ヒッピアス、「それでこのぼくにもわかった」とおそらく彼は言うでしょう、「さっきから君たちが、これらの快楽が美しいと言うのを恥ずかしがっていたわけが。つまりそれは世

B

人にそうは思われないからなのだね。ところがぼくが質問していたのはけっしてそういう、多数の人々に美しいと思われるものなどではなくて、美しくあるものなのだ」。——そうしたら思うにわれわれは、われわれが前提

として初めに掲げた言説(1)をそっくりそのまま言うでしょう、「われわれとしては快のうちのこの部分、つまり〈視覚と聴覚によって生ずる快感〉、これが美だと主張する」とね。あなたはまだこの説を用いることができますか、ヒッピアス？　それともわれわれはこれとは何か別のことを言うべきですか？

ヒッピアス　その男のそういう質問に対しては、ソクラテス、どうしてもそれとは何か別のことを言うわけにはいくまい。

二四

C

ソクラテス　「それは結構」と彼は言うでしょう、「すると、いやしくも〈視覚と聴覚を通じての快いもの〉が美なら、快いもののうちでそうしたものでないものは美ではないだろう——ということは言うまでもないわけだね？」。——われわれは賛成すべきですか？

ヒッピアス　そう。

ソクラテス　「ではたして視覚を通じての快いものは」と彼は言うでしょう、「視覚と聴覚とを通じて快いのかね？　あるいはまた、聴覚を通じての快いものは、聴覚と視覚とを通じて快いのかね？」と。——「いや、けっして」とわれわれは言うでしょう、「それら一方を通じてのもの、それが、それら両方を通じてのものであるなどということはないだろう——君の言おうとしていることはそういう意味だとわれわれには思えるからね——、

1　298 A.

それ自体としてみても美しいし、両者合わせても美しい、ということだったのだ」。――われわれはそういうふうに答えるべきではありませんか？

D

ヒッピアス　たしかにそうだ。

ソクラテス　「それでははたして」と彼は言うでしょう、「何であれ快いものが、何であれ快いものと異なるのは、このかぎりにおいて、つまり快いというかぎりにおいてなのかね？　ぼくの質問の意味は、ある快楽(A)がある快楽(B)と異なるという場合、両者(A、B)の間に大小、多少の違いがあるかどうかではなく、一方(A)が快楽であり、他方(B)は快楽でないという点で異なるかどうかが、はたして問題となるのだろうか、ということなのだ」。――「少なくともわれわれにはそうは思われない」。――そうではありませんか？

ヒッピアス　そう。じっさいそうは思えないものね。

ソクラテス　「それでは」と彼は言うでしょう、「いま言った両快楽を、その他の快楽から君たちが区別して選び出したのは、前者が快楽であるからというのとは違った何か別の理由によるのではないかね？　それら二つの快楽には何かこのような性質があるのを見て、すなわちそれらには君たちがそれに着目してそれらが美しいと主張するところの、そのほかの快楽とは何か違ったところがあるのを見て、選び出したのでは？　というのは、思

E

うに、視覚を通じての快楽が美しいのは、このゆえに、つまりそれが視覚を通じるがゆえにではないだろうからね。なぜといって、もしこのことがそれが美しくあることの原因だとしたら、もう一方の、聴覚を通じての快楽のほうは、けっして美しくはないだろうからだ。じじつとにかく、これは視覚を通じての快楽ではないからね」。

——「君の言うことはほんとうだ」とわれわれは言うべきですか？

ヒッピアス そう、言うべきだ。

300

ソクラテス 「他方また聴覚を通じての快楽のほうも、それが聴覚を通じるからという、そういう理由で美しいのでもない。なぜなら、もしそうなら、こんどは視覚を通じての快楽が、けっして美しくはないことになるだろうから。じじつとにかく、これは聴覚を通じての快楽ではないからね」。——その男がこう言う場合、ヒッピアス、彼は真実を言っているとわれわれは言うべきですか？

ヒッピアス そう、真実を言っている。

ソクラテス 「しかるに、君たちの主張では、それらの快楽は両方としても美しい」。——われわれは肯定しますか？

ヒッピアス 肯定する。

B

ソクラテス 「してみるとそれらには、それらを美しくあらしめている何か同一のもの、言いかえれば、それら両方に共通にそなわってもいるし、それぞれに個別的にそなわってもいるような、そうした共通のものがあるのだ。さもなければ、両方としても、それぞれとしても、美しい、ということはきっとありえないだろうから」。——彼に答えるつもりでこのわたしに答えてください。

ヒッピアス 答えよう。ぼくにも君の言うとおりだと思われるよ。

ソクラテス すると、もしこれらの快楽が、両方としては何かある性状をしているが、それぞれとしてはしていないなら、少なくともその性状によってそれらは美しいのではないでしょう。

ヒッピアス　いったいどうしてそんなことがありえよう、ソクラテス、二つのうちそれぞれどちらも何らかの性状をもっていないというのに、両方としては、それぞれがもっていないその当の性状を、もち合わせているなどということが——。

C

ソクラテス　あなたは、そういうことがありうることだと思いませんか？

ヒッピアス　いや。というのはもしそういうことを認めるならば、ぼくはそうしたものの本性も、現に行なわれているような議論の論じ方も、まったく心得ていない者だということになるだろうからね。

二五

ソクラテス　これはおみごとな、ヒッピアス。しかし、わたしとしてはおそらく、あなたがありえないことだと言われるようなことを何か見ていると思っているらしいのです。が、実は何も見ていないわけなのでしょう。

ヒッピアス　らしいではなくて、ソクラテス、君はまったく明らかに見まちがえているのさ。

ソクラテス　ところがたしかに、わたしの心にはそのような場合の例がたくさん見えています。けれどもそれらをわたしは信用しはしません。なぜなら知恵によって当今の誰よりも多額の金銭をかせいだあなたという方には見えないで、いまだかつてびた一文かせいだことのないこのわたしに見えることですからね。それに、ねえ、あなた、わたしはあなたがわたしをからかって、故意にあざむいているのではないかという気がしきりにするのですよ。それほどまでにそれらはありありと、おびただしくわたしに見えているのです。

D

ヒッピアス　ソクラテス、もし君が、君に見えているという、そうした事柄を言おうとつとめるなら、ぼくが

からかっているかいないか、誰よりも当の君自身がいちばんよく知るはずだ。君は無意味なことを言っているのだということが判然とするだろうからね。つまり君は、ぼくも君ももち合わせていない性状、それをわれわれ両人としてはもち合わせている、などということを見いだすようなことはけっしてあるまいからね。

E

ソクラテス　どういうことをおっしゃっているのですか、ヒッピアス？　おそらくあなたは一理あることを言っているのでしょうが、わたしにはわかりかねます。が、わたしの言わんとするところを、わたしの口からもっとはっきり聞いてください。つまりわたしも、そうあることを性状としてもってもいないし、現にそうありもしない、またあなたにしてもそうありもしないそういう性状、それをわれわれ両人としてはもち合わせている、ということがありうることだとわたしには思えるのです。他方逆にまた、われわれ両人としてはそうあることを性状としてもっているもので、われわれのいずれもないということもね。

301

ヒッピアス　君はどうも、ソクラテス、またしても、もう少し前の君の答えよりもさらにはなはだしい奇怪な答えをしているようだ。いいかね、よく考えてもみたまえ。それそもわれわれ両人が正しいなら、われわれ各人としてもまた正しいのではないだろうか？　あるいはもしわれわれ各人が不正なら、両人としても不正なのではないだろうか？　あるいは両人が健康なら、各人としても健康ではないだろうか？　あるいはもしわれわれ各人が何かしら体を悪くしていたり、怪我をしていたり、打撲していたり、あるいはその他何であれ患いを身に受けているとしたら、そうした患いをわれわれ両人としてもまた身に受けているのではないだろうか？　さらにもしわれわれ両人が黄金であるとか、銀であるとか、象牙であるとかするなら、またなんなら高貴の生まれであるとか、賢いとか、名誉があるとか、あるいは年をとっているとか、若いとか、あるいはその他、人間の身の上に見

受けられるもののどんなことでもよいが、そうした何かでたまたまあるならば、われわれ各人としてもまたそういうものであるのは、必然性の大なることではないかね？

B

ソクラテス　むろんそうですとも。

ヒッピアス　だいたい君はいけないのだ、ソクラテス、事物の全体をよく見てみないのだからねえ。君のみならず、君がいつも問答をするのを習わしとしているあの連中にしてもだが。――全体をよく見ないで、君たちは美や存在する一つ一つのものを〔全体から〕抜き取って、議論のなかで細かく切り分けて、験(ため)してみるのだから。それゆえにこのように、本来大きくて連続したものである実在の全体が、君たちには気づかれないのだ。そしていまもいまとて、それに君は気づいていないことかくのごとしで、いま言ったようなものの両方に関しては同時

C

にあるのに、それぞれに関してはないとか、もしくは逆に、それぞれに関してはいずれにもあるのに、両方に関してはないといったような、何かものの性状なり、在り方なりがあると君は思っているといったありさまなのだ。これほどまでに君たちときたら考えることに理を欠き、思慮が足りず、単純、無知なのだ。

二六

ソクラテス　われわれの身の上のことは、ヒッピアス、人々がよく口にするあの諺(ことわざ)にあるように、「希(ねご)うがごときものならず、能(あと)うかぎりのもの」ですよ。でもあなたに忠告していただいて、いつもわたしたちには為になるのです。げんにいまも、あなたにこうしたことを忠告していただかなかったうちは、わたしたちがどんなに愚直な心情にあったか、このうえなおあなたに披露しましょうか――これらの問題についてわれわれが考えていた

D ところをお話しして。それとも言うには及びませんか？

ヒッピアス 知っている者に君は言うことになるだろうがね、ソクラテス。ぼくには言論に携わる人たちが各各どういう心情か、よく知っているからね。しかしまあ、もし君にそのほうがいくぶんでも望ましければ、言いたまえ。

ソクラテス ええ、それはもう、そのほうが望ましいですとも。わたしたちは、すぐれた人よ、あなたがそれ(1)を言ってくださらないうちは、これほどまでに馬鹿だったのです、――わたしとあなたについて、われわれの各各は一人だが、両人としては、われわれの各々がそうであるようなものではありえないだろう――なぜなら、われわれは一人でなく二人なのですからね――と、このような考えをもっていたほどわたしたちは愚直だったのです。

E ところがいまではもはや、あなたからもっとよく教えていただきました、――もしわれわれ両人が二人ならば、われわれ各人も必ず二人でなければならないし、各人が一人なら両人としても一人でなければならない、と。(2) というのはヒッピアスによるところの存在の寸断されない連続性をもった規定にしたがえば、そうではない別の在り方はありえないのであって、もし両方がそれであるならば、それぞれとしてもそのものであり、またもしそれぞれがそれであるならば、両方としてもそのものでなければならないのですから。

1 300E～301A を指す。

2 ソクラテスはここで論点を質から量の問題に転じている。「美しい」「正しい」といった質的属性の場合と違って、一、二、奇数、偶数というような量的属性は「両方」と「それぞれ」に同等には当てはまらない。

302

かくていまやわたしは、あなたにすっかり説き伏せられて、ただここにこうしてじっと坐っているばかりです。ただ、ヒッピアス、その前に次の点に関してわたしに思い出させてください、――わたしとあなたとでは一人なのですか？　それともあなたは二人であり、わたしも二人なのですか？

ヒッピアス　何のことを言っているのかね？　ソクラテス。

ソクラテス　まさにお聞きのとおりのことですが。実はわたしははっきり申しあげるのがこわいのです(1)。あなたはご自分が何か一理あることを言っていると信ずる場合にはいつも、わたしに腹を立てますからね。それでもなお、どうか言ってください。われわれ各人は一人であり、そしてまたそれを、つまり一人であるということを、性状としてもっているのではありませんか？

ヒッピアス　たしかに。

ソクラテス　ではいやしくも一人なら、われわれ各人はまた奇数でもあるのではありませんか？　それとも一は奇数とは考えませんか？

ヒッピアス　考えるとも。

ソクラテス　はたしてそれでは、両人としても奇数ですか？　われわれ両人は二人ですが。

ヒッピアス　そんなことはありえない、ソクラテス。

ソクラテス　そうではなくて、両人としては偶数である。そうでしょう？

ヒッピアス　むろん。

B

ソクラテス　ではよもや、われわれ両人が偶数であるからといって、そのために各人としてもまた偶数である

ということはありますまいね？

ヒッピアス　いや、けっしてない。

ソクラテス　してみると、いまさっきあなたが言っておられたように、[2] もし両人がそれであるなら、各人としてもそのもので必ずなければならないし、また各人がそれであるならば、両人としても必ずそのものでなければならないという絶対的な必然性はないわけですね？

ヒッピアス　たしかにその種のものはそうでないかもしれないが、ぼくが先に言っていたようなものはそうだ。

二七

ソクラテス　それで充分ですよ、ヒッピアス。あるものはそうだが、あるものはそうでないということがはっきりしたからには、それだけでも結構満足なわけですから。なぜなら、わたしが先に言っていたのは、[3] この議論のきっかけとなった最初のところをあなたが覚えておられるなら、こういうことだったのですからね、視覚および聴覚を通じての快楽が美しいのは、これら両快楽のそれぞれはそうあることを性状としてもっているが、両方としてはいない、あるいは両方としてはもっているが、それぞれとしてはいないところのもの、そういうものによるのではなくて、あの、両方としても、それぞれとしても、そうあることを性状としてもっているものによる

C

1　ハインドルフに従い 301E10 の σε を削除する。その意味は、「わたしはあなたにあからさまに言うことを恐れる」と解する。

2　301A.

3　299D～E.

のだ――というのは、あなたはこれら〔視覚と聴覚を通じての快楽〕は両方としても、それぞれとしても美しいということを認めていたわけですから(1)――と、こういうことでしたからね。かくてそれゆえにわたしは、いやしくも両方が美しいなら、両方にじっさいに随伴しているもの、そのものによってそれらは美しくなければならないのであって、いずれか一方においては欠けているものによるのではないと思っていました。そしていまも依然としてそう思っています。

D　しかしどうか新規まきなおしのつもりで言ってください。視覚を通じての快楽と聴覚を通じての快楽は、いやしくもそれらが両方としてもそれぞれとしても美しいなら、それらを美しくあらしめているものもまた、それら両方にも、それぞれにも、随伴しているのではありませんか？

ヒッピアス　たしかに。

ソクラテス　それではたして、それぞれとしても両方としても快楽であるという、そういう理由でそれらは美しいのでしょうか？　それとも、そんな理由によるのだったら、これら以外の快楽だってまたみなことごとく、これらに劣らず美しいのではないでしょうか？　というのはこれらに劣らずそれらの快楽もまた、快楽であることがわかった(2)のですからね、もしあなたが覚えておられるなら。

ヒッピアス　覚えている。

E　**ソクラテス**　むしろこれらの快楽は、視覚と聴覚を通じるという、まさしくこのことのゆえに、美しいと言われていました。

ヒッピアス　そう、たしかにそういうふうに言われた。

303

ソクラテス　ではわたしの言うことがほんとうかどうか、よく考察してみてください。わたしの記憶しているところでは、これが、つまり全部のではなくて〈視覚と聴覚を通じるかぎりの快〉が、美であると言われていました。

ヒッピアス　それはほんとうだ。

ソクラテス　すると、ほかならぬ、この〔視覚と聴覚を通じて快いという〕性状は、これらの快楽の両方には伴うが、それぞれには伴わないのではありませんか？　なぜならこれら両快楽のそれぞれは、さきに言われていたとおり、両感覚を通じてのものではないでしょうから。そうではなくて、両感覚を通じるのは、両方であって、いずれか一方ではありませんからね。そうでしょう？

ヒッピアス　そうだ。

ソクラテス　してみると、それらの快楽のそれぞれが美しいのは、それぞれには随伴しないようなものによるのではありません、——じっさい〈両方〉は〈それぞれ〉には随伴しませんからね。よって、われわれの前提に従うと、これらは両方としては美しいと言うことは許されますが、それぞれひとつひとつは美しいと言うことは許されません。それともわれわれはどう言いますか？　どうしてもそうなるのではありませんか？

ヒッピアス　そのように思われる。

1　300A.

2　299D.

二八

ソクラテス　それでは両方は美しいと主張するが、それぞれは美しくはないとわれわれは主張してよいでしょうか？

ヒッピアス　かまわぬのではないかね？

ソクラテス　少なくともわたしには、あなた、こういうさしさわりがあると思われますが。つまり、両方にそなわっていればそれぞれにもそなわり、またそれぞれにそなわっていれば両方にもそなわっているというように、そういう仕方で一々の場合に事物にそなわっているある性状が——あなたが列挙されたかぎりのものはすべてそうですが[1]——たしかにありました。そうでしょう？

ヒッピアス　そう。

ソクラテス　ところが他方、わたしが列挙したものは[2]、そういうものではありませんでした。それらのもののなかには、まさにこの〈それぞれ〉ということと〈両方〉ということ自体も含まれていたわけですが。そうでしょう？

ヒッピアス　そうだ。

B

ソクラテス　では、ヒッピアス、〈美〉はどちらの部類にはいるとあなたは思いますか？　あなたがおっしゃっていたもののほうですか？　いやしくもわたしが強く、あなたもそうなら、両人としても強いし、わたしが正しく、あなたもそうなら、両人としてもそうですし、また両人がそうなら、各人としてもそうです。これと同様に

してまた、いやしくもわたしが美しく、あなたもそうなら、両人としてもそうですし、また両人がそうなら、各人としてもまたそうなのでしょうか？　そうであってもいっこうにさしつかえないことは、次の場合と同様でしょうか？——すなわち、もしあるものが両方としては偶数なら、それぞれとしては奇数であるかもしれないし偶数であるかもしれない。またそれぞれとしては無理数であるものが、合計したものとしては、有理数であるかもしれないし、無理数であるかもしれない。(3) このような例は他にも数えきれないくらいあって、このわたしに見えていると、さっきわたしが言ったのは(4)まさにそのような事例のことだったのですが……。

さあ〈美〉は、どちらの部類に属するとお考えですか？　あるいは美について、このわたしに見えているとおりに、あなたにも見えていますか？　つまりわたしには、われわれ両人としては美しいが各人としては美しくないとか、各人としては美しいが両人としては美しくないとか、あるいはそのほか何であれこのようなことはみな、はなはだ理屈に合わないことのように思われるのです。あなたはどちらを選びますか、わたしと同じほうですか、それとももう一方のほうですか？

ヒッピアス　君と同じほうだ、ソクラテス。

ソクラテス　それは大へんありがたいです、ヒッピアス、われわれがこれ以上の探求から放免されるためにも。というのは、もし〈美〉がいま言ったほうの部類にはいるなら、〈視覚と聴覚を通じての快〉が美であることはもは

1　300E～301A.
2　301E～302A.
3　二つの無理数の合計が有理数になることはないので、この個所の「無理数」「有理数」についての記述は必ずしも厳密とは言えないようである。
4　300C.

やないでしょうから。なぜなら〈視覚と聴覚を通じるもの〉は、両方を美しくあらしめはするが、それぞれひとつひとつを美しくあらしめることはないからです。しかるにそういうことは不可能でした(1)——これはわたしと同じくあなたも同意しておられるところですね、ヒッピアス。

ヒッピアス そう、同意している。

ソクラテス してみると、〈視覚と聴覚を通じての快〉が美であることはありえない。なぜなら、それが美だということになれば、それは一つの不可能な帰結をもたらすわけですから。

ヒッピアス それはそうだ。

二九

E

ソクラテス 「ではさあ、そういう失策を君たちはおかしたからには、もう一度もとに戻って、最初から言ってくれたまえ」と彼は言うでしょう、「それらの快楽の両方にそなわり、それのゆえにそれらの快楽を他の諸快楽より重視して、君たちが美しいと呼んだところの、その〈美〉とは何であると主張するのかね?」と。——かくてわたしには、どうしてもこう言わざるをえないように思えるのですよ、ヒッピアス、「快楽のうちでいちばん無害で、いちばんすぐれているのはそれらの快楽なのだ、両方としても、それぞれひとつひとつとして見ても」。——あるいはあなたとしてはほかに何か、それらの快楽が他の諸快楽よりまさっているゆえんのものを言うことができますか?

ヒッピアス いや、けっして。じじつほんとうに、それらの快楽がいちばんすぐれているからね。

ソクラテス　「してみると、これこそが」と彼は言うでしょう、「美であると、君たちはまさしく言わんとしているのだね、〈有益な快楽〉こそが」[2]。——「どうもそうらしい」と、わたしは言うでしょう。あなたとしてはいかがですか？

ヒッピアス　ぼくとしてもだ。

ソクラテス　「それでは、有益なものというのは」と彼は言うでしょう、「善いものを作り出すものだが、作り出すものと作り出されるものとは別々のものだということは、さいぜん明らかになったのではないかね[3]？ 304 そして君たちの議論はさきほどの議論へと逆戻りしたわけではないかね？ 善は美でもなければ、美は善でもないだろうからね、いやしくも善と美とはそれぞれ別々のものであるならば」。——「何にもましてそうだ」とわれわれは言うでしょう、ヒッピアス、もし分別をわきまえているなら。なぜなら、正しいことを言っている人の言葉を承認しないのは許されないことでしょうから。

ヒッピアス　けれども、ソクラテス、君はどう思うのかね、こうしたことの一切合財を。これらはまさに、さっきぼくが言っていたように[4]、細かく切り裂かれた、言論のそぎ屑(くず)であり裁(た)ち屑ではないか。それよりむしろ、B ああいうことのほうが、美しくもあり、大きな価値もあることなのだ、——法廷なり政務審議会なり、その他論議がその前で行なわれる何か公共の機関なりで、申し分なく立派に弁論を駆使し、聴き手を説き伏せたうえで、

1　300B参照。

2　「美とは〈有益な快楽〉である」とするこの最後の規定は、「美とは〈有益なもの〉である」とした先の規定(296E)に対するのと同じ反論が以下で加えられることになる。

3　297A.

4　301B.

己れの身の安全や自己の財産や友の身の安全という、勝利者への褒美のうちでも最小ではなくて最大のものを携えて、立ち去ることができるということのほうがね。だからひとは、くだらないことや愚にもつかないことに今のように憂身をやつして、あまりにも無知な男と思われないためには、これらの言論の細切れにはきっぱり見切りをつけて、いま言ったようなことにこそ努力を集中すべきなのだ。

三〇

ソクラテス　ヒッピアスさん、あなたは祝福された方です。なぜといって、あなたは人間の営むべきことを知っておられ、かつそれを、あなたの言われるところでは、存分に営んでこられたというのですからね。ところがそれに引きかえこのわたしときたら、どうやら何か不幸な運命に取り憑かれているようです。なにせ、迷い歩いては、行詰りにおちいっているのはいつものことですが、あなたがた知者にわたし自身の行詰りを披瀝すればするで、そのたびごとに、ただもうあなたがたに議論でさんざんに踏みにじられるだけの人間なのですからねえ。というのはあなたがたに言わせれば、げんにいまもあなたがそう言われるように、ばかばかしくて、ちっぽけで、何の値打ちもないことにわたしはもっぱらかかずらっているわけですから。

ところがさて、あなたがたにすっかり説得されて、あなたがたの言うとおりに、法廷なり他の何らかの公けの集会なりで弁論を申し分なく立派に駆使し、何事か(1)をなし遂げることができることこそ、この上なくすぐれたことなのだと言えば言うで、こんどは当地のある人たち、なかでもとくに、絶えずわたしを吟味反駁するあの男から、ありとあらゆる罵詈雑言を聞かされるのですから。なにしろその男は、わたしと非常に近い身内の者で、同

じ家に住んでいることでもありますしね。だからわたしが自分の家に帰って、そうしたことをわたしが話すのを聞きつけると、彼はこう尋ねてくるのです、――〈美〉について、それがそれ自体としていったい何であるか知りもしないと、かくも明白に反駁され証明されながら、美しいもろもろの営みなどについておこがましくも話し合おうとするのを恥ずかしく思わないのか、とね。

E

「しかし君は」と彼は言うでしょう、「誰にせよ、ひとが言論なり、その他の何らかの行為なりを美しく営んでいるかいないかを、どのようにして知るのだろう――肝心の〈美〉を知らないというのに。そんなていたらくでも、君は死ぬより生きているほうがましだと思うのかね？」と。

かくてこの身は、くり返し言うように、一方ではあなたがたから悪口を言われ責められるし、他方ではまた彼から同様の仕打ちを受けるということになるのです。だがそうはいっても、たぶんこうしたこと一切を堪えしのぶのは必要なことなのでしょう。そのことがわたしの為になるのは、なんら不思議なことではないのですから。それでわたしとしては、ヒッピアス、あなたがたのどちらと交わっても為になったと思います。というのは「美しいこと（立派なこと）はむずかしい」(2)という諺の文句がいったいどういう意味か、わたしにはわかるような気がするものですから。

1　この個所の読みは、〈τι〉περαίνειν（Winckelmann）と、τι を補って読む。

2　プラトンが好んで引用する文句。『国家』Ⅳ. 435C, Ⅵ. 497D、『クラテュロス』384B など参照。

ヒッピアス（小）

——偽りについて——

戸塚七郎訳

登場人物

エウディコス
ソクラテス
ヒッピアス
（傍聴者数名）

363

エウディコス　どうしたんだね、なぜ君は黙っているのだ、ソクラテス、ヒッピアスがこれほどの演説を披露(ひろう)してみせたというのに。一緒になって今の話のどこかを讃(ほ)めるとか、あるいはまた、話にどこか適切でないところがあると思われるならそれに反駁するとか、どうしてしないのだね？　こともあろうに、自ら哲学の議論に加わることを他の誰よりも強く要求するはずの、われわれだけが取り残されているのだからね。

ソクラテス　うん、たしかに、エウディコス、ぜひともヒッピアスに訊(たず)ねてみたいことがあるんだ、彼が今ホ

B

メロスについて言ったことでね。実は、君のお父さんのアペマントスから、こういうことをよく聞かされていたことがあるものだから。つまりそれは、『イリアス』は、ホメロスの作品としては『オデュッセイア』よりも立派な詩であり、また、作品が立派であるのに応じて、それだけまたアキレウスのほうがオデュッセウスよりも優(すぐ)れた[1]人物である、ということなのだ。彼の言い分では、これらの作品はそれぞれ、一つはオデュッセウスに、いま一つはアキレウスに寄せて作られているのだからね。それで、もしヒッピアスさえその気なら、その点につい

C

てぜひ問いただしてみたいのだ、これら二人の人物について彼がどう考えているか、つまり、どちらのほうが優れていると彼は主張するか、をね。なにしろ彼の演説では、他の詩人たちについてもそうだが、特にホメロスについては、ほかに数多くの、種々さまざまなことがわれわれに披露されたわけだからね。

二

エウディコス　いや、それはもうわかりきっているさ。ヒッピアスは、君が何かを訊ねても、その答を渋るということはないはずだ。ねえそうだろう、ヒッピアス、ソクラテスが君に質問したら、それに答えるだろうね。それとも、どうするつもりかね？

ヒッピアス　それはもちろんだ。だってそうだろう、エウディコス、オリュンピアでのギリシア人の聖なる集(つど)いになら、オリュンピア祭の競技があるたびに欠かさず、エリスの家から聖地に赴いて行って、私に演示の用意 D ができていることなら、相手の望むテーマをなんでも注文なりに語ってみせているし、また、希望があればどんな質問にでも答えてみせているというのに、ここでソクラテスの質問を逃げるようなことがあったら、それこそ私の所業は奇怪なものとなろうからね。

364 **ソクラテス**　全く恵まれたものだね、ヒッピアス、君が抱いているその気持というのは——オリュンピア祭のたびにいつも、知恵の上で、自分の魂にそれほどすばらしい希望を持って聖地に赴くなんてね。それで思うのだ

1　「より優れている」の原語 ἀμείνων は「よい」(ἀγαθός) の比較級であるが、「よい」は多義的で、必ずしも道徳的な意味の「善い」に限定されていない。よい犬とかよい刀などの場合は、そのよさは、そのもの固有の能力において卓越しているの意味を持つが、本対話篇の議論はこの意味でのよさが鍵となって進められているように思われるので、理解し易いように殆ど「優れた」と訳した。しかし、この訳語の背後にはいつも「善い」が含意されているものと了解されたい。

が、肉体が売物の競技者で、君がその精神においてそうだと言っているのと同じくらい、臆するところもなく、その肉体を信じきってかの地へ競技に参加すべくやってくる者がいるとしたら、私は驚異を覚えることだろうよ。

ヒッピアス 当然なことだろう、ソクラテス、この私がそのような気持を抱いていても。なにしろ、私がオリュンピアで競技に参加し始めてこのかた、どんなことにおいても、この私より勝っている者には今まで一人としてお目にかかったことはないのだからね。

三

B **ソクラテス** それは実に素晴しいことではないか、ヒッピアス。それでは、君の言うその名声というのは、エリス市にとっても、また君の御両親にとっても、知恵の記念碑であるというわけだね。それはそうと、君はアキレウスとオデュッセウスについて、われわれにどういう説明をしてくれるのかね。どちらのほうが、またどんな点で、優れていると主張するのか。こんな質問をするのも、実は、われわれが大勢この部屋にいて君が演説の披露をしていたあの時には、君の話について行けなかったからなんだ——なにしろ、部屋の中には大へんな群衆がつめかけていたし、それに、質問などして君の演示の邪魔になってはと考えたもので、質問するのをためらっていたからね。しかし今は、われわれの人数も少なくなっているし、このエウディコスが質問するように促していることでもあるから、ひとつ答えてもらいたいんだ。そして、あの二人の人物について君の言い分はどういうものだったのか、われわれに詳しく教えてくれたまえ。君は彼らをどのように区別していたのかね？

C **ヒッピアス** よろしい、ソクラテス、悦んで説明するつもりだ、これらの人物について、それに他の点につい

ても、私の言い分というのをあの時よりもっと詳しくね。つまり、私の主張では、ホメロスはアキレウスを、トロイアへ赴いた人々の中で最も優れた人物として、またネストルを最も賢明な人物に、そしてオデュッセウスをいちばん抜け目のない人物に描き上げているのだ。

ソクラテス　これは驚いた、ヒッピアス。でも、せめてこれだけは私に好意を見せてくれまいか――私が君の言うことをなかなか理解しかねて幾度も繰り返して訊ねたとしても、私のことを笑ったりはしないでくれないか。D さあ、どうか穏かに、機嫌よく答えるようにしてくれたまえ。

ヒッピアス　それはもちろんだとも。そうだろう、ソクラテス、他の人々には同じこのことを教えてやり、そのことで金銭を受取ってしかるべしと要求しているのに、その私ともあろう者が、君に質問されたときにその気持を汲んで穏かに答えないようなら、それは格好がつかないだろうからね。

四

ソクラテス　全く嬉しいことを言ってくれるね。実のところこの私は、アキレウスが最も優れた人物に描き上げられていると君が言ったとき、君のその言葉を理解できたものと思っていた。またネストルが最も賢明な者にE 描かれていると言ったときもそうだ。ところがオデュッセウスについて、あの詩人は彼を最も抜け目のない人物に仕立てていると君が言ったときは、つまりこの点になると、君には本当のところを打明けるが、私は君の言おうとしていることが全く判らないのだ。そこで、どうか言ってもらいたい、そうすれば少しはよく理解できると思うんだが――アキレウスはホメロスによって抜け目のない人物に描かれてはいないのかね？

ヒッピアス 決してそんなことはない、ソクラテス。むしろ、最も一本気で、最も真実の人間とされているのだ——『祈願』(1)の中で彼ら二人を互いに語り合わせている場面では、ホメロス描くところのアキレウスはオデュッセウスに向かってこう述べているのだからね。

365

神の血を引く、ラエルティオスの息子、策豊かなオデュッセウスよ、
いざ、わが物語りをつつむことなく語りつくすべし、
わがまさになさんとするごとく、かく果すべしとわが信ずるごとく。
けだし、一事を心に秘めて他を口にするがごとき者、
そは、冥府の門に似てわが憎む者なればなり。
されどわれは、語るべし、今より語り果されんごとく。

B

これらの詩句において、ホメロスは各〻の人物の性格を明らかにしているのだ、つまり、アキレウスは真実の人で一本気であり、オデュッセウスは抜け目がなくて偽りの人である、というふうにだ。なにしろ彼は、アキレウスの口を通して、オデュッセウスに向かって上の言葉を語らせているのだからね。

ソクラテス それでやっと、ヒッピアス、私は君の言おうとすることが判ったように思う。どうも、君の言う抜け目のない人間というのは偽りの人のことのようだね、私の見るところでは。

C

ヒッピアス たしかにその通りだ、ソクラテス。なにしろ、ホメロスが、『イリアス』の中でも『オデュッセイア』の中でも、多くの個所で描いているオデュッセウスというのはそのような人物なんだからね。

ソクラテス すると、どうやらホメロスは、真実の人と偽りの人とはそれぞれ別であって、同一人ではない、

と考えていたようだね。

ヒッピアス それは言うまでもないことだ、ソクラテス。

ソクラテス それで、君自身もまたそのように考えているのかね、ヒッピアス。

ヒッピアス もちろんだとも。そうでないとしたら、それは奇怪なことになろうからね。

五

ソクラテス それでは、ホメロスのほうは放免することにしようではないか——いったい何を考えてそのような詩句を作ったのか、問いただそうにもそれはできないことだからね。だが君は、明らかに事の責任を引き受けているのだし、それに、君が挙げているホメロスの言葉に共鳴していることでもあるから、ホメロスのためと君自身のためとの両方を兼ねて、答えてくれたまえ。

D

ヒッピアス そうすることにしよう。さあ、何でも君の聞きたいことを簡潔に訊ねてくれたまえ。

ソクラテス 偽りの人と君が言うのは、例えば、病気の人のように何ごとかをなす力のない人のことかね、そ

---

1 『祈願』(Λιταί)というタイトルは『クラテュロス』428Cにも出てくる。この引用箇所は、現在われわれが持っている二四巻に分けられたテキストでは、『イリアス』第九巻三〇八—三一四行に当たる。『イリアス』や『オデュッセイア』をそれぞれ二四巻に巻分けする習慣は、前三世紀のアレクサンドレイアにおける文献学研究以前にはなかったと考えられる。それ以前は、主役として登場する人物や顕著な事件に言及することで、ホメロスの作品箇所を示していたらしい。それが各部分の名称となっている。このようなエピソードに因んだ名称で呼ぶ例はプラトン、アリストテレスにも多く見出される。なお、ここの引用はホメロスの原文をプラトンが適当にアレンジしたものである。

E

れとも何ごとかをなす力のある人のことかね。

ヒッピアス 私が言うのは力のある者、それも非常に大きな力のある者のことだ——他の多くのことでもそうだが、とりわけ人々を欺くことにかけてだね。

ソクラテス それでは、どうやら、君の説によれば、彼らは力のある者であり、また抜け目のない者でもあるようだね。違うかね?

ヒッピアス そうだ。

ソクラテス だが、彼らが抜け目がなく、そして欺瞞者であるのは、気のよさや知恵のなさによるのだろうか、それとも狡猾さと或る種の知恵によるのだろうか。

ヒッピアス 何はともあれ、狡猾さと知恵によるのは言うまでもない。

ソクラテス そうすると、どうやら、彼らは知恵が廻る者ではあるらしいね。

ヒッピアス もちろんだとも、それは大へんなものだ。

ソクラテス では、知恵が廻る者だとして、彼らは自分の行なっていることが何であるかを知らないかね、それとも知っているのかね?

ヒッピアス それは非常によく知っているとも。それだからこそ、彼らは悪事も働けるのだ。

ソクラテス では、自分の知っているそのことについて知識があるとしたら、彼らは無知な者かね、それとも知者かね?

ヒッピアス 勿論知者だとも、少なくもこれだけのこと、つまり人を欺くということではね。

六

ソクラテス　ちょっと待ってくれ。君の言わんとするところはどういうことなのか、思い起してみることにしよう。君の言う偽りの人とは、彼らがそれにおいて偽りの人であるとされる当の事柄に関して、能力があり、知恵が廻り、知識を持っていて知者であるわけだね。

ヒッピアス　私の主張はたしかにそうだ。

ソクラテス　また、真実の人と偽りの人とはそれぞれ別人であり、互いに最も反対であるわけだね。

ヒッピアス　私の言い分はそうだ。

ソクラテス　よろしい。では、偽りの人というのは、君の説によると、どうやら能力があり、知者である者の中に含まれる者のようだね。

ヒッピアス　たしかにその通りだ。

B

ソクラテス　だが、偽りの人は、彼が偽りの人とされるちょうどそのことに関して、能力があり知者であると君が言う場合、君が言うその意味は、彼らは望むときにはいつでも偽る能力があるということなのかね、それとも、彼らが偽っているまさにその事柄に関して能力がないということなのかね？

ヒッピアス　むろん、私としてはその能力がある者のことを言っているのだ。

ソクラテス　そうだとすると、要するに、偽りの人は知者であり、偽ることにかけて能力のある者ということになる。

ヒッピアス　そうだ。

ソクラテス　だとすると、偽る能力がなく、無知である人間は、偽りの人ではありえないだろう。

ヒッピアス　その通りだ。

ソクラテス　しかし、自分の望むことを何でも、望むときに行なえるような者は、誰でも能力のある者という

C

わけだ。私が言っているのは、病気だとかその種のものに妨げられている者のことではない、いや、君は私の名をいつでも望むときに書くことができるが、ちょうどそれと同じ意味のことを言っているのだ。それともなにかね、君はこのような状態の人を能力のある者とは呼ばないのかね。

ヒッピアス　いや、そう呼ぶよ。

七

ソクラテス　では言って欲しいんだが、ヒッピアス、君は計算や計算術に習熟しているのではないかね？

ヒッピアス　うん、誰よりもずば抜けているね、ソクラテス。

ソクラテス　それでは、誰かが七〇〇の三倍はどれだけの数かと訊ねたとしたら、君がその気になりさえすれ

D

ば、誰よりも迅速かつ立派に、問われているその数について真実を言うことができるのではないかね。

ヒッピアス　もちろんだ。

ソクラテス　それは君が、これらのことでは最も能力があり、最高の知者であるからかね。

ヒッピアス　そうだ。

ソクラテス　ところでどうなんだね、君はただ最高の知者で最も能力があるというだけなのかね、それとも、君が最も能力があり、かつ最高の知者であるとされているその事柄、つまり計算の術において、君はまた最も優れた者でもあるのかね？

ヒッピアス　たしかに最も優れた者でもあるだろうよ、ソクラテス。

ソクラテス　すると君は、これらの領域では、真実を語る能力を最も多く備えているわけだろう。そうではないかね？

E

ヒッピアス　私自身もそう思っている。

ソクラテス　ではどうなんだろう、同じこの領域で偽りを語るほうは？　先の真実の場合と同じように、こだわりなしに堂々と答えてくれたまえ、ヒッピアス。誰かが君に七〇〇の三倍はどれだけになるかと訊ねたとしたら、どうだろう、君は、偽りを言おう、そして決して真実は答えまいと望むならば、最もうまく偽りを言うことができ、それについていつも同じように偽りを述べられるのだろうか、それとも、その気になっている君よりは、

367

計算にかけては無知である者のほうがもっとうまく偽りを言うことができるのだろうか。いやむしろ、無知な者は、偽りを述べるつもりであっても、ひょっとしたはずみで、心ならずも真実を述べることがままあるかもしれないが、君のほうは、知者なんだから、偽りを言おうと望む以上は、いつでも同じように偽りを言うことができる、というわけかね？

ヒッピアス　そうだ、君の言う通りだ。

ソクラテス　では、偽りの人というのはどうなんだろうね。彼は他の諸〻のことでは偽りの人であるが、しか

し、数に関してはそうでなくて、数えるときには偽りを言うことができないのかね。どうかね？

ヒッピアス　神かけて言うが、もちろん数に関してであってもそうだ。

八

ソクラテス　それではこのことも認めておくことにしようか、ヒッピアス。つまり、計算と数についても偽りの人間がいるということを。

B

ヒッピアス　そうだ。

ソクラテス　では、それはどんな人間だろうね。いやしくも彼が偽りの人であるべきなら、君が今しがた認めたように、彼には偽りを言うことができるという能力が備わっていなければならないのではないか。だって、君も憶えているだろう、偽りを言う能力のない人間は決して偽りの人になれないということが、君によって言われたのだからね。(1)

ヒッピアス　それは憶えているとも。たしかにそのように言われた。

ソクラテス　ところで君だが、計算に関して偽りを言う能力を最も多く備えていることが、今しがた明らかになったのではないかね。

ヒッピアス　そうだ。そのこともたしかに言われた。

C

ソクラテス　だがまた、君は、計算に関して真理を語る能力も最大なのだね。

ヒッピアス　そうだとも。

ソクラテス　それなら同じ人間ではないか、計算に関して偽りと真実を述べる能力を最も多く備えているのは。そして、それは計算に関して優れている者、つまり計算家ということだ。

ヒッピアス　そうだ。

ソクラテス　そう、他に誰が計算に関して偽りの人になれるものかね、ヒッピアス、それの優れた者をさしおいて。たしかに、同じこの人はまたその能力を持っているのだし、また、この人は真実の人でもあるのだからね。

ヒッピアス　そのようだね。

ソクラテス　では判ったね、同じ人間が、これらのことに関しては偽りの人でも真実の人でもあって、真実の人が偽りの人より優れているということは少しもないのだ、ということが。なぜなら、それらはおそらく同一人

D

物であって、君が先ほど考えたように全く反対であるというわけではないのだからね。

ヒッピアス　うん、そうではないらしいね、少なくともこの場合には。

ソクラテス　なんなら、他の場合についても調べてみようか？

ヒッピアス　いいだろう、君がその気なら。

九

ソクラテス　君は幾何学にも習熟しているのではないかね。

1　366B参照。

ヒッピアス　その通りだ。

ソクラテス　それではどうだろう、幾何学の場合でも上のような事情が見られるのではないかね？　つまり、図形について偽りを言い、また真実を言う能力を最も多く備えているのは、同じ一人の者、すなわち幾何学者ではないかね。

ヒッピアス　そうだ。

ソクラテス　ところで、この領域では、彼をさしおいて優れた者がいるかね。

E

ヒッピアス　他にはいない。

ソクラテス　すると、優れていて知識のある幾何学者ではないかね、その両方の点で最も能力のある者というのは。そして、図形について偽りの人がいるとしたら、彼こそが、つまりその優れている者がそうなのではないだろうか？　なぜなら、彼はその能力のある者なんだし、これに反し、劣っている者は偽りを言う能力がなく、したがって、偽りを言う能力のないような者なら偽りの人にはなれないだろう、ということだったのだからね、先の同意によれば(1)。

ヒッピアス　その通りだ。

368

ソクラテス　ではさらに三番目の例、天文学者を調べてみることにしよう、君はまたこの技術にも、上の技術以上に心得があると自信を持っているのだが。そうではないかね、ヒッピアス？

ヒッピアス　そうだ。

ソクラテス　だが、天文学の場合にも上と同じことが言えるのではないか。

ヒッピアス おそらくそうだろう、ソクラテス。

ソクラテス すると、天文学の場合でも、いやしくも偽りの人がどこかにいるとしたら、優れた天文学者こそが偽りの人となることになろう――偽りを言う能力のある者なのだから。なぜなら、その能力のない者にはそれは不可能だからね。なにしろ彼は無知なんだから。

ヒッピアス そのように思われる。

ソクラテス すると天文学の場合でも、真実の人となるのも偽りの人となるのも同じ一人の者というわけだ。

ヒッピアス どうもそのようだ。

一〇

ソクラテス さあ、それでは、ヒッピアス、どれという制約なしに知識のすべてにわたって、こんなふうに調べてみてくれたまえ――これまで述べたのとは事情の違うものがどこかにあるかどうか、をね。何にしても、君は、大多数の技術にわたって、あらゆる人間の中で最も賢い人なのだ。このことについては、君がアゴラの両替屋(りょうがえや)の店先で、自分の多様な、そして他人が羨むような知恵を一つ一つ数え上げて自慢しているのを、この私はこれまで耳にしているのだ。君の言葉によれば、君がかつてオリュンピアへ赴いたとき、その身につけていたものはことごとく君自身の作品であったということだった。まず第一に指輪だが――つまり、君はそれから自慢話を

B

---

1 367A 参照。

C
始めたのだ——、君が指にはめていたのは君自身の作品ということだった。つまり、君は指輪を刻む術を心得ているというわけだ。また、そのほか刻印にしても君の作品だし、垢擦り（あかすり）や香油瓶、それらも自分で作ったものということだった。それから君が履（は）いていたサンダルも、君の言うには、自分で拵（こしら）えたものだし、その上衣も短い下着も自分で織ったということだった。また、聴衆のすべてが特に意外に思い、それこそ最大の知恵がある証拠と考えたのは、君が巻いていた下着の帯が、ペルシア人がしているのと同じようなもので高価な代物（しろもの）であり、これも自分で編み上げたと言ったときだった。その他にも、君がそこへ赴いた際、叙事詩、悲劇、ディテュランボス(1)などの詩を携（たずさ）えて行ったということだし、散文のほうでも、多くの多彩な文を作って携えて行ったということだった。それにまた、私が今挙げた諸〻の技術に関しても、その造詣（ぞうけい）において他の人々よりずば抜けたものを持ってかの地へ赴いたわけだが、それとならんで、韻律や音階や文字の正しさについても造詣が深かったし、それ以外にも非常に多くの領域にわたってそうであるとのことだった——私はよく記憶しているつもりだがね。ああ、
D
そう言えばその記憶だが、その術を私はうっかり落していたようだ。(2)その術においては、君は、自分こそが最も光彩を放っている、と考えているというのにね。他にも非常にたくさんのことを、私は言い忘れていたように思
E
う。が、しかし、私が言いたいのはこういうことだ。君自身が持っている技術——それだけでも十分なほどあるのだが——それらに目を向け、同時にまた他の人々の技術にも目を向けて、その上で、私と君との間で同意されたことに基づいてどこかに見出せるものなら、どうか言ってもらいたいのだ、どんな場合に真実の人と偽りの人とはそれぞれ別であるのか、すなわち、どんな場合に両者が全く別人で同一人ではないのか、をね。この点を、君が望むどんな知恵においてであれ、或いはそれが狡猾さであろうと、君の好みのどんな名のものであろうとか

369 まわない、それにおいて考察してみてくれたまえ。しかし、ねえ君、君はそれを見出すことはできないだろうよ。だって、そんな場合はないのだからね。まあ、言ってみてごらんよ。

二

ヒッピアス それはできないよ、ソクラテス、今すぐにということではね。

ソクラテス これから先だってできないだろう、私はそう思うよ。で、もし私の言葉が真実であるなら、われわれの議論からはどんな結論が出てくるか、思い起こしてみてくれたまえ、ヒッピアス。

ヒッピアス よくは判らないね、ソクラテス、君が何を言おうとしているのか。

ソクラテス それはおそらく、ここで君がその記憶術というやつを使っていないからだろう――明らかに、その必要はないと君は考えているからだ。しかし、私が君に思い出させてやることにしよう。君はアキレウスを真

B 実の人であると言い、オデュッセウスを偽りの人で抜け目がないと言った、そうだったね。[3]

ヒッピアス そうだ。

ソクラテス ところが今は、君も気づいているように、偽りの人と真実の人とは同一人物であることがはっき

1 ディテュランボスの名称の起源は明らかでないが、古くアルキロコスによってディオニュソス神の讃歌がこの名で呼ばれ、以後ディオニュソスを讃える合唱歌の形式を指すようになった。

2 ヒッピアスの記憶力については『ヒッピアス(大)』285D以下でも言及され、特にラケダイモン人の間では彼のこの術が評判を得たとされている。

3 364C参照。

りしてきて、したがって、もしオデュッセウスが偽りの人であるとすれば、彼はまた真実の人であり、また、もしアキレウスが真実の人であるとすれば、彼はまた偽りの人であるということになり、この二人の人物は互いに異なっているわけでも反対であるわけでもなくて、どちらも似たような者である、ということになるのだ。

C **ヒッピアス** ソクラテス、君はいつもなにかこんな風な議論をひねり出すね。そして、議論のいちばん厄介なところをとり上げては、それをしっかとつかまえて、こま切れにしてつつき廻し、議論が対象としていることがらの全体で議論を戦わせることをしない(1)。今だって、君がその気になりさえすれば、私は多くの証拠を挙げて、ホメロスがその作品の中でアキレウスをオデュッセウスよりも優れた、そして偽りのない人物に描いており、後者を、欺瞞に満ちて多くの偽りを言う人物であり、アキレウスよりも劣った者であるとしていることを、十分な論をもって君に証明してみせようというのにね。だが、もしよかったら、今度は君のほうから反対の説を出して並べてみせ、相手のオデュッセウスのほうが優れていることを示してくれたまえ。そうすれば、ここにいる人たちも、どちらの説が勝っているか、よく判ることだろう。

一二

D **ソクラテス** ヒッピアス、この私は、いいかね、君に異を唱えて、君が私より賢いことはないと言っているわけではないのだ。いや、これは私のいつもの癖だが、誰かが何かましな発言をするときには、とりわけ話し手が知者であると思われる場合には、いつでもそれに注意を集中するのだ、そして、彼が何を言おうとしているのか理解したい気持から、納得がゆくまで問いただし、何度も繰り返し調べたり、つき合わせてみたりするのだ、よ

く理解するためにね。しかし、話し手がとるに足らぬ者と思われる場合には、質問を繰り返すこともなければ、相手の言葉に注意を払うこともない。だから、君も、このことによって、私が誰を知者であると考えているか、知ることができるだろう。君にも、私という人間は、知者とおぼしき人によって述べられたことには、それを理E 解して少しでも利益を与えてもらおうと、しつっこく食い下り、彼にそれを問いただすということが、やがて判るだろうからね。

そういうことで、今も君が話しているときに気づいたというわけなんだ——アキレウスがオデュッセウスに語りかけているのは、ちょうど欺瞞者に語りかけているようなものであることを示そうとして、君が今しがた引合いに出した詩句の中には、君の言っていることが真実なら、どうも腑に落ちないことがあるように思える、というこ370とにね。それは、オデュッセウスは抜け目のない人物ということだが、その彼がどこにも偽りを言った形跡のないことがはっきりしており、これに反しアキレウスのほうが、君の説によれば、抜け目のない人間のように思える、ということだ。とにかくアキレウスが偽りを言っていることは確かだ。つまり、彼は先ほど君が挙げたあの言葉、

けだし、一事を心に秘めて他を口にするがごとき者、

そは、冥府の門に似てわが憎む者なればなり。

B をはっきりと口にしたわけだが、(2) その少し後には、オデュッセウスの説得でもアガメムノンの説得でも意をひる

1 『ヒッピアス（大）』301B, 304A 参照。

2 365A～B 参照。

がえすことはない、なんとしてもトロイアに留まることはあるまい、と述べ、

明日、ゼウスと神々のすべてに犠牲を済ませし後、
船みな満載にして大海に引き出すべし。
汝にして意あらば、ことに心寄することあらば、汝は見るべし
わが船団の朝まだきに銀鱗踊るヘレスポントスを進むを、
C 内に兵士らの漕ぎに漕ぐさまを。
かくて、大地を揺らぐかの名だたるポセイドンにして安らけき旅路を恵みなば、
三日目にして、豊けきプティエにわれは帰りつくべし(1)。

と言い、また、これらの言葉よりも前には、アガメムノンに嘲りの言葉を浴びせて、

いざやプティエに帰り行かん、舳先曲がれる軍船ともども、
家路につくこそ遥かに優れば。名を奪われしままこの地に留まり、
D 汝がために富と財とを積むべしとは思わず(2)。

と言ったのだ。ところが、これらの言葉を、彼は、時には全軍を前にし、時には自分の友人たちを前にして口にしておきながら、彼が故郷に向けて船出しようと船を海に引き下ろす準備をした形跡も、それを企てた形跡も、どこにもない。いや、彼が全く悪びれるところなく、真実を語るということを無視しているのははっきりしているのだ。それで私は、ヒッピアス、初めに君に訊ねたわけだ、これら二人の人物のいずれが、あの詩人によって
E より優れた人物に描かれているのか決めかねていたし、また、両者ともにとりわけ優れた人物で、真偽とかその

他の徳とかについて、いずれをより優れているとするか判定しがたい、と考えていたものでね——なにしろ、二人ともそろって、この点でもよく似ているものだからね。

一三

ヒッピアス　それは君の考察の仕方がよくないからだ、ソクラテス。なぜなら、アキレウスが偽って言っているその偽りだが、彼がそういう偽りを言うのは明らかに企みによるものではなく、心ならずもそうしているのだが——その軍が蒙った不幸のためにやむなくかの地に留まり、これを救うことを余儀なくされたのだからね——、しかしオデュッセウスのほうの偽りは、彼の意図であり企みから出たものだからだ。

371

ソクラテス　君は私を騙しているね、なんということだヒッピアス。そういう君自身もオデュッセウスを見習っているではないか。

ヒッピアス　決してそんなことはない、ソクラテス。君は何を言いたいのだ、また何をもとにしてそんなことを言うのだ?

ソクラテス　それはこういうことだ。君は、アキレウスが偽りを言ったのは企みによるものではないと主張しているのだが、そのアキレウスは、ホメロスが描いているところによれば、欺瞞者である上になかなかの詐欺師であり策士であって、欺いていながらそれがオデュッセウスには容易に気づかれなかったという点からすれば、

1　『イリアス』第九巻三五七—三六三行。

2　『イリアス』第一巻一六九—一七一行。

オデュッセウス以上に知恵がよく廻るように思われるくらいだったのだ——彼を前にして自分自身矛盾することをあえて口にしても、オデュッセウスにはそれと気づかれなかった程にだね。とにかく、オデュッセウスが彼に向かって話しているときには、彼が偽りを言っているのに気づいているという風でないことは明らかなのだ。

B

ヒッピアス　どういうことかね、君が指して言っているのは、ソクラテス？

ソクラテス　知らないかね、彼がオデュッセウスに向かって、夜明けと共に船出するつもりだと言った後に、アイアスに向かって語る際には、船出するつもりはないと否定し、別なことを言っているのを。

ヒッピアス　どの箇所だったっけ？

ソクラテス　彼が次のような言葉を口にしている件(くだり)だ、

C

われいまだ血迸(ほとばし)る戦いに心至すことあるまじ、
戦さ人プリアモスの息子、神人ヘクトル、
アルゴスの人々を殺(あや)めつつ、わがミュルミドン族(1)の幕営と
軍船に襲いかかり、火もて軍船を焼きつくすに至るまでは。
されど、わが幕営と黒き軍船の傍らにては、
ヘクトル、いかに心はやれども、思うに、戦いの手を控えるべし(2)。

D

そこで、どうなんだね君は、ヒッピアス。君は、女神テティスの息子で、しかも最高の知者ケイロンの教えを受けている男が、そんなに物忘れのひどい人間だと思うかね——少し前には欺瞞者たちをこの上ない罵(ののし)りの言葉で罵っていながら、当の本人が、まだその口が乾かぬうちに、オデュッセウスに向かっては船出するつもりだと言

い、一方アイアスに向かっては留まるつもりだと言って、それでいて彼が策謀をめぐらしているわけでもなければ、また、オデュッセウスは愚直なお人好しであって、自分のほうが、術策を弄して偽りを言うというその点では、彼を抜きんでている、と考えてもいない、それ程にまでひどいとは。

一四

ヒッピアス いや、私はそうは考えていない、ソクラテス。今問題のその点にしても、相手に対する善意から考えを変えてのことなんだ、彼がオデュッセウスに向かって言ったのと別なことをアイアスに向かって言ったのはね。ところがオデュッセウスのほうは、その口にする真実にしても、いつも策謀をめぐらした上で言っているのだし、彼が言う偽りにしてもそれと同じことなのだ。

E

ソクラテス すると、どうやらオデュッセウスのほうがアキレウスよりも優れているということのようだね。

ヒッピアス いや、決してそんなことはない、ソクラテス。

ソクラテス だが、どうなんだね。先ほど明らかになったのではなかったかね、その気になって偽りを言う者

1 蟻から生まれたと言われる一族。ゼウスはアリポス河神の娘アイギナを拉致し、オイノネ島(後のアイギナ)に連れて行ってヘラの目をかすめて寵愛し、アイアコスを儲けた。しかし、島には彼に仕える者がいないのを不憫に思ったゼウスは、蟻を人間に変えて彼の家来にしたと伝えられる。これがミュルミドン族の由来で、共にアイアコスの後裔であるアキレウスとアイアスは、トロイア戦争の際にミュルミドン族を率いて行った。

2 『イリアス』第九巻六五〇—六五五行。

はその気がないのに言ってしまう者よりも優れているということが。[1]

372 **ヒッピアス** でもどうして、ソクラテス。意図をもって不正をなし、意図的に策謀をめぐらして悪事を働く者が、心ならずもそうする者より優れているなどということが、どうしてありえようか、後者には寛大な態度が示されるというのに。つまり知らないで不正を働くとか、偽りを言うとか、その他の悪事を行なうような場合にはだね。また法にしても、たしかに、意図をもって悪事を働いたり偽りを言ったりする者に対しては、心ならずもそうする者以上に、はるかに厳酷なのだ。

一五

ソクラテス 判るだろう、ヒッピアス、私の言っていることが本当だということが――こと賢い方々への質問となると、私はしつっこい人間だと言ったのだ。おそらくこのことが、私が持っているただ一つの取柄であって、
B その他のことは全くとるに足らぬものだろう。なにしろ、事の真相をつかむということでは失敗ばかりで、私は事実がどうであるかを何も知らないのだし、そのことの十分な証拠も私にはあるのだからね。つまり、知恵にかけては誉れ高い君たちの誰かとか、全ギリシア人がその知恵の証人となっているような人たちなどと交渉を持つ場合には、私はいつも自分が全く無知であることをさらけ出すというのがそうだ。なにしろ、私と君たちとでは
C 同じ意見が一つもないと言っていいくらいなのだから。だが、実際のところ、無知なることの大きな証拠として、賢い人々と意見が喰い違う場合以上にどんなものがあるだろうか。――しかし、今言ったこの一つの点だけは、私の持っているかけがえのない取柄であって、それが私の救いとなっているのだ。何分にも、私は他人から教わ

るのを恥とは思わないし、いやむしろ、自分から教えを求め、質問を浴びせ、そして、答えてくれる人には大きな感謝を表わしているのであって、これまでに私が感謝の表明を拒否した人は一人もいないのだからね。実際のところ私は、何かを学んだとき、その学んだ知識をまるで自分の発見であるかのようなふりをして、学んだ事実を否定したようなことはこれまで一度もない、いや、かえって、私に教えてくれた人を知者として賞め讃え、彼から何を学んだかを公表しているくらいなのだ。

D　そこで今の場合だが、私は、君が述べているその内容については、君に同意してはいない、いやむしろ、非常に大きく喰い違っているのだ。そしてそれが、私のせいでそうなったことは、私もよく知っている。私という男は、全く掛値（かけね）なしに言うけれど、現に御覧の通りの人間でしかないのだから。つまりこの私には、ヒッピアス、全く君の言っていることとは正反対であるように思えるのだ。すなわち、人々に危害を加えたり、不正を働いたり、偽りを言ったり、欺いたり、過ちを犯すなどのことを意図的にやって、心ならずもそうするのではないような人は、不本意ながらそうする者よりも優れている、とこう思われるのだ。そうはいえ、時にはそれと正反対に思われることもあり、この点では私は意見がふらついているのだ。それが、私が知らないためであることははっ

E　きりしている。ところが今のこの場合には、まるで周期的な発作のように、あの思いがまた巡ってきたのだ。それで私には、何ごとかについて意図的に過ちを犯す者のほうが、不本意ながらそうする者よりも優れていると思われるわけなのだ。現在のこの症状については、私は、これまでの議論にその責（せ）めがあり、ために、今のこの場

1　366B〜C参照。

合に、上のそれぞれのことを不本意ながらなす者のほうが意図的になす者よりも劣っていると思われるのだ、とこう考えている。

373 そこで君にお願いだが、私に好意のあるところを見せて、私の魂を癒すのを渋ったりしないでくれたまえ。なにしろ、魂から無知を断ち切ってくれるなら、君は、肉体から病気を断ち切るよりもはるかに大きな善を施すことになるのだからね。ただし、君に長広舌をふるう気があるのなら、あらかじめ断わっておくが、それは私の病いを癒すことにはならないだろうよ。なぜなら、私はそれについて行けないだろうからね。だが、さっきのようなやり方で私の問いに答えてくれるつもりがあるのなら、君の施す恩恵は多大なものとなるだろうし、それにまた、私の考えでは、君自身にとっても損失になることはないだろう。しかし、当然君にも手助けを求めるべきだろうね、アペマントスの息子君(1)。だって、君が私をそそのかしてヒッピアスと対話させたのだ(2)。だから、ここで、もしヒッピアスに答えてくれる気がないようなら、私のために彼に頼んでくれたまえ。

B **エウディコス** しかし、ソクラテス、ヒッピアスにはわれわれからの依頼など全く必要ないと思うね。だって、彼自ら断言した言葉は、それを必要とするような内容のものではなくて、どんな相手の質問でも逃れたりしないだろう、というものなんだからね(3)。違うかね、ヒッピアス? 君が言ったのはこういうことではなかったかね。

ヒッピアス その通りだとも。しかしソクラテスはね、エウディコス、いつも議論の中に混乱を惹き起し、まるで悪さをしているとしか思えないもんでね。

ソクラテス まあ、そう言わないでくれたまえよ、ヒッピアス。でも故意にではないのだよ、私がそうするのは。故意にだとしたら、私は知者で腕利きの人間のはずだからね、君の論法で行けば。いや、それは心ならずも

そうなったのだ。だから、どうか大目に見てもらいたい。だって、君も一方ではこう言っているではないか——心ならずも悪をなす者はすべて大目に見られなければならない、と。(4)

C

ヒッピアス それは答えようとも、君が要求するんだからね。さあ、お望みのことを何でも尋ねてくれたまえ。

エウディコス そうだ、君は他にどうしようもないのだよ、ヒッピアス。いや、われわれのためにも、それからまた君自身が断言したあの言葉のためにも、ソクラテスが君に問いかける質問にはすべて答えてくれたまえ。

一六

ソクラテス よろしい。私が是非ともやりたいと望んでいるのは、ヒッピアス、先ほど挙げられた問題、すなわち、より優れているのは一体どちらか、意図的に過ちを犯す者か、それとも心ならずもそうする者か、という点を十分に調べ上げることなんだ。ところで、私の考えでは、こんな具合にしてこの考察に入って行くのがいちばん正しいように思う。とにかく考えてくれたまえ。君は誰かをよい走者と呼ぶね。

D

ヒッピアス 呼ぶとも。

ソクラテス また、誰かを悪い走者とも。

ヒッピアス そうだ。

---

1 エウディコスのこと。363B 参照。

2 373A の διαλέγεσθαι, καὶ νῦν のコンマをコロンに改めて読む。

3 363C～D 参照。

4 372A 参照。

ソクラテス ところで、よい走者とはよく走る者のことであり、悪いとは悪く走る者のことではないかね。
ヒッピアス そうだ。
ソクラテス だが、遅く走る者は悪く走っているのであり、速く走る者はよく走っているのではないかね。
ヒッピアス そうだ。
ソクラテス そうすると、競走や駆けることにおいては、速さがよいのであり、遅さが悪いわけだね。
ヒッピアス それはもちろんだとも。
ソクラテス では、どちらがより優れた走者だろう。故意に遅く走る者かね、それとも心ならずもそうするほうかね。
ヒッピアス 故意にするほうだ。
ソクラテス ところで、走るというのは何かを行なうことではないかね。
ヒッピアス たしかに何かを行なうことだ。
ソクラテス もし何かを行なうことであるなら、それはまた何ごとかをなすことでもあるね。
E
ヒッピアス そうだ。
ソクラテス とすると、悪く走る者は、競走の際に、走るという行為を悪くて恥ずべき形でなしているわけだね。
ヒッピアス 悪い形でだとも。それに違いない。
ソクラテス だが、遅く走る者は悪く走っているのだね。

ヒッピアス　そうだ。

ソクラテス　それなら、よい走者がこの悪いこと恥ずべきことをなすのは故意にであり、悪い走者は心ならずもそうしている、ということではないかね。

ヒッピアス　そのようだ。

ソクラテス　したがって競走の場合には、心ならずも悪しき行為をなす者のほうが、故意にそうする者よりも劣っているという訳だね。

ヒッピアス　競走の場合にはだね。

ソクラテス　では、レスリングの場合はどうだろう。どちらがレスラーとしてより優れているかね――故意に倒れるほうかね、それとも心ならずもそうなるほうかね。

ヒッピアス　故意に倒れるほうだと思う。

ソクラテス　だが、レスリングの場合、どちらがより劣っていて恥ずべきことかね――倒れることかね、それとも投げ倒すことかね。

ヒッピアス　倒れることだ。

ソクラテス　そうすると、レスリングの場合でも、劣っていて恥ずべき行為を故意になす者のほうが、心ならずもそうする者よりも、レスラーとして優れているわけだ。

ヒッピアス　そのようだ。

ソクラテス　では、肉体を使う運動のうち残りのすべての場合はどうだろう。肉体の面でより優れている者は、

(374)
B

強い行為と弱い行為の、つまり恥ずべき行為と立派な行為の両方をなすことができるから、したがって、肉体の上で劣った行為をなすというような場合には、肉体の面でより優れている者はそれを故意になし、一方より劣っている者は心ならずもそうする、ということなのかね。

ヒッピアス　体力に即した行為も君の言う通りだと思う。

ソクラテス　では、身体つきのよさという点ではどうかね、ヒッピアス。より優れた肉体は、醜くて劣った格好を故意にとることができるが、より劣った肉体の場合は、心ならずもそうなるだけなのか。それとも君はどう思うかね？

ヒッピアス　君の言う通りだ。

C

ソクラテス　そうすると、不体裁な格好にしても、故意のそれは肉体の優秀性にもとづいているが、心ならずもそうであるのは劣悪さにもとづいているわけだ。

ヒッピアス　そうなるようだ。

ソクラテス　では、声についてはどう言うかね。君の主張では、どちらの声をより優れているとするか。故意に調子を外している声かね、それとも、心ならずもそうなっている声かね。

ヒッピアス　故意によるもののほうだ。

ソクラテス　そして、心ならずもそうなっているのはより拙劣な声だね。

ヒッピアス　そうだ。

ソクラテス　だが、君はどちらを歓迎するだろうか——よきものを所有するほうかね、それとも悪しきものを

D

所有するほうかね。
ヒッピアス　よきもののほうだ。
ソクラテス　それなら、君が足を跛にしているとして、君は故意にそうしている足を持つのと、心ならずもそうなっている足を持つのと、どちらを歓迎するだろうか。
ヒッピアス　故意にそうするほうだ。
ソクラテス　だが、跛とは足の劣悪さであり、不格好さだね。
ヒッピアス　そうだ。
ソクラテス　それではどうかね、朧な視力は眼の劣悪さではないかね。
ヒッピアス　そうだ。
ソクラテス　それなら、君はどちらの眼を所有し、どちらの眼と共に暮すほうを望むだろうか。それによって、ぼんやりと見たり間違って見たりすることが故意にできるような眼かね、それとも、心ならずもそうなるような眼かね。
ヒッピアス　故意にそうすることのできる眼だ。
ソクラテス　そうすると、君は、君自身の部分のうち、故意に劣った行為をなすものを、心ならずもそうする部分よりも優れていると信じているわけだね。
ヒッピアス　そうだ、少なくともそのような部分ならね。
ソクラテス　それなら、全体を一言でまとめると、例えば耳でも、鼻でも、口でも、その他どんな感覚器官で

も、すべての場合において、心ならずも悪しき行為をなすものは、劣ったものであるという理由で、所有するに値しないものであり、一方、故意にそうするものは、優れたものであるということで、所有に値する、というわけだ。

ヒッピアス うん、そのように思われる。

一七

ソクラテス ではどうかね、道具の場合は。どちらの道具を仕事仲間とするほうが優れているかね。それを用いれば故意に悪い仕事ができる道具か、それとも、それを用いれば心ならずもそのようになる道具か。例えば舵（かじ）だが、より優れているのは、それによれば心ならずも悪しく操舵することになるような舵かね、それとも、故意にそうすることのできる舵かね。

ヒッピアス 故意にできるほうだ。

ソクラテス 弓にしても、リュラ琴にしても、笛にしても、その他一切の道具についても事情はこの通りではないかね。

ヒッピアス 君の言うことは真実だ。

ソクラテス では馬の魂についてだが、所有したほうがいいのは、それによって故意にまずい乗馬をすることができるような魂かね、それとも、心ならずもそうすることになるような魂かね。

ヒッピアス 故意にそうできるほうだ。

ソクラテス すると、その魂はより優れているわけだ。

ヒッピアス そうだ。

ソクラテス そうすると、馬のより優れた魂による場合には、その優れた魂の果す仕事を故意に劣った形でなすことができるが、しかし、もう一方の魂によっては、否応（いやおう）なしに劣った魂が果す仕事をなすことになるわけだ。

ヒッピアス たしかにその通りだ。

ソクラテス 犬の場合でも、その他のどんな動物の場合でもそうなのではないかね。

ヒッピアス そうだ。

ソクラテス ではどうだろうか、人間の場合は。例えば射手の魂を所有するとして、故意に的（まと）を射そこねる魂を所有するほうがいいかね、それとも、心ならずもそうなる魂を所有するほうがいいかね。

B

ヒッピアス 故意に射そこねるほうだ。

ソクラテス この魂もまた、射弓に関しては、より優れているのではないかね。

ヒッピアス そうだ。

ソクラテス そうすると、魂の場合でも、心ならずも過（あやま）つものは故意に過つものより劣っているわけだね。

ヒッピアス 射弓に限って言えばね。

ソクラテス では医術の場合はどうかね。肉体に対し故意に悪を行なう魂は、より医学に通じているのではないかね。

ヒッピアス　そうだ。

ソクラテス　すると、この技術の場合でも、この魂のほうがそうでない魂よりも優れているわけだ。

ヒッピアス　そう、優れている。

ソクラテス　それならどうかね、弾琴により長けているとか、吹奏により長けているとか、その他、技術と知

C

識とに関わるすべての領域においても、より優れている魂というのは、故意に悪しき行為や醜い行為をなし、故意に過つ魂であって、心ならずもそうする魂はより劣ったものなのではないかね。

ヒッピアス　そうなるようだ。

ソクラテス　それにまた、奴隷の魂にしたところで、過ちや悪しき行為を心ならずもする魂よりは、故意にそうする魂を所有するほうを、われわれとしては歓迎できるだろう――そちらのほうが奴隷仕事をするのにより優れている、と考えるからね。

ヒッピアス　そうだ。

ソクラテス　では、われわれ自身の魂はどうかね。われわれは、それをできるだけ最善の形で所有することを望むのではないだろうか。

ヒッピアス　そうだ。

D

ソクラテス　ところで、われわれの魂がより優れたものとなるのは、それが心ならずも悪事をなし、過ちを犯す場合よりは、むしろ故意にそうする場合ではないかね。

ヒッピアス　しかし、それでは恐ろしいことになろうよ、ソクラテス、もし、故意に不正をなす者のほうが、

心ならずもそうする者より優れた者になるとしたら。

ソクラテス　でもとにかく、これまでの議論からすれば、彼らは明らかにそうなるように思えるのだ。

ヒッピアス　しかし、この私にはそうは思えない。

一八

ソクラテス　私はね、ヒッピアス、君にもそう思われたものと思い込んでいたのだがね。では、もう一度質問に答えてくれたまえ。正義の徳とは、或る能力であるか、それとも知識であるか、あるいはその両方なのではないかね。いや、正義の徳は、必然的にそのどれか一つでなければならない。

ヒッピアス　そうだ。

E

ソクラテス　それなら、もし正義の徳が魂の或る能力であるとしたら、能力においてより勝っている魂はより正しいのではないか。だって、そうだろう君、そのような魂がより優れていることは、われわれの議論でもう明らかになったはずだからね。

ヒッピアス　たしかに明らかになった。

ソクラテス　では、それがもし知識であるとしたらどうかね。より知識のある魂はより正しく、より無学な魂はより不正なのではないか。

ヒッピアス　そうだ。

ソクラテス　では、もしそれがその両方であったらどうか。その両方を、つまり知識と能力を兼ね備えている

魂はより正しく、また、より無学で能力の劣った魂はより不正なのではないかね。当然そうなるべきだね？[1]

ヒッピアス　そうなるようだ。

376

ソクラテス　ところで、能力においてより勝り、より知恵のあるこの魂は、より優れたものであって、どんな行為においても、立派なことと恥ずべきことの両方をなす能力をより多く備えていることが、明らかにされたのではないかね。

ヒッピアス　そうだ。

ソクラテス　そうすると、このような魂が恥ずべき行為をなす場合には、いつも故意にそれをなしているのだ、その能力と技術によってね。そしてこれらは、その両方がか、あるいはそのいずれか一方がか、とにかく正義の徳に属していることは明らかだ。

ヒッピアス　そのようだね。

ソクラテス　また、不正を働くというのは悪をなすことであり、不正を働かないというのは立派なことを行なうことだ。

ヒッピアス　そうだ。

ソクラテス　すると、能力において勝っており、より優れている魂は、それが不正を働くような場合は故意に不正を働くことになり、一方劣っている魂は、心ならずもそうすることになるのではないか。

ヒッピアス　そうなるようだ。

B

ソクラテス　だが、善い人間というのは善き(優れた)魂を持っている者のことであり、悪い人間とは悪い魂を

持っている者のことだね。

ヒッピアス そうだ。

ソクラテス したがって、不正を故意になすというのは善い人間のなしうることであり、心ならずもそうするのは悪い人間のすることだ、ということになるね——善い人間は善い魂を持っているとする以上はね。

ヒッピアス うん、善い魂を持っていることは確かだ。

ソクラテス したがって、故意に過ちを犯したり、恥ずべき不正なことをなしたりする者というのは、ヒッピアス、かりにこういう人間がいるとしたら、それは善い人間をおいて他にはないことになるだろう。

ヒッピアス どう見ても、ソクラテス、その結論については君に同意できないね。

ソクラテス それはそうさ、言っている私でさえ自分に同意できないのだからね、ヒッピアス。でも、われわれが試みてきた議論によれば、現にそのような結論になってくるのは避けられないのだ。しかし、先ほども言ったことだが(2)、私は、この問題については、上へ下へと考えがふらついていて、一刻も同じ見解を持てないでいるのだ。考えがふらつくのが私や他の普通人のことであれば、べつに驚くほどのことでもない。だが、知者であるあなたがたまでもふらつくようなことにでもなれば、それはもう、われわれにとっても恐ろしいことだ——君たちのもとへ出掛けてきても、そのふらつきから解放されないわけだからね。

C

---

1 καὶ ἀδυνατωτέρα を補って読む。

2 372D 参照。

イオン

——『イリアス』について——

森進一訳

登場人物

ソクラテス

イオン

一

ソクラテス　御機嫌よう、イオン。今度のここでの滞在には、どこからやってきたのかね、家の方からかね、エペソス[1]の？

イオン　いいえ、ちがいます、ソクラテス。エピダウロス[2]からです、アスクレピオスの祭礼[3]に行ってのかえりです。

ソクラテス　まさかエピダウロスの人たちの催す奉納競技(仕合)には、吟誦詩人の競技もはいっていたというわけではないだろうね。[4]

イオン　それが大いにそうなのです。しかも、それ以外に詩や音楽の競技もあったのです。

ソクラテス　すると、どうなのかね。君はその競技でわれわれのために奮闘してくれたというようなことになるのかね。そして奮闘の結果はどうだったの。

B

イオン　われわれは一等賞を取って来たのです、ソクラテス。

ソクラテス　それは吉報だ。それなら、さあ、パンアテナイアの祭[5]でも、勝利がわれわれのものになるよう頑張ってくれたまえ。[6]

イオン　心配はいりません、きっとそうなるでしょう、神さまの御意がそこにありさえすれば。

ソクラテス　ところでね、ぼくはしばしば、君たち吟誦詩人に羨望の念をいだいたことがある、イオン、その

技術のことでね。理由はこうだ、一方では、君たちがつねに身の飾りをととのえ、しかもできるだけ美しく見せるようにしても、それは君たちの技術にとって、当然のこととされているし、同時にまた他方では、多くの他のすぐれた詩人たち、とりわけ詩人たちの中でも第一級で神にひとしいホメロスと君たちがつき合い、たんにその詩句のみか、その考えをもすっかり学びつくすことが、その技術にとって必要とされているが、これは羨望に値

C

することだからね。だってじっさい、もし人が、詩人によって語られている事柄を理解していなかったなら、すぐれた吟誦詩人になれるはずがないのだからね。なぜなら吟誦詩人は、詩人の考えを聴衆に取りつぐ人とならねばならないが、しかしそれを立派に果すことは、詩人が何を言おうとしているのか、それがわかっていなければ、不可能だからだ。かくて、これらすべてのことが、羨望に値することなのだ。

1　小アジアの西海岸に位置する、いわゆるイオニア移住民によって建てられた都市の一つ。他の植民地同様、アテナイ、スパルタの両国にたいし、時に応じて優勢な側につく、という態度をとっている。その接近離反は、本篇の対話想定年代にも多少参考となる。↓補注(I)D(一五八ページ)参照。

2　アルゴリス北東の海岸に位置し、アエギナ島に対している。古来アスクレピオス(次注参照)崇拝の地として知られ、音楽、体育などの諸競技が奉納されたという。

3　医術の神。一説には、アポロンとコロニスの間の子とも、また一説には、人間であって盲目の医者ともされている。その出生にまつわる崇拝は各地にあるが、エピダウロスがその中心地。その大祭は、四年ごとに行われ、四月末から七月初旬頃までの期間に、三日間続けられるという。

4　補注(I)A(一五七ページ)参照。

5　アテナイにおいては、アテナの女神に捧げる祭礼は年々行われるが、四年ごとにもっとも豪華に行われ、これをパンアテナイアという。七月から八月頃にかけての期間に行われた。さまざまの競技、行列、犠牲などが挙行され、祭礼の終りには、乙女たちの手で織られたペプロスが、アテナの女神に捧げられたという。パルテノンのフリィズは、その光景の一部をとどめていると言われる。

6　補注(I)A(一五七ページ)参照。

二

イオン　あなたの言われることは、ほんとうです。とにかくわたしが、一番多く苦労させられたのは、この技術のその点ですからね。そしてホメロスについて語るのは、わたしのものが、この世で一番みごとな出来だと信じています。それは、ランプサコスの人メトロドロス(1)にせよ、タソス島の人ステシンブロトス(2)にせよ、グラウコン(3)にせよ、その他かつてこの世に出た者の誰一人として、ホメロスにかんし、わたしが語るほども見事な考えの数かずを語ることは、できなかったほどなのです。

D

ソクラテス　それはうれしいことを言ってくれるね、イオン。だって、もとより君は、それをぼくに見せてくれることを渋ったりはしないだろうからね。

イオン　おまけに、聞くだけの値打はあるのですよ、ソクラテス、わたしがホメロスの飾りつけを、どんなにうまくやってきたかということはね。だからわたしは、ホメロス縁故(ゆかり)の人たち(4)から、黄金の冠をかぶせてもらう資格があると思っているのです。

531

ソクラテス　それはまた、ぼくも他日時間をこしらえて、君から拝聴することにしよう。しかし、さしあたって今のところは、つぎのことだけをぼくに答えてくれたまえ。君は、ただホメロスについてだけ、一目(いちもく)おかれるようなものをもっているのか、それとも、ヘシオドス(5)やアルキロコス(6)についてもそうなのか、どうかということだ。

イオン　後者については駄目なのです。ただホメロスについてだけなのです。だって、それでわたしには充分だと思われますから。

ソクラテス　でも、ホメロスとヘシオドスの二人が、同じことを語っているようなことがらがあるだろうか。

イオン　あると思いますよ、わたしはね、それも数多く。

ソクラテス　では、それらにかんして、君はホメロスの語っていることがらの方を、ヘシオドスの語っていることよりも、よりみごとに解明できるのかね。

B

イオン　それはソクラテス、すくなくとも、彼らが同じことを語っていることがらについてならば、同じようにやれるでしょう。

1　ランプサコスは、ヘレスポントス北端にある町。メトロドロスは、自然哲学者アナクサゴラスの友人で、その影響をうけ、ホメロスを自然学的関心で解釈したと伝えられる(Diog. L. II. 11)。前五世紀前半の人。

2　タソスはエーゲ海北部の島。ステシンブロトスは、前五世紀中葉の人。クセノポン『饗宴』第三巻(六)に、ホメロスを解釈する詩人の一人として、アナクシマンドロスと一緒にあげられている。

3　一説には、アリストテレスの『弁論術』第三巻(1403b25)に語られている、テオスの人グラウコン(詩における話術の面を問題にした人)とも、同じくアリストテレス『詩学』(1461b1)に語られている、批評家の主観性を批判したグラウコンとも見られている。

4　ホメロス縁故(ゆかり)の者と称する一団が、キオス島にいたと伝えられている。彼らはその理由で、とりわけホメロスの詩の吟誦や解釈を許されていたという。しかしまたこの名称が、たとえば、『国家』X. 599E に見られるように、もっと一般的に、「ホメロスの詩の賛美者」を意味するという解釈もある。今は前者の意味にとる。

5　ホメロスと並べられるギリシアの代表的叙事詩人。年代についてはいろいろ説があるが、ホメロスより多少後の人とされている。『神統記』、『仕事と日々』などが今日伝わっている。

6　キュクラデス諸島の一つであるパロス島出身の叙情詩人。前七世紀前半の人とされている。今日は断片しか残っていないが、イアンボス調の詩で、熱狂的な、あるいははげしい諷刺をこめたものに特色があるとされている。

ソクラテス　では、彼らが同じことを語っていないことがらについては、どうかね。一例をあげれば、予言術については、ホメロスもヘシオドスも語っていることが何かある。

イオン　ええ、まったく。

ソクラテス　ではどうだね、予言術について、その二人の詩人の語っていることがらで、言い方の同様なものと相違しているものとを、より見事に解明できるのは君の方だろうか、それとも、だれかすぐれた予言者たちの一人だろうか。

イオン　予言者たちの方です。

ソクラテス　だが、かりに君が予言者であるとすれば、いやしくも語り方の同様なことがらについて解明することができる以上は、語り方の相違していることがらについても、君はこれを解明することができるはずだろうね。

イオン　むろんのことです。

c　**ソクラテス**　では、いったいどうして君は、ホメロスについては一隻眼(いっせきがん)をもっているのに、ヘシオドスや、その他の詩人たちについては、もっていないのだろうか。それとも、それはこういうことかね、ホメロスは、他のすべての詩人たちの扱っていることがらとは、なにかべつのことがらについて語っているわけかね。ホメロスは、大部分、戦いについてくわしく語っているが、また、手に職をもったり(1)あるいはもたなかったりする、善き人びとや悪しき人びとの、たがいの交わりについても、また神々が、おたがいの間で、あるいは人間たちとの間で交わる場合の、その交わりの姿についても、また、天上のさまざまの出来事や冥界の出来事(2)についても、また神々

D

や英雄たちの種族についても、くわしく語っているのではなかったかね。ホメロスが、詩作にあたってとり扱ったものは、それらのことがらではなかったかね。

イオン あなたの言われるとおりです、ソクラテス。

三

ソクラテス では、他の詩人たちはどうだろうか。ホメロスと同じことがらを扱ってはいないだろうか。

イオン 扱っています。しかし、ソクラテス、彼らの詩作は、ホメロスと同じようではありません。

ソクラテス というと、どうなのかね？　ホメロスより、より拙くかね？

イオン はるかに拙くです。

ソクラテス むしろ、ホメロスは、より巧みにだね？

イオン ゼウスの神かけて、はるかに巧みにですとも。

ソクラテス 親愛なるイオンよ、では数について語る人があまたあるなかで、誰か一人、もっともうまく語る

E

人があるという場合、そのうまく語る人を見わけるはずの者が、誰かあるのではないかね。

イオン それは認めます。

1　たとえば、「手に職をもつ者」として、『オデュッセイア』第一七巻三八三―三八五行に、予言者、医者、大工、歌人などがあげられている。

2　「天上の出来事」とは、おそらくメトロドロス(530D注1)の解釈したと伝えられるような天体現象であろう。「冥界の出来事」は、『オデュッセイア』第一一巻の内容など。

ソクラテス　では、その同じ人がまた、へまを語る人びとをも見わけるのだろうか、それとも、それは別の人がするのだろうか。

イオン　むろん、同一人のすることでしょう。

ソクラテス　算術の技術をわきまえている人が、その人ではないのかね？

イオン　そうです。

ソクラテス　ではどうだ、健康に役立つ食物について、どのような性質がそうであるかを語る者があまたあるなかで、誰か一人、もっともうまく語る人があるという場合、そのうまく語る人がうまく語っている、ということを見わけられる人と、もっとへまを語る人がへまを語っている、ということを見わけられる人とは、別べつの人であろうか、それとも同一の人であろうか。

イオン　むろんきまっているでしょう、同一の人です。

ソクラテス　その人は、誰かね。何という呼名を、その人はもっているのかね。

イオン　医者です。

532

ソクラテス　そうすると、以上を要約して言うなら、同一の対象について多くの人びとが語る場合、誰がうまく語っているかを見わける人も、誰がへまを語っているかを見わける人も、いつも、同じ人だということになるだろう。いや、こう言ってもよい、すくなくとも同じことがらについてである以上は、もしへまを語っている人を見わけられないならば、あきらかにまた、うまく語っている人をも見わけられないだろう。

イオン　そのとおりです。

ソクラテス　そうすると、同じ人が、どちらの人についても、すぐれた識別能力をもつことになるね。

イオン　そうなります。

ソクラテス　さてそこで、君の主張はこうではないのかね、つまり、ホメロスも、また、ヘシオドスとアルキロコスとを含めた他の詩人たちも、彼らの語っていることがらは同じであるが、しかし語り方が同じだというのではない、一方ホメロスはうまく、それ以外の詩人たちははるかにまずく語っている、というのではないかね。

イオン　そうです、そしてそのわたしの主張は正しいということにもなります。

B

ソクラテス　すると、いやしくも君が、うまく語っている人を見わけられる以上は、君はまた、よりへまを語っている人びとについても、彼らがよりへまを語っているということを、見わけることができるはずだ。

イオン　どうやらそのようです。

ソクラテス　そうすると、すぐれた人よ、われわれが、イオンは、ホメロスについても、それ以外の詩人たちについても、同じように目ききがつとまると語って、そのわれわれの主張に間違いはないことになるわけだ。なぜなら、同じ人が、すべての人びと——すくなくともその人びとが、同じことがらについて語っているかぎりは——そのすべての人びとについて、充分に判別できる者になること、しかも他方、詩人たちの作品は、ほとんどそのすべてが、同じことがらを扱っているということ、このことは、君自身が認めているわけだからね。

四

イオン　それではいったい、どうしたわけなのでしょうか、ソクラテス、わたしは、誰かがホメロス以外の他

C
の詩人について人と話をしている場合には、気をとめることもないし、また、ちょっと気のきいたことを——それは何でもかまわないのですが——口ばさむこともできずに、そのままったく、居眠りをすることになってしまいます。ところが、誰かがホメロスについて言及するや、わたしはすぐに目を醒まし、注意を怠らず、口にする言葉に窮するということがなくなるのです——これはどうしたわけなのでしょうか。

ソクラテス そのわけなら、推量は困難ではないね、君。むしろ、誰にも明白なことなのだ、つまり、君はホメロスについて、技術と知識を用いては語ることのできない人だということだ。なぜなら、もし君がこれのできる人だとしたら、ホメロス以外の他の詩人についても、語ることができるはずだからね。というのも、詩作の技術というものは、なにか全体としてあるものだからだ。それともそうではないかね。

イオン そうです。

D
ソクラテス すると、ほかの技術の場合も、それは何でもいいが、これをもし人が全体として修(おさ)めるなら、巧拙を調べる方法は、あらゆる技術について同じものとなるのではないのか。ぼくがこう語っているのはどういう意味なのか、イオンよ、君はぼくから聞く気が、いくらかでもあるだろうか。

イオン ゼウスの神かけて、聞きたいものです、ソクラテス、このわたしとしてはね。だって、あなた方知者の言葉に耳を傾けるのは、わたしの愉しみですからね。

ソクラテス どうか、君の言うことがほんとうであってほしいね、イオン。しかし、おそらく知者というのは、君たち吟遊詩人や俳優たちや、また君たちが吟誦している詩の作者たちの方が、そうなのだと思う。これにたい
E
してぼくの方といえば、いわば素人相応のことながら、ただ真実だけを語るのだ。だって早い話、まあ見てみた

533

まえ、今しがたぼくが君にたずねたこと一つにしても、ぼくの語ったことは、いかに月並で素人風で、誰にでもすぐにわかる程度のことであるかを。つまり、人が技術を、全体として修めるのなら、巧拙を調べるのは同じやり方だという、それだけのことなのだ。なんなら、一つわれわれは、この点を議論してみようではないか。たとえば、絵画術は、一全体として、或る技術の一つなのかね。

イオン　そうです。

ソクラテス　ところで画家にも、上手なもの下手なものが、数多くいるし、またいたのではないかね。

イオン　それはむろん。

ソクラテス　それでは君は、これまでに、つぎのような人を、誰か見たことがあるかね、つまり、アグラオポンの息子ポリュグノトス(1)については、彼のうまく描いた作品とそうでない作品との両方を、はっきりさせうる目ききではあるが、他方ほかの画家については、それができない、というような人をね。つまり、誰かが、ポリュグノトス以外の画家の作品を展示するときは、居眠りをし、さしはさむべき言葉も見あたらずに当惑するが、他方、ポリュグノトスなりあるいは他の画家なりについては――画家たちのうち誰でも好きな人をえらんでもらっていいのだが――とにかく、その一人の画家について意見を述べねばならぬような場合には、目をさまし、注意

1　タソス島(530D注2参照)出身の有名な画家。前五世紀中葉の人。のち(前四六〇年前後の頃)アテナイの市民権をえて、多くの仕事を残した。アリストテレス『詩学』(1450a27-28)に、人物の性格を巧みに描いた画家とされている。あるいは同書(1448a5-6)には、画材にすぐれた人物を選んだ画家ともされている。テセウスの神殿、デルポイのアポロンの神殿に壁画を描き、その主題はおおむねホメロスその他の叙事詩からとられたという。

(533)

を向け、口にする言葉に窮することがない、というような人だね。

イオン　ゼウスの神かけて、そういう人はけっして見たことがありません。

B　**ソクラテス**　どうだね？　彫刻術において君はこれまで、こういう人を見たことがあるかね、つまり、メティオンの息子ダイダロス(1)や、パノペウスの息子エペイオス(2)、サモス島の人テオドロス(3)、その他誰か一人の彫刻家についてならば、そのうまくつくり上げた作品を解明する能力をもってはいるが、それ以外の彫刻家たちの作品においては、語るべき言葉も見あたらぬまま、当惑し、居眠りをするような人をね。

イオン　ゼウスの神に誓って、そういう人をも、見かけたことがありません。

ソクラテス　さらに、笛吹きの技（わざ）においても、竪琴の技においても、竪琴に合わせて唱歌する技においても、また吟誦詩人の技においても、ぼくは思うに、君はいまだかつて、こうした男を見たことはあるまい、つまり、C　オリュンポス(4)、タミュラス(5)、オルペウス(6)、イタケ出身の吟誦詩人ペミオス(7)、そうした人についてならば、解明するすぐれた能力をもってはいるが、しかし、エペソスの人イオンについては、イオンがうまく吟誦することがらとうまくないことがらのいずれについても、さしはさむべき言葉も見つからずに当惑する、というような男をね。

イオン　その問題について、わたしはあなたに反対意見を述べることはできません、ソクラテス。しかしつぎの点についてなら、それをわが身のこととして自認しているのです、つまり、わたしは、ホメロスについてならば、世にも見事に語り、言葉に行きづまることもなく、また、他の人たちもすべて、わたしの語りかたがうまいと言ってくれます。しかし、ホメロス以外の他の詩人たちについては、そうはゆかない、ということなのです。しかし、これはいったいどういうことなのか、さあ、一つ考えてみてください。

五

ソクラテス　それを考えてみているのだ、イオン。そのことを私がどう思っているかを、話してあげようとしているところだ。つまり、それは、技術として君のところにあるわけではないのだ、ホメロスについてうまく語る、ということはね——これが今しがたぼくが言おうとしていたことなのだ。それはむしろ、神的な力なのだ、

1　プラトンの時代、すでに伝説的人物となっていた工匠。彼が彫んだ木や石の彫像は動き出したと言う。「ダイダロス」という名前は、「技術に巧みな」という意味であり、その父の「メティオン」の名前も、「知略」の意味であり、いかにも伝説的な匂いが強い。もとアテナイの人であったが、甥の才能を嫉妬してこれを殺害したのち、クレタ島にのがれ、ミノス王の寵をえたという。クレタの「迷宮」は彼の作とされている。のちミノス王の怒りにふれ、みずから翼をつくってイタリアに逃れたとつたえられる。

2　伝説的工匠。『オデュッセイア』第八巻四九三行に、アテナの神助をえて、木馬をつくったと語られている(同書第一一巻五二三行参照)。また『イリアス』第二三巻六六五行には、拳闘に得意であったと語られている(『法律』VII. 796A 参照)。また『国家』X. 620C のエルの話の中では、技にすぐれた女性に生まれかわったとも語られている。コリントスのヘルメスやアプロディテの木彫は、一説に彼の作とされている。

3　サモス出身の同名の工芸家に、二人つたえられている。一人は、ヘロドトス『歴史』第一巻(五一)に、クロイソスがデルポイに寄進した贈物の中の銀の大杯が、テオドロスの作とされている。今一人は、同書第三巻(四一)に、エジプト王アマシスの忠告に従って、ポリュクラテスが海中に投じた指輪は、「サモスの人、テレクレスの息子テオドロスの仕事」と語られている。前者のテオドロスを、このテレクレスの兄弟とする説もある。いずれも前六世紀前半の人。ここで語られているのがどちらであるかは、きめがたい。

4　小アジアのプリュギアにおける伝説的な笛の楽師。『饗宴』215C に、マルシュアスから笛の技術を学んだとされている。『法律』III. 677D にも、マルシュアスと一緒に、音楽を初めて世につたえた人とされている。

5、6、7　→それぞれ補注(II)1、2、3(一六二ページ)参照。

それが君を動かしているのだ。それはちょうど、エウリピデス[1]はマグネシアの石[2]と名づけ、他の多くの人びとはヘラクレアの石[3]と名づけている、あの石にある力のようなものなのだ。つまり、その石もまた、たんに鉄の指輪そのものを引くだけでなく、さらにその指輪の中へひとつの力を注ぎこんで、それによって今度はその指輪が、ちょうどその石がするのと同じ作用、すなわち他の指輪を引く作用を、することができるようにするのだ。その

E

結果、ときには、鉄片や指輪が、たがいにぶら下がり合って、きわめて長いくさりとなることがある。これらすべての鉄片や指輪にとって、その力は、かの石に依存しているわけだ。これと同じように、ムゥサの女神[4]もまた、まずみずからが、神気を吹きこまれた人びとをつくる。すると、その神気を吹きこまれた人びとを介して、その人びととは別の、霊感を吹きこまれた人びとのくさりが、つながりあってくることになるのだ。すなわち、叙事詩の作者たちで、すぐれているほどの人たち[5]はすべて、技術によってではなく、神気を吹きこまれ、神がかりにかかることによって、その美しい詩の一切を語っているのであり、その事情は、叙情詩人たち[6]にしても、そのすぐれた人たちにあっては同じことなのだ。つまり、叙情詩人たちもまた、ちょうどコリュバンテスの信徒たち[7]が、

534

正気を保ちながら踊るのではないように、同様に、正気を保ちながらその美しい詩歌をつくるのではない。むしろ彼らが調和や韻律の中へ踏みこむときは、彼らは、狂乱の状態にあるのだ。そして、ちょうどバッコスの信女たちが、河から蜜や乳を汲みあげるのは[8]、神がかりにかかることによってであって、正気のままでいたのではそうはできないのと同じように、叙情詩人たちの魂もまた、神がかりにかかることによって、彼らみずからが語っているそのとおりのことを行っているのだ[9]。というのも、思うに詩人たちは、われわれにこう語っているはずだ

B

――彼らは、あたかも蜜蜂さながらに[10]、彼らみずからも飛びかいながら、ムゥサの女神たちの庭や谷にある蜜の

泉から、その詩歌をつみとり、われわれのもとにはこんでくるのだと。[11] その彼らの言葉は、真実でもあるわけだ。というのも、詩人というものは、翼もあれば神的でもあるという、軽やかな生きもので、彼は、神気を吹きこまれ、吾を忘れた状態になり、もはや彼の中に知性の存在しなくなったときにはじめて、詩をつくることができるのであって、それ以前は、不可能なのだ。けだし、いかなる人も、彼が、この知性という財宝を保っているかぎりは、詩をつくることも、託宣をつたえることも不可能なのである。だから詩人たちが、いろいろなことがらに

1　ギリシア三大悲劇詩人の一人。前四八〇—四〇六年頃の人とされる。アナクサゴラスの友人であったと言われる。『メディア』、『トロイアの女たち』、『エレクトラ』、『ヒッポリュトス』、『バッコスの信女』など、多くの名作が残されている。その断片(五七一)に、「マグネシアの石のように、意見を引きよせたり変えたりする人」、というような言葉が残されている。

2　リュディアのシピュロス山の近くにも、テッタリアにも、同名の地がある。またカリアにも同名の町がある。しかし一説(プリニウス『博物史』第三六巻(一二七))には、その石の発見者の名前からつけられたとも言われている。それはイダの牧人で、靴の留金が杖の先にくっついたことから発見したという。

3　カリアのマグネシアの南ほぼ二五マイルのあたりに同名の町があるが、しかしおそらくは、その石の牽引力を、絶大の能力をもっていた英雄ヘラクレスと結びつけて言われているのであろう。『ティマイオス』80Cにおいても、「ヘラクレアの石」という言葉が使われているが、そこでは、その石のもつ牽引力の存在が否定されている。

4　本来は九人よりなる音楽文芸の神々の一人。カリオペ、クレイオ、エウテルペ、テルプシコレ、エラト、メルポメネ、タリア、ポリュムニア(或いはポリュヒムニア)、ウラニアがそれである。それぞれ担当部分が異っているが、諸説きめがたい。

5　ホメロス、ヘシオドスなど。

6　竪琴やキタラによって伴奏されながらうたう詩歌の作者。アルカイオス、サッポオ、アナクレオンなどがそれである。

7　コリュバンテスとは、小アジアのプリュギアの地方信仰の対象である女神キュベレ(或いはキュベベ)の信徒たち。ディオニュソス信仰の一種で、秘儀的迷信に近い。

8、9、10、11　↓それぞれ補注(II)4、5、6、7(一六二ページ)参照。

C ついて、かずかずの美しいことを語って詩作するのは、ちょうど君が、ホメロスについてそうするのと同じように、技術によってではなく、たまたま神のめぐみとしてあたえられたものによってである以上、それぞれの詩人は、ムゥサの女神が、それぞれをそこへ駆り立てた分野においてのみ、見事に詩をつくることができるわけだ。たとえば、或る詩人はディテュランボス調の詩(1)を、或る詩人は賛歌(2)を、或る詩人は舞踊歌(3)を、或る詩人は叙事詩を、或る詩人はイアンボス調の詩(4)を——というようにね。しかし彼らはそれぞれ、他の分野においては、凡庸の詩人となる。それというのも、彼らがそれらを語るのは、技術によってではなく、神力によってだからだ。というのも、もし彼らが、なにか一つのことがらにかんし、技術によって見事に語るすべを心得ているのであれば、他の分野のすべてについても、語りうるはずだからである。以上のようなわけで、神は、彼ら詩人たちからその

D 知性を奪い、託宣を告げる者たちや神の意をとりつぐ聖なる人たち(5)を召使として使用しているように、詩人たちをも召使として使用しているのであるが、その神の意図は、聴衆であるわれわれに、つぎのことを知らしめようとしているわけだ。つまり、それほども値打のある数かずのことを語るのは、知性の不在沈黙にある彼らではない、むしろ、神みずからがその語り手であり、神みずからが、彼ら詩人たちを介して、われわれに言葉をかけているのだ、ということをね。以上の話の最大の証拠となるものは、カルキスの人テュニコス(6)であろう。というのも彼は、人が記憶に値すると見なおすほどの詩は、ついには他に何一つつくりはしなかったが、しかし、万人の歌う一つの頌歌(7)をつくったからだ。それはおそらく、あらゆる叙情詩の中でももっとも美しいものであり、まさ

E しく彼みずからの語るように、「ムゥサの女神たちの見出せしもの」であった。けだし神は、なによりもこのテュニコスの例において、われわれが疑い迷うことのないように、つぎのことをわれわれに示そうとしているのだと、

535

ぼくには思われるのだ。すなわち、それら数かずの美しい詩は、人間わざではなく、また人間たちのものでもない。むしろ神わざであり、神々のものであること、また詩人たちは、神がかりにかかることによって——彼らそれぞれの神がかりにかかる神は、いつもきまっているわけだが——その神々の取つぎ人以外の何ものでもない、ということを。こうしたことを示す意味で、神は、ことさらにもっとも凡庸の詩人を介して、もっとも見事な叙情詩をうたったのだ。いや、それとも君には、ぼくが真実を語っているとは思われないかね、イオン。

1　言葉の起源は明瞭ではないが、アルキロコス（531A注6）が初めて、ディオニュソスに捧げるこの歌を、雷に打たれるように、酒に打たれることによって歌いはじめたと伝えられている。最初は一定の形式を所有していなかったが、コリントスのアリオンにより、前六〇〇年頃、その主題と合唱隊に一定の規則があたえられ、それによってさらに悲劇的調子が高められたという。コリントスからアテナイにつたわり、やがてディオニュソス大祭で競演されるようになった。いわゆる五〇人の合唱隊による舞踊である。アリストテレスは、『詩学』($1449^{a}11$)において、悲劇の起源をここに見ている。

2　『国家』X. 607Aに、神々への聖歌（ヒムノス）と、すぐれた人びとへの賛歌（エンコミオン）とが、区別されている。ピンダロスの賛歌は後者の代表的なものである。

3　長短長（—◡—）の韻律で歌われ、舞唱をともなった。ピンダロス、シモニデス、バッキュリデスなどの断片が、今日残されている。

4　ギリシア悲劇の対話部分に使われる、いわゆる短長（◡—）を基本にした韻律が、イアンボス調である。これはアルキロコスにより、一種の毒舌調としての意味があたえられたという。

5　「託宣を告げる者たちや神の意をとりつぐ人たち」というように、両者を並べて書くことは、他の作品にも見られる。たとえば『ソクラテスの弁明』(22C)、『メノン』(99C～D)など。

6　今日では名前だけしかつたわっていない。カルキスは、エウボイア西岸の町。近くに銅山（カルコス）のあるところから、その名をえたという。

7　神にささげる聖歌（ヒムノス）のうち、本来はアポロンの神にささげられるものを頌歌（パイアン）と言うとされている。のちにはもっとひろい意味で用いられた。『法律』700B～C参照。

イオン　ゼウスの神に誓って、すくなくともわたしには、あなたが真実を語っていられるように思われます。なぜならあなたは、今の話によって、わたしの魂にふれました、ソクラテス。そしてすぐれた詩人たちは、神の特別の恩恵によって、神々からわれわれのもとへ、それらのことを取りついでいるように、わたしには思われます。(1)

六

ソクラテス　そうすると、君たち吟誦詩人は吟誦詩人で、今度はまた、その詩人たちの言葉を通訳しているのではないのか。

イオン　その点も、あなたの言うことは真実です。

ソクラテス　そうすると、君たちは、取つぎ人の取つぎ人、ということになるのではないかね。

イオン　まったくそのとおりです。

B **ソクラテス**　さあ、ではぼくに、つぎのことを答えてくれたまえ、イオン、そして、ぼくが君に何をたずねても、隠し立てはしないようにしてくれたまえ。君が叙事詩をうまく物語り、この上なく観客の胸を打つような場合、たとえば、オデュッセウスが敷居の上にとびのり、求婚者たちの前にわが姿をあらわし、足もとへ矢をまきちらすさまを、(2)或いはアキレウスが、ヘクトルに向って行くさまを、(3)或いは、アンドロマケやヘカベやプリアモスの身に起こった、あわれをそそることがらの一端を(4)——それらを君が物語るとき、そのとき君は、正気を保っ

C ているのだろうか。それとも君は、吾を失い、君の魂は、君が物語っている出来事のもとへ——その出来事がイ

タケ(5)において生じていようと、トロイア(6)においてであろうと、はたまたその出来事がどこにおいて行われていようと——霊感にうたれてそのもとへ出かけているとは、思われないかね。

イオン ソクラテスよ、あなたがわたしに語られたそうした証拠は、いかにも明々白々です。だって、わたしはあなたに、隠し立てをしないで話すでしょうからね。つまりわたしが、何かあわれをそそることがらを物語るようなときは、わたしの目は涙でいっぱいになるのです。またわたしが、怖ろしいことやぞっとすることを物語るようなときは、恐怖のために髪は逆立ち、心臓は動悸するのです。

D **ソクラテス** ではどうだろうか。われわれは、イオン、そういう場合、その人間を正気であると言ったものだ

1 たとえば、『パイドロス』245A、『ソクラテスの弁明』22B～C、『メノン』99C～D、『法律』IV. 719Cなど参照。→補注(I)B(一五七ページ)参照。

2 『オデュッセイア』第二二巻二—四行。

3 『イリアス』第二二巻一三一行以下、或いは同書同巻三一二行など。

4 アンドロマケは、トロイアの勇将ヘクトルの妻。ヘクトルが妻のアンドロマケに、自分が戦死したあと、妻の身にふりかかる運命を思いやる有名なくだり(『イリアス』第六巻三七〇—五〇二行)や、アンドロマケが夫の死を知るくだり(同書第二二巻四三七—五一五行、第二四巻七二三—七四六行)などが、考えられているのであろう。

またヘカベは、ヘクトルの母であると共に、トロイア王プリアモスの五〇人の息子のうち一八人の母。息子ヘクトルの死を悼む場面(『イリアス』第二四巻七四七—七五九行、第二二巻四三〇—四三六行)などが、考えられているのであろう。

プリアモスについては、ヘクトルの死を嘆くところ(『イリアス』第二二巻四〇八—四二八行)や、ヘクトルの亡骸をもらいうけするところ(同書第二四巻一四四—七一七行)などの場面が、考えられているのであろう。

5 ギリシアの西方、アカルナニア海岸に面した小島。オデュッセウスの故郷。

6 トロイア戦争の舞台。小アジアのヘレスポントスの峡口に位置する一地方。その地の中心都市にイリウムの町がある。

ろうか。つまり、犠牲や祭礼の儀式において、色とりどりの衣裳や黄金の冠で身を装いながら、その装いの何一つをも失ってはいないのに、嘆きの声をあげたり、或いは、二万人をこえる親しい人びとの間に立っていながら、その誰一人として、身ぐるみをはいだり不正を加えたりするわけではないのに、恐怖にかられているような人間をね。

イオン　ゼウスの神に誓って、断じて正気ではありません、ソクラテス、とにかく真実を答えるのだとすれば。

ソクラテス　ところで君たちが、たいていの観客たちにも、そういう同じ効果を及ぼしていることを、君は知っているかね。

E

イオン　知っていますとも、それもじつによくね。といいますのも、いつだってわたしは、演台の上から、彼らが嘆き悲しんだり、こわそうな目つきをしたり、或いは語られていることに感動したりしている姿を、見ているのですから。なにしろわたしは、彼らの方に注意を——それも大いに——払っていなくてはならないのです。というのも、もしわたしが彼らを嘆き悲しませると、わたし自身の方がお金を儲けて笑うことになりますが、反対に、もし彼らを笑わせようものなら、わたしの方がお金を儲けぞこなって、嘆き悲しむことになるのですからね。

七

ソクラテス　ところで君は知っているかね、その見物人が、あの指輪——ヘラクレアの石によって、たがいにつぎつぎと力をうけとってゆくと、わたしの語った——あの指輪のつながりの、最後になることをね。そのつながりの中間は、君という吟誦詩人かつ俳優(1)であり、そのつながりの最初は、ほかならぬ詩人自身なのだ。これに

536

たいし神は、これらつながりのすべてを通じて、つぎからつぎへと力を移転させながら、その望むままのところへ、人びとの魂をひっぱってゆく。そしてまた、ムゥサの女神に端を発してつながっている指輪から、側面の方向につながりながら、コロスの舞唱隊、その教師たち(2)、教師の下に立つ助教たちの、じつに広大なくさりが、ちょうどあの石に端を発する場合と同様に、つながりあっているのだ。また詩人たちは、それぞれそのつながるムゥサの女神を異にしているわけで、このつながりを、われわれの言い方では、「占有されている」と呼んでいるが、しかしこの言い方は、当らずとも遠からずだ。なぜなら、「有たれていること」なのだから。

B

さて、この最初の指輪である詩人たちのうち、或る詩人にはこの吟誦詩人が、他の詩人には別の吟誦詩人が、というぐあいに、異った吟誦詩人たちがつながっており、もとの詩人たちから霊感を吹きこまれている、たとえば、或る吟誦詩人たちはオルペウスに、他の詩人たちはムゥサイオス(3)に、というように。しかし、たいていの吟誦詩人たちは、ホメロスに占有され、ホメロスによって有たれている。そのたいていの詩人たちの、イオンよ、君は一人なのだ。そして、ホメロスに占有されているわけだ。だから、誰かがホメロス以外の他の詩人の詩句をうたうときは、君は居眠りをし、語るべき言葉に当惑する。しかし、その詩人〔ホメロス〕の詩句を誰かが口にするや、君はたちま

1　アリストテレスは、『詩学』(1462a6–7)において、吟誦詩人ソシストラトスを例にあげ、吟誦者が過剰の演技をすることにふれているが、この場合も、吟誦詩人が、俳優の身ぶりもするという意味で、同等の者として並べられているのであろう。

2　コロス(合唱隊)を訓練する教師の役は、もとは詩人自身がこれにあたっていたという。

3　トラキア出身の伝説的人物。オルペウスの息子とも弟子ともつたえられる。多くの宗教詩や託宣の集録が、彼に帰せられている。またアリストパネスの『蛙』(一〇三二―一〇三三行)には、オルペウスと一緒にあげられ、医術や予言術を教えたとも語られている。

(536)
C
ち目をさまし、君の魂は踊り出し、君は語るべき言葉に窮することがない。それというのも、君が、ホメロスについて口にするさまざまな言葉を語るのは、技術によってでも知識によってでもなく、むしろ神の特別の恩恵をうけて、つまり霊感に占有されることによってだからなのだ。それはちょうど、コリュバンテスの信徒たちが彼らのとり憑かれている神に関係のある詩句だけは、鋭敏に感覚し、その詩句に合うように、踊る身振りにも語る言葉にも窮することはないが、それ以外の詩句には無頓着であるのと、事情は同じなのだ。君もまたそのように、イオンよ、人がホメロスに言及する場合には、言葉に窮することはないが、ホメロス以外の詩人については、当

D
惑するわけだ。そこで、君がぼくにたずねているあの原因、つまり、なにゆえに君は、ホメロスについては言葉に窮しないが、他の詩人についてはそうはゆかないのか、というその原因は、このことにある——すなわち、君は、技術によってでなく、神の特別の恩恵によって、ホメロスのすぐれた吟誦詩人になっている、ということにあるのだ。

八

イオン　あなたの言葉は見事ですよ、ソクラテス。とはいえ、あなたの話し方がいかに上手だとしても、わたしを説き伏せて、わたしがホメロスを賛美するのは、霊感にとりつかれ、狂気にかられてのことだと信じさせるほどかどうか——もしそこまで見事なら、わたしは驚くことでしょう。しかしわたしは思うのですが、もしあなたが、わたしがホメロスについて語るところを直接聞けば、あなたにしても、わたしがそのようだとは思われないでしょうね。

E

ソクラテス そのことなら、聞く気特は大いにあるよ。ただしそれを聞くのは、君がぼくに、つぎの点を答えてくれてからのことにしたいね。つまり君は、ホメロスの語っていることがらのうち、いったいどのことがらについて、うまく語るのかね。だって、まさかそのすべてのことがらについて、というのではないだろうからね。

イオン ぜひあなたに知っておいてもらいたいものですね、ソクラテス、わたしの物語れないようなことがらは、何もないということを。

ソクラテス だがきっと、たまたま君の方はその知識をもっていないのに、ホメロスの方はそれを語っているというようなことがらについては、君も物語れまい。

イオン いったいそれは、どのようなものです？ ホメロスの方は語っているが、わたしの方はその知識をもっていないようなことがらとは。

537

ソクラテス ホメロスは、いろいろな技術についても、いたるところで、それも数多く語っているのではないかね。たとえば、御者（ぎょしゃ）の術についてすらもね——もしその詩句が思い出せれば、ぼくが君に言ってあげられるのだが。

イオン いや、わたしが語りましょう。わたしは憶えていますから。

ソクラテス では、ネストル(1)が、息子のアンティロコスにたいし、パトロクロス(2)に捧げられた二頭馬車の競技

1 トロイア戦争におけるヘラス側の勇将。弁舌に長じ、高齢であったため、仲間争いでも仲裁に立つことが多かった。

2 アキレウスの親友。「パトロクロスに捧げられた二頭馬車の競技」とは、この引用のためにつくられた言葉というよりも、おそらくは『イリアス』のこの部分につけられていた、固定した呼び方ではなかったか、と考えられる。

で、まがり角のところで気をつけるように注意しながら語っているところを、(1) ぼくに言ってくれたまえ。

イオン

〔彼は語る〕

よく磨かれた車台で

自分もわずかに身をまげよ、

二頭の左側(2)へと。

B

他方右の馬には、

掛声もろとも鞭をくれ、

手にもつその手綱をゆるめてやれ。

そしてまがり角の標柱にいたれば、

それとすれすれに、左の馬を行かしめよ、

つくりも見事な車輪のこしきが、

柱の端をかすめるかと見えるほどに。

されど傍の石には

ふれるを避けよ。

C

ソクラテス それで充分だ。さてイオン、以上の詩句を、ホメロスが正しく語っているかどうか、それをより

よく識別できるのは、医者と御者のどちらだろうか。

イオン　それはむろん、御者でしょう。

ソクラテス　それは、御者が、そのことを技術として心得ているからなのか、それとも、なにか他のことによってなのか。

イオン　他のことによってではなく、技術として心得ているからです。

ソクラテス　ところで、それぞれの技術には、何か一つの仕事〔の出来不出来〕を識別する能力が、神によってわりあてられているのではないのか。なぜなら、われわれは、航海術によって識別することを、医術によっても識別するということは、おそらく、できないだろうからね。

イオン　それはけっして。

ソクラテス　さらにまた、医術によって識別することを、建築術によって識別することもできないだろう。

イオン　けっして。

D

ソクラテス　では、いかなる技術についても、事情はそのようであって、われわれは、一つの技術によって識別することを、別の技術によって識別することはできないのではないか。いや、そのことより先に、まずつぎの点を、ぼくに答えてくれたまえ。君は、一方の技術は甲の性質であり、他方の技術は乙の性質であるというように、それぞれが異っている、と主張するかね。

1　『イリアス』第二三巻三三五―三四〇行。↓補注(I)H(一六〇ページ)参照。

2　「二頭の」左側、ではなく、「二本の標石の」左側、とする解釈もある。

イオン　します。

ソクラテス　とすると、どうだろうか、一方の技術は甲のことがらを対象とした知識であり、他方の技術は乙のことがらを対象とした知識である場合、ぼくは、その事実をもとにして、それぞれの技術を、別べつの名で呼ぶのであるが、君もまたそのようにするだろうか。

E

イオン　わたしもそうします。

ソクラテス　その理由は、おそらくこうだろうね、つまり、もし同じことがらを対象とした何らかの知識があるとするならば、われわれは、何をもって、これを甲と乙というような別べつの技術であると、主張することができるだろうか——いやしくも両者によって、同じことがらが知られうるかぎりはね。たとえばこうだ、「これらの指は五本ある」ということを、ぼくの方も識別し、君もまた、ぼく同様に、それらの指について、同じことを識別するとする。そして、もしぼくが君に、ぼくと君とは、算術という同じ技術によって、同じことがらを識別しているのか、それとも、別べつの技術によって識別しているのか、とたずねるとすれば、きっと君は、同じ技術によって、と主張するであろう。

イオン　ええ主張します。

538

ソクラテス　それでは、先ほどぼくが君にたずねようとしていた問い(1)に、さあ、ここで答えてくれたまえ。すべての技術について、君にはこういうふうに思われるだろうか、つまり、同一の技術によっては、当然同一のことがらを識別するわけだが、他方、これと異った技術によっては、これと同一のことがらを識別するのではなく、その技術が異っている以上、当然異ったことがらを識別するのでなくてはならない、とね。

イオン　わたしにはそのように思われます、ソクラテス。

九

ソクラテス　ところで、誰にせよ、何らかの技術をもっていないような人は、語られたこと行われたことの如何を問わず、その持っていない技術に属することがらを立派に識別することは、できないのではないだろうか。

イオン　あなたの言われるとおりです。

B

ソクラテス　それでは、君が物語ってくれたあの詩句の場合、ホメロスがそれを立派に語っているかどうか、そのことを、君の方がよりよく識別するだろうか、それとも御者の方だろうか。

イオン　御者です。

ソクラテス　思うに、その理由はこうだ、君は吟誦詩人であっても、御者ではないからだ。

イオン　そうです。

ソクラテス　また、吟誦詩人の技術は、御者の技術とは異っているね？

イオン　そうです。

ソクラテス　したがって、それが異っている以上は、また知識としても、異った対象にかかわることになる。

イオン　そうです。

1　537D参照。それぞれの技術は、それぞれ異った対象をもつのではないかという質問。

C

ソクラテス　それではどうだ、マカオン(1)が傷ついたとき、ネストルの側妾ヘカメデ(2)が、混合酒を飲むようにあたえたとホメロスの語っている場合は、どうだろうか。ホメロスは、ほぼこんなふうに語っている――

〔ホメロスは語る〕

〔女神のような女（ヘカメデ）は〕プラムノス酒で〔混ぜておもゆをつくり〕、
さらに山羊のチーズを、
青銅のチーズおろしですりくだいた(3)、
また、酒の肴の玉葱をそえた(4)。

これらの言葉を、ホメロスが正しく語っているかどうか、それを立派に識別するのは、医術の仕事なのか、それとも吟誦詩人の仕事なのか、どちらだろうか。

イオン　医者の仕事です。

ソクラテス　それでは、ホメロスがつぎのように物語る場合はどうだろうか――

D

彼女〔イリスの女神〕は、
鉛の重りさながらに、
海の底に達していった、
その重りとは、
牧場の牛の角にはめこまれ、
貪欲な魚に禍をもたらすべく

速やかに沈みゆくもの(5)。

これらの詩句において、ホメロスが何を語っているのか、また立派に語っているかどうか、それを判定するのは、むろん魚釣りの技術の仕事であると、われわれは主張すべきだろうか、それとも吟誦詩人の仕事であると主張すべきだろうか。

イオン　明らかにソクラテス、それは魚釣りの技術の仕事です。

1　アスクレピオスの息子で(『イリアス』第一一巻五一八行、同巻六一三—六一四行)、トロイア戦争では、アガメムノンのもとにあって、医者としてギリシア軍を助けた。パリス(アレクサンドロス)の矢に右肩を射られ、ネストル(537 A注1(一三七ページ)参照)に助けられて後陣に運ばれるくだり(『イリアス』第一一巻五〇六—五二〇行)。

2　テネドス島の王アルシノオスの娘で、アキレウスがテネドス島(トロイアのやや南方対岸の島)を攻略したとき、ネストルの知謀の褒賞として、ネストルにあたえられた女(『イリアス』第一一巻六二四—六二七行)。

3　『イリアス』第一一巻六三八—六四〇行。ただし六四〇行の後半は、現在われわれのもっている原文の「その上に白い大麦粉をふりかけた」という詩句は省かれ、別の箇所からの詩句にかえられている(次注参照)。引用が詩句の途中からはじまっているので、〔 〕の言葉を補った。「プラムノスの酒」とは、プラムネの山からとれることにちなんだと伝えられているが、その山の位置は諸説きめがたい。

4　六四〇行後半「酒……」以下は、同書第一一巻六三〇行の一行がつけ加えられている(前注参照)。なお、『国家』III. 405E～406Aに、同じ酒が、エウリュピュロスの負傷したときにもあたえられることになっている。→補注(I)H(一六〇ページ)参照。

5　『イリアス』第二四巻八〇—八二行。イリスの女神が、ゼウスの命をうけて、テティスを呼びにゆくくだり。なおDの「すみやかに」(或いは「烈しい勢で」ἐμμεμαυῖα)は、ホメロスの原文では ἐμβεβαυῖα(「はめこまれて」)となっている。しかし ἐμμεμαυῖα にはその意味はないので、κατ᾽ の前置詞にその意味を補っておく。なお「牛の角」については、釣糸が魚に嚙まれないように、釣針のすこし上のところで糸の上につけられたもの、という説と、魚をおびきよせるために、小さな魚の形に似せられ、囮(おとり)のかわりとしてつくられたもの、という両説がある。

E

ソクラテス　では、君が質問すると仮定して、まあ見てみたまえ。もし君が、こう質問する場合――「さて、ソクラテス、あなたはホメロスにおいて、以上の技術のそれぞれが判定するのにふさわしいことを見出したわけですから、さあどうか、予言者や予言術に属することがらについても見出してください、いったいどのようなことがらなのでしょうか、そのことがらのうたわれ方の上手下手を見わけられる能力が、予言者にふさわしいようなことがらとはね？」――こう君が質問する場合、まあ見てみたまえ、ぼくが君に、いかにわけもなく真実を答えてみせるかをね。というのも、ホメロスは、オデュッセイアの中でも、そのいたるところで、そのことがらを語っているからだ。たとえば、メランプスの末裔[1]である予言者テオクリュメノス[2]が、求婚者たちに向かって語る言葉のように――。

539

呪われた人びとよ、
お前たちの身にうけているその禍は何としたことか。
お前たちの頭、その顔、下っては脚までも、
夜の帳(とばり)におおわれている。
嘆きの声は燃えひろがり、
頬は涙にぬれている。
玄関の扉も中庭も、幽鬼でいっぱいだ、
冥府(ハデス)への道を、暗き冥府へと、
急ぎゆく幽鬼たちで。

B

天の太陽はすっかり姿を消し、
不吉な霧があたりをかけめぐっている。(3)

またイリアスにおいても、いたるところで、ホメロスはそのことがらを語っている。たとえば、「城壁での戦闘」(4)の箇所においてのように。すなわち、そこでは、こう語っている――

というのは、
一羽の鳥、空高く舞う鷲が、
兵士たちが、城壁を突切ろうと必死になっているのを、
左手の方へさえぎりながら、
彼らの方へ向かってきたのだ、
血の色をした怖ろしい蛇の

C

1 メランプスは、すぐれた予言者で、もとピュロスに住んでいたが、のちネレウスの仕打を逃れてアルゴスにゆき、アルゴス人たちを支配したという(『オデュッセイア』第一五巻二二五―二四〇行)。なお同書第一一巻二九一行にも、メランプスのことが、「完全無欠な予言者」として語られている。

2 メランプスからテオクリュメノスまでの系譜については、『オデュッセイア』第一五巻二四一―二五六行参照。メランプスにはアンティパテス、マンティオスの二人の子供がいたが、そのマンティオスは、ポリュペイデスとクレイトスの父となり、そのポリュペイデスの子供がテオクリュメノスである。なお同書同巻二五七以下において、父オデュッセウスを探しにきたテレマコスが、このテオクリュメノスと逢うくだりが語られている。

3 『オデュッセイア』第二〇巻三五一―三五七行(但し三五四行は省かれている)。

4 「城壁での戦闘」は、『イリアス』第一二巻の巻名。

いまなお生きてもがくのを、
その爪で運びながら。
蛇はまだ戦意を失ってはいなかった。
身を後にそらし、
おのれを摑んでいる鷲の頸近い胸の
あたりに、嚙みついたのだ。
鷲は、その痛みにたえかね、
大地へ投げ、
並み居る兵士の真只中へ蛇を落した。
そして一声高く啼くや、
吹く風と共に飛び去った。(1)

D

こうした詩句、これに類した詩句を、調べることも判定することも、予言者にふさわしいことだと、ぼくは主張しようと思うのだが。

イオン そのあなたの言葉は、真実でもあるのです、ソクラテス。

一〇

ソクラテス そして君もまた、イオン、その返答で真実を語っているのだ。さあ、では君も——ちょうどぼく

が、どのようなことがらをのべた詩句が予言者にかかわり、どのような詩句が医者に、またどのような詩句が釣り師にかかわるのか、その詩句を、オデュッセイアからもイリアスからも、君のために選び出したように、そのように君の方もまた、とりわけ君が、ぼくよりもはるかにホメロスの詩句に明るいのでもあれば、ぼくのために選び出してくれたまえ、どのようなことがらをのべた詩句が、イオン、吟誦詩人に、また吟誦詩人の技術にかかわるのか、つまり、それを調べることも判定することも、ほかの人びとはさしおいて、吟誦詩人にこそふさわしいとされるようなことがらをね。

イオン わたしは主張します、ソクラテス、すべてのことがらがそうだと。

ソクラテス ところが、イオン、すくなくとも君は、すべてのことがらがそうだとは、主張してはいないのだがね。それとも、君はそれほど忘れやすいたちなのだろうか。しかし、吟誦詩人にして忘れやすい男とは、ふさわしくない話だろう。

イオン いったいぜんたい、ぼくが何を忘れているというのです?

ソクラテス 君は、吟誦詩人の技術が、御者の術とは別のものだと主張したことを(2)、憶えてはいないのかね。

イオン 憶えています。

1 『イリアス』第一二巻二〇〇—二〇七行。トロイア勢がアッカイア勢に進撃しようとするとき、ここにうたわれているように、鷲がそのくわえていた蛇を落とした。ポリュダマスが、これは獲物を巣まで持ちかえれないことを意味する不吉のしるしであるとして、ヘクトルに進撃を思いとどまらせようとするくだり。

2 538B参照。

ソクラテス　また君は、それらが異った技術である以上、その識別するもの(対象)の異っている点をも、同意したのではなかったのか。

イオン　しました。

ソクラテス　とすると、その君の説によれば、吟誦詩人の技術も、また吟誦詩人も、とにかく、すべてを識別する、ということにはならないだろう。

イオン　しかし、おそらく、それに類したことがらを別にすれば、ソクラテス、すべてということになりましょう。

B

ソクラテス　「それに類したことがら」〔を別にすれば〕と君は言うが、それは、「吟誦詩人の技術以外の他の諸技術の対象」を別にすれば、というほどの意味になる。だが、吟誦詩人の技術とは、それがすべてのことがらを識別しないという以上は、いったいどのようなことがらを識別するのだろうか。

イオン　すくなくとも、わたしの思うところでは、それは、男にとっては何を語るのがふさわしいか、また女にとってはどんなことが、奴隷にとってはどんなことが、自由人にとってはどんなことが、また支配されるものにとってはどんなことが、支配するものにとってはどんなことがふさわしいか、それらを識別するのです。

ソクラテス　そうすると、君はこういうことを意味しているのかね、つまり、海で嵐に逢った舟を管理する人にとって語るにふさわしいようなことがらを識別するのは、舵をあずかる人よりも、吟誦詩人の方がより見事だろうとね？

イオン　いいえ、すくなくともそういうことなら、舵をあずかる人の方です。

C

ソクラテス　病人の指図をする人が語るにふさわしいようなことがらを識別するのは、医者よりも、吟誦詩人の方が見事だろうか？

イオン　そういうことも、またそうではありません。

ソクラテス　しかし、奴隷が語るにふさわしいことがらなら、と、君は言うのかね？

イオン　ええ。

ソクラテス　君の意味しているのは、こういうことかね、つまり、暴れる牛をしずめる牛飼いの奴隷が語るにふさわしいようなことがらを識別するのは、吟誦詩人の方であっても、牛飼いの方ではないだろう、といったことを？

イオン　いいえ、けっして。

D

ソクラテス　では、毛糸を紡ぐ女が、毛糸の仕事について語るにふさわしいようなことがらを、というのかね？

イオン　いいえ。

ソクラテス　では、兵士たちを勇気づける将軍の男が語るにふさわしいようなことがらを、吟誦詩人は識別することになるのだろうか？

イオン　そうです、そういうことがらを、吟誦詩人は、識別することになりましょう。

二

ソクラテス　すると、どうなのかね？　吟誦詩人の技術は、将軍の技術なのかね。

からね。

イオン　とにかく、すくなくともわたしは、将軍の語るにふさわしいようなことがらを、識別できるでしょう

ソクラテス　それはおそらく、イオン、君が将軍の技術をも心得ているからなのだろうね。というのも、もし君が、かりに竪琴の技術を心得ているとともに、たまたま騎士の技術をも心得ているとすれば、君は、よく調教されている馬と、下手に調教されている馬とを、識別したはずだからね。だが、もしぼくが君に、「ねえイオン、

E

君が、よく調教されている馬を識別するのは、いったいどちらの技術によってなのかね？　君が騎士であることの技術によってかね、それとも、竪琴弾きであることの技術によってかね？」。こう君にたずねるとしたら、君はぼくに、どう答えるだろうか？

イオン　わたしが騎士であることの技術によって――すくなくともわたしは、こう答えるでしょう。

ソクラテス　それでは、もし君が、さらに、竪琴をうまく弾いている人をも識別するとすれば、君が竪琴弾きであることの技術によって識別しているのであって、君が騎士であることの技術によってではない、ということに、君は同意するだろう。

イオン　ええ。

541

ソクラテス　さて君は、兵事にかかわることがらを識っているわけだが、それは、君が将軍であることの技術によって識っているのか、それとも、君がすぐれた吟誦詩人であることによってなのか、どちらだろうか。

イオン　すくなくともわたしには、そこにいかなる違いがあるとも思われません。

ソクラテス　どうしてなのかね？　なんの違いもないと君は言うのかね？　吟誦詩人の技術と将軍の技術とは、

一つのものだと君は言うのかね？　それとも二つのものだと言うのかね？

イオン　すくなくともわたしには、一つであると思われます。

ソクラテス　すると、すぐれた吟誦詩人なら誰でも、またまさに、ちょうどすぐれた将軍でもあるというわけかね？

イオン　この上なくそうです、ソクラテス。

ソクラテス　するとまた、たまたまちょうどすぐれた将軍であるような人は誰でも、吟誦詩人としてもまたすぐれている、ということになる。

イオン　それは、こんどは、そうだとわたしには思われません。

B

ソクラテス　しかし先の場合は、君にはそうだと思われるのだね、つまり、すぐれた吟誦詩人であるほどの者は誰でも、また将軍としてもすぐれている、とね？

イオン　そうですとも。

ソクラテス　君はギリシア人の中でも、もっともすぐれた吟誦詩人ではないのか？

イオン　それはもう大いに、ソクラテス。

ソクラテス　とするとまた、イオンよ、君はギリシア人の中で、もっともすぐれた将軍でもあるわけなのか？

イオン　そうですとも、ソクラテス。しかもそれは、ホメロスから学んでのことなのです。

一二

C

ソクラテス　ではいったい、神々に誓って、イオンよ、どうして君は、将軍としても吟誦詩人としても、その両面において、ギリシア人の中でもっともすぐれた人物でありながら、一方吟誦詩人としては、ギリシア人の方方をめぐり歩いてその仕事をしているのに、他方将軍としての仕事の方はやっていないのかね？　いやそれとも、君の考えだと、黄金の冠をいただいている吟誦詩人の方は、ギリシア人のために大いに必要であるが、他方将軍の方は、一向必要ではないと思われる、というわけかね？

イオン　そうです、なぜならソクラテス、一方わたしたちエペソスの国は、あなた方アテナイ人の支配をうけており、あなた方将軍の指揮下にあり、一向に将軍を必要とはしておりません。(1)他方あなた方の国やラケダイモンの人びとが、まさかわたしを、将軍に選んだりすることもないでしょう。あなた方は、自分たちだけで、充分やってゆけると思っていられるのですから。

ソクラテス　これは、すぐれた人イオンよ、君ともあろう人が、キュジコスの人アポロドロス(2)を知らないのかね？

イオン　どういう人です？　それは。(3)

D

ソクラテス　アテナイの人びとが、彼が外人であるというのに、しばしば自分たちの将軍に選んでいる人物だ。また君は、アンドロス島の人パノステネス(4)やクラゾメナイの人ヘラクレイデス(5)を、知らないのかね。彼らは外人でありながら、語るに足る人物であることを明らかにしたので、このアテナイの国が、将軍の職にも、その他さ

まざまな公職にもつけている人物たちだ。だから、エペソスの人イオンにしても、もし彼が、語るに足る人物であると思われさえすれば、アテナイの国は、将軍に選び名誉をもって遇することを、しないでおくことがあろうか。さらに、この点はどうだね。君たちエペソスの人びとは、もとはといえば、アテナイの人びとではないのか。[7] E またエペソスの国は、いかなる国にも劣らぬ国ではないのか。しかし、それはそれとして、話をもとへ戻せば、イオンよ、君は、技術と知識をもってホメロスを吟誦することができると語るとき、もし君が、それで真実を語

(注の「人物たちだ」の位置に (6) あり)

1 補注(I)D(一五八ページ)参照。

2 アポロドロスについては、この箇所以外、詳しいことはわからない。アエリアノス(三世紀前半)の『故事百般』(Varia Historia)第一四巻(五)にも、「アテナイ人は、キュジコスの人アポロドロスを、外国の人ではあるが、しばしば将軍に選んだ。また、クラゾメナイの人ヘラクレイデスをも。」と書かれているが、おそらくは本篇のこの箇所によっているのではないかと思われる。なおキュジコスは、プロポンティス(マルマラ海)の南部に位置する、アルクトネソスの島に建てられたミレトス植民都市。

3 補注(I)C(一五八ページ)参照。

4 補注(I)E(一五九ページ)参照。なおアンドロス島は、エーゲ海のキュクラデス諸島の一つ。

5 ヘラクレイデスについては、この箇所、および541C注2にふれたアエリアノスの言葉のほか、詳しくはわからないが、ただアリストテレスの『アテナイ人の国制』(四一の三)にもふれられている。それによって推定すると、おそくとも前三九三年には、(おそらくは前四世紀初頭には、)アテナイ市民権をあたえられて、要職についたものと推測される。詳しくは補注(I)F(一六〇ページ)参照。なおクラゾメナイは、小アジア沿岸のイオニア都市の一つ。キオス島に向かって突出した、大陸とつづいている小半島の、スミュルナ湾の南海岸に位置している。哲学者アナクサゴラスの出生地。

6 補注(I)G(一六〇ページ)参照。

7 ヘロドトス『歴史』第一巻(一四七)に、イオニア人が、アテナイの血筋をひいていることが語られている。またトゥキュディデス『歴史』第一巻(二)にも、ヘラスの各地からアテナイを頼ってきた住民たちで、アテナイの人口が増え、「その結果、アテナイ人たちは、アッティカの土地だけでは不充分となり、イオニアにも移民を派遣した」とある。

っているとするならば、君はぺてんを行っているわけだ。なぜならその君は、ホメロスについて、たくさんの見事なことがらを知っている様子をぼくによそおい、その証しを見せようと約束しておきながら、ぼくを欺き、証しを見せるどころではないのだからね。だって君は、君がそれについてすぐれた目ききであるということがらが、そもそもどのようなものであるのかさえも、さきほどからぼくがしつこくたのんでいるのに、語る気になってはくれないのだからね。それどころか、それこそあのプロテウス(1)さながらに、あちらこちらへと身をかわしながら、ありとあらゆる姿になり、最後にはとうとう、ホメロスにかんする知恵では目ききであるという証しを示さずにすむように、ぼくの目をのがれ、将軍の姿となって、現われたのだからね。だから、もし君が、たった今ぼくが言ったように、ホメロスについて、技術を心得ている証しを見せる様子をよそおっておきながら、ぼくを騙しているのだとすると、君はぺてんを行っているわけだ。だがもし君が、技術を心得ず、むしろ、ぼくが君について語ったように(2)、神の特別の恩恵のおかげで、ホメロスによって神がかりにされ、なに一つ知識はもっていないのに、その詩人について多くの美しいことがらを語っているというのであれば、君はべつにぺてんを行っていることにはならないのだ。だから、さあ選びたまえ、われわれからぺてん師と思われるか、それとも、神につかれた男と思われるか、そのどちらを欲するかをね。

542

イオン　ずいぶんの違いですね、ソクラテス。だって、神につかれた男と思われる方が、はるかに美しいことですから。

B

ソクラテス　それでは、そのより美しい方を、われわれの認定において、君にみとめることにする、イオン、君がホメロスについて、神につかれた吟誦詩人であっても、技術を心得た吟誦詩人ではない、という方をね。

1 『オデュッセイア』第四巻三八四―三八五行に、プロテウスは、「あやまつことのない海の老人、不死の神」とされている。同書同巻四五五行以下において、獅子、龍、豹、猪、水、木などに、つぎつぎ姿をかえることが語られている。ここでは、この変身の比喩が使われている。

2 536B〜D参照。

『イオン』補注

(I) **A** 吟誦詩人について(530A～B)

吟誦詩人(ラープソードス)という言葉の由来については諸説がある。古注によれば、吟誦詩人が、吟誦のさい、手に持っている月桂樹の杖(ラブドス)に結びつけられた呼名であるともいう。しかしまた、ピンダロス(Pindaros)の『ネメア勝歌』第二巻(一—三)に、「織りなされたひとつづきの詩句(ラープトーン、エペエオーン)をうたう人たちは、しばしばその序詩をゼウスからはじめる」と語られているが、これらの単語の結合に、ラープソードスの由来を見る説もある。

また、本篇のはじめにふれられているように、パンアテナイアの大祭などに、これら吟誦詩人をしてホメロスの吟誦を行わしめるアテナイの風習は、ディオゲネス・ラエルティオス(Diog. L. I. 57)によると、ソロンがその制度を制定したとされている。そのさい、二番目に登場する吟誦詩人は、一番目の詩人の終ったところからはじめる習わしであったという。しかしまた、プラトンの『ヒッパルコス』(228B)には、ホメロスをアッティカの地に紹介し、吟誦詩人をしてパンアテナイアの大祭においてうたわしめた人は、ペイシストラトスの子供たちの中で、もっとも年長で賢明であったヒッパルコスであったとも語られている。

B 詩人は神にとりつかれてうたうことについて(533C～535A)

ここに語られている、いわば詩人狂気説とも言える考え方は、詩人にかんする昔からの見方であったと言うことができるであろう。たとえばホメロスやヘシオドスも、その作品の第一行は、詩人みずからが物語る、というより、ムゥサの女神が語りはじめてくれるように、ムゥサへの呼びかけではじめている。本篇(533C)にも名前の出る詩人ペミオスが、『オデュッセイア』(第二二巻三四七—三四八行)で、「わたしは自分で自分を教えてきたのだ。つまり神々がわたしの心に、ありとあらゆる歌を植えつけてくれたのだ」と語っているのも、同じ狂気説の言葉と見ることができるであろう。そのほか、たとえばデモクリトスにもこの考えのあったことを伝えて、キケロは語っている。「デモクリトスは、いかなる偉大なる詩人も、狂気なしには存在しえないと語っている。そして、それと同じことを、プラトンも語っている」(『予言について』第一巻(三八の八〇))と。あるいはまた、「わたしはしばしば、いかにすぐれた詩人といえども、魂の燃焼と或る種の狂気の息吹なしには存在しえないと聞いている。そしてこのことは、デモクリトスやプラトンによって書かれたものの中に、残されているとつたえられている」(『弁論家について』第二巻(四

六の一九四)と。デモクリトス自身の断片にも、「詩人が、霊感と聖なる息吹にかられて書いたものは、何であろうと、間違いなく美しい」(Fr. 18(DK))というような言葉が残されている。この説は、プラトンにおいても、本篇のみならず、たとえば『パイドロス』においても語られている。「われわれの身に起こる数々の善きものの中でも、その最も偉大なるものは、狂気を通じて生まれてくるのである。むろんその狂気とは、神から授かって与えられる狂気でなければならないけれども」(244A)。「もしひとが、技巧だけで立派な詩人になれるものと信じて、ムゥサの神々の授ける狂気にあずかることなしに、詩作の門に至るならば、その人は、自分が不完全な詩人に終わるばかりでなく、正気のなせる彼の詩も、狂気の人々の詩の前には、光をうしなって消え去ってしまうのだ」(245A)。

C 「君ともあろう人が、キュジコスの人アポロドロスを知らないのかね?」「どういう人です? それは」について(541C～D)

541Cの「どういう人です? それは」(ποῖον τοῦτον;)というイオンの問い方は、多少の軽蔑的な調子のふくまれている言葉であるという解釈がある。そしてアテナイオスが、プラトンの悪意の例として『イオン』を持ち出しているのは、おそらくは、このイオンの問い方に発したものであろうともいう。すなわちアテナイオスは、「プラトンがあらゆる人たちにたいして好意をよせていなかったということは、『イオン』という書名をつけられた対話篇からも明らかである。そこにおいて彼は、まず詩人たちのすべてを悪く言い、つぎには、民衆によってまつりあげられた人たち、アンドロス島のパノステネス、キュジコスの人アポロドロス、クラゾメナイの人ヘラクレイデスをも悪しざまに語っている」(『食通たち』第一一巻(506A))とのべている。しかしこれはアテナイオスの偏見であると言わなくてはならない。おそらくは、『イオン』において、詩人の本質であるその狂気性にたいして批判的であるプラトンの一面が拡大解釈され、「すべての詩人を悪く言う」というように語られたのであろう。これはもとよりプラトンの真意をよく理解したものではない。さらに、パノステネス、アポロドロス、ヘラクレイデスのことを悪く言っているというのも、『イオン』の本文そのものからは、理解にくるしむ偏見であると言わなくてはならないであろう。

D エペソスとアテナイの関係について(530A, 541C)

541Cにおいて、イオンは、「エペソスの国は、あなた方アテナイ人の支配をうけており、あなた方将軍の指揮下にある」と語っている。そしてその「支配をうけている」とか「将軍の指揮下にある」という動詞は、いずれも現在形(ἄρχεται, στρατηγεῖται)が使われている。このことは、エペソス、アテナイ間の友交関係の時期と、対話の行われている劇中年代の時期との重なることを暗示しているとも解釈できるから、もしその友交関係の時期についておよその推定がえられれば、それは、劇中年代を推定する一つの傍証ともなるであろう。

デモステネスは、『ピリッポス攻撃演説第三』(一二三)において、「アテナイは七三年の間ギリシアの指導者であった」と語っている。これは、前四七八年のデロス同盟から、前四〇五年のアイゴスポタモイの戦いまでの期間であると考えられる。しかしこの間にも、他のイオニアの植民地都市同様、時時の状勢に応じて、アテナイ、スパルタの両国にたいし、エペソスもまた、微妙な政策の変化を見せている。たとえば、大戦の第七年目の冬に、アテナイ側は、捕獲したペルシア大王(アルタクセルクセス)の使節アルタペルネスを、アテナイの使節と一緒に、まずエペソスへ送ったと語られているから(トゥキュディデス『歴史』第四巻(五〇))、その頃(前四二四年頃)は、アテナイ、エペソス内には友交関係が保たれていたものと考えられる。しかし、シケリア遠征以後(前四一五年以後)は、エペソスは主としてスパルタ側に近づき、前四一二年頃には、キオス、レスボス、ミレトスなどイオニア地方の列強と共に、デロス同盟からの離叛の動きを示している(前出書第八巻)。パウサニアスによると(第六巻「エリス」二(三の一五―一六))、前四〇五年のアイゴスポタモイの戦いにおけるアテナイ海軍敗戦のとき、エペソスの人は、アルテミスの神殿に、スパルタ将軍リュサンドロスの像のみか、他の無名に近いスパルタ人、エテオニクス、パラックスなどの像をも建立したという。しかしまたその後(前三九四年頃)状勢が変化し、クニドスの海戦においてアテナイ将軍コノンがスパルタ軍を破ると、エペソス人は、他のイオニア都市同様、コノン、およびその子ティモクラテスの像を神殿に建てたという。だがまた、さらに前三九一―前三九〇年頃には、再びスパルタに接近している。したがって、もしアテナイ、エペソス間に友交関係のあった時期をもとめれば、前四一五年以前か、それとも、前三九四年から前三九一年頃の間か、そのどちらかということになるであろう。(「解説」(二二六ページ)参照。)

E　パノステネスについて(541D)

パノステネスについて、クセノポンは(『ギリシヤ史』第一巻(五の一六―一九))、つぎのようにつたえている。すなわち、前四〇七年頃のノティウムにおける敗戦を知らされた本国のアテナイ人は、アルキビアデスを罷免すると共に、コノン、ディオメドン、レオンなど一〇名の将軍を選んだが、アルキビアデスがケルソネソスに逃亡したあと、コノンは二〇隻の舟をひきい、アンドロス島を発ってサモス島に向かった。そこで、「彼らアテナイ人は、コノンの代りとして、アンドロス島へ、四隻の舟と共にパノステネスを派遣した。パノステネスは、その航海の途中で、二隻のトゥリアイの舟に出逢い、彼らを捕獲した」(同、一八―一九)と。このクセノポンのつたえる出来事は、前四〇六年から四〇五年へかけての冬のことと見られるから、その頃にはアテナイの将軍になっていたものと思われる。なお一説に、アンドキデスが、その『秘儀について』(一四九)において「あなた方は、一方では、市民の乏しくなった理由で、テッタリアの人やアンドロス島の人を市民たらしめようと望みながら、他方では、すでに人

も認める市民たち、――現にすぐれた男たちであるにふさわしく、また望まれれば将来もそのようになりうる――そういう市民たちを殺すようなことをしてはならない」と語っているが、そこに語られている、アテナイ市民権をあたえられたアンドロス島の人びとの中に、今のパノステネスをも見る説がある。しかし、アンドキデスの『秘儀について』は、前三九九年頃のものとされるから、すでに前四〇六―四〇五年にパノステネスが将軍になっていたとすれば、このときにはすでに市民権もあたえられていることになるであろう。

F ヘラクレイデスについて(541D)

ヘラクレイデスについては、541C注2で引用されたアエリアノスの言葉のほかに、アリストテレスの『アテナイ人の国制』(四一の三)に、つぎのようなことがつたえられている。すなわち、「民会出席者に手当を出す案を、彼らは最初認めなかった。しかし人びとが民会に集まらず、プリュタネイスも、挙手採決のために、大勢が出席するようにいろいろと画策したため、まず初めに、アギュリオスが一オボロスの手当を供給、つぎに、クラゾメナイの人ヘラクレイデス、渾名を王(バシレウス)と呼ばれる人が、二オボロスを供給した。しかし再びアギュリオスが三オボロスにした」と。パウリイ、ビッソワアの『辞典』(Pauly-Wissowa, Realencyclopädie der classischen Altertums Wissenschaft. VIII_1 S 457–458)は、これにふれて、これは互に相手を倒すために手当をせりあげたのであると語り、また最後の三オボロスは、前三九二年の春の民会が行われたときに実施されているから、ヘラクレイデスの決定は、おそくとも前三九三年とするのがふさわしく、また、彼が市民権を認められたのは、おそらくさらに数年以前とするのがふさわしいとしている。前四世紀初頭のことと思われる。

G 「しばしば自分たちの将軍に選んでいる」、および「将軍の職にも、その他さまざまな公職にもつけている」について(541C～D)

541C(ᾕρηνται)が「現在完了形」であること(訳文では「……に選んでいる」とした)、および、541D(ἄγει)が「現在形」であること(訳文では「……公職にもつけている」とした)、このことは、そこに意味されている人物アポロドロス、パノステネス、ヘラクレイデスにかんするそのことがらが、この対話の行われている劇中の年代とほぼ重なる時期であることを語っている、とも考えられるであろう。劇中年代推定の一つの傍証と見られる。

H 引用されているホメロスの詩二つ(537A～Bの詩、および538Cの一行)と、クセノポン『饗宴』において、同じ詩の引用されていることとの関係について。

『イオン』とクセノポンの『饗宴』とは、つぎのような共通点をもっているところから、その先後関係をめぐってよく比較される。すなわち、

(一)(A) 『饗宴』第四巻(六)において、『イリアス』の詩句が

引用されているが、その詩句は、本篇『イオン』の537A～Bで引用されている詩句の前半(「……手綱をゆるめてやれ」まで)と完全に一致している。

(B)『饗宴』第四巻(七)にも、『イリアス』からの引用が一行だけ見られるが、その一行は、本篇538C3の一行(「酒の肴の玉葱をそえた」)と一致するものである。

㈡『饗宴』第三巻(六―七)における吟誦詩人の扱い方は、本篇での初めの部分の扱い方と類似し、しかもステシンブロトスという人物の名前までが、共通に語られている。

以上の類似点を仔細に見てみると、まず㈠の(A)については、本篇『イオン』における『イリアス』からの引用は、それがそこに引用されてしかるべき前後の脈絡をうかがうことができるが、クセノポンの場合には、その必然性が薄弱である。「アガメムノンの槍の腕前」がたたえられた直後の、無関係な引用は、いかにも唐突の印象をまぬがれない。さらにクセノポンでは、本篇における引用句の初めの部分三行にかぎられている。これらの事情は、クセノポンが、本篇での引用句をもとにして、それからさらに引用したのではないかとの疑問をいだかせる。

つぎに、㈠の(B)の類似点を見てみるに、まず本篇538Cにおける『イリアス』からの二行の引用は、一見、一連の同一箇所からの引用のように思われるが、じつは二つの異った出典箇所からのものである。つまり「……すりくだいた」までは、『イリアス』第一一巻六三八―六四〇行の引用であるが、最後の「酒の……」という一行は、同書第一一巻六三〇行の引用であって、そのつながり方が自然なものであるため、ホメロス原文との照合を怠ると、その全部が同一箇所からの引用と誤解しかねない。これにたいし、クセノポンの第四巻(七)における引用は、本篇引用の後半「酒の……」の一行のみである。この事情は、ちょうど(A)の引用が、本篇引用の前半のみと重なっていたように、ここでも、その最後の一行のみを、しかもそれがたまたま別の出典箇所のものでもあったところから、借用してきたという印象をあたえる。その引用が、(A)の引用のすぐあとに並んでいることも、本篇での順序と一致するものがある。

つぎに㈡の部分を考えてみると、クセノポンで語られている吟誦詩人への批判は、彼らはホメロスの句を全部記憶してはいるが、それの理解という点から見れば、高く評価するにはあたらないという主旨である。この批判の主旨は、本篇でのそれと同じである。しかしその議論のすすめ方は、いかにも手軽な調子で、本篇の執拗な追求とくらべるべくもない。これらの事情は、密度の濃い本篇が先に存在していて、クセノポンはそれを意識しながら、後でつくったのではないかと推測させる。またそれとは別に、たまたまクセノポンで、吟誦詩人を批判する人がアンティステネスであるところから、クセノポンもプラトンも、共にアンティステネスのホメロスにかんする書物(その目録は、Diog. L. VI. 15-18 においてつたえられている)を意識していたのではないかという見方もあるが、それはクセノポンには推定できても、プラトンに妥当する推測とは思われない。

以上、㈠の(A)(B)及び㈡の類似点の考察をもとにして、もし両作品の先後関係を推定するとすれば、クセノポンの方が、本篇を意識しながら、それら類似する部分を書いたのではないかと思われる。

(II)(もともと本文注に属するものであるが、版組の関係上ここに一括した。)

1 タミュラス(533C)
伝説的なトラキアの竪琴の名手。『イリアス』第二巻五九五—六〇〇行において、ゼウスの娘であるムゥサの女神たちと競っても負けぬと豪語したため、片輪にされ、竪琴の技術も忘れさせられた、と語られている。『国家』X.620Aのエルの話では、タミュラスの魂は、夜啼鶯に生まれかわったと語られている。ホメロスの先の箇所では、「タミュリス」となっている。

2 オルペウス(533C)
タミュラス同様、トラキアの伝説的な竪琴の名手。その技術の素晴らしさについては、岩、木、野獣をもそれに従わせたとか、冥界の神々をもなびかせたとか、たくさんの伝説がつたえられている。

3 吟誦詩人ペミオス(533C)
『オデュッセイア』第一巻一五四行や、第二二巻三三〇—三三一行で、求婚者たちのために、心なくも竪琴を鳴らし、歌をうたう吟誦詩人として語られている。

4 河から蜜や乳を汲みあげる(534A)
エウリピデス『バッコスの信女』(七〇六—七一一行)にも、信徒の一人が大地に杖を立てると、泉となって酒が湧き、また指先で大地をかくと乳が、また常春藤(きずた)の枝からは蜜が出る、と語られている。

5 彼らみずからが語っているそのとおりのことを行っている(534A)
或いはまた、「彼らみずからが語っているように、以上のことを行っている」ともとれる。

6 蜜蜂さながらに(534B)
アリストパネス『鳥』(七四八—七五一行)に、蜜蜂のように詩句の蜜をあさるというような言葉が見られる。

7 ムゥサの女神たちの……われわれのもとにはこんでくるのだ(543B)
ピンダロス『オリュンピア勝歌』第九巻(二六—二七行)に、「カリテス(優美の女神)の選ばれたる園を耕す」というような言葉が、また同じく『ピュテイア勝歌』第六巻(一—二行)に、「アプロディテやカリテスの園を掘りかえす」というような言葉が見られる。

メネクセノス

——戦死者のための追悼演説——

津村寛二訳

登場人物

ソクラテス
メネクセノス

一

ソクラテス　広場からかね、メネクセノス、それともどこからきたのだね？

メネクセノス　広場からです、ソクラテス。審議院[1]からの帰りです。

ソクラテス　おや、いったいぜんたい、君は審議院に何のかかわりがあるというのだ？　いや、きっとこうなのだろう。君は、自分の教育と教養は完成したと考え、これでもう充分の準備ができたからというわけで、もっと大きな仕事にむかおうと思っているのだろう。そして君は、なんと感心なことに、その年かっこうで年長のわれわれを支配しようともくろんでいるのだ、君たちの家からいつも誰かがわれわれの監督者として出ているのを、中断することのないようにね。

メネクセノス　もしあなたが、ソクラテス、官職につくことを許してくださり、すすめてもくださるなら、私もやってみる気になるでしょう。でも、そうでなければ、私もそんなつもりはありません。それはともかく、私が今審議院に行ってきたのは、審議会が戦死者のための追悼演説者を選ぼうとしていると聞いたからです。審議会が葬儀を主催する手はずになっていることはご存知でしょう。

ソクラテス　知っているよ。それで、誰を選んだのだね？

メネクセノス　誰も選ばず、決定を明日に延期しました。しかし、私の思うところでは、アルキノス[2]かディオン[3]が選ばれることでしょう。

二

C

ソクラテス それにしても、メネクセノスよ、戦争で死ぬということは、いろいろな点でほんとうに結構なことであるようだね。というのは、たとえ貧乏人であっても、戦死すれば、立派で盛大な葬式をしてもらえるし、またたとえとるにたらぬ人物であっても、賢い人々の賛辞を獲得するのだから。それもその場の思いつきでほめるのではなく、長い時間をかけて演説の準備をした上でほめてくれるのだからね。

235

彼らの賞賛の仕方ときたらそれはもう見事なもので、それぞれの戦死者について、真に当人の手柄であることもそうでないことも引き合いに出し、それを言葉をつくしてこの上もなく美しく飾りたて、もってわれわれの魂を魔術のように魅了するのである。そして彼らは、ありとあらゆるやりかたでこの国をたたえ、戦争で死んだ人をたたえ、われわれに先立つすべての祖先をたたえ、その上まだ生きているわれわれ自身をもたたえるものだから、その結果このぼくなどは、ねえ、メネクセノスよ、彼らにほめられてなんだか自分がすっかり偉くなったような気になって、そしてその度ごとに、聞きほれ、魅惑されながら立ちつくすのだ(4)、その場で急にもっと背が高

B

くなり、もっと高貴で美しくなったように思ってね。

1 審議会の議事堂。審議会は五〇〇人の議員よりなり、民会(市民総会)の予備審議にあたるほか、行政や司法の面でも重要な役割を持っていた。

2 アテナイの将軍。ペロポネソス戦争後の寡頭派と民主派の対立の際、民主派に属す。

3 伝不詳。

4 T、W写本に従う。

(235)

それにたいていの場合、いつもぼくには何人か他の国の人がついてきていて、一緒に演説を聞いているのだが、その人たちに対しても、ぼくはにわかに一段と威厳のそなわったような気になるのだ。というのは実際彼らの方でも、ぼくや他の市民みんなに対して、同じこと感じているように思われるからだよ。彼らは演説者に説きふせられて、この国を以前思っていたより、ずっとすばらしい国だと考えるらしいのだ。

C そしてこの威厳に満ちた気持は、ぼくには三日以上もつづく。それほどまでに演説者の言葉と声は、耳深くしみこんで鳴りつづけるものだから、ぼくは四日めか五日めになってやっとわれにかえり、自分が大地のどこにいるのか気がつくありさまで、それまでは、まるで浄福者の島に住んででもいるかのような気になっているのだよ。われわれの演説者たちの腕前は、それほどたいしたものなのだ。

三

メネクセノス あなたときたら、ソクラテス、機会あるごとに弁論家をからかうのですね。しかし、今度の場合、選ばれた人はそうやすやすとやってのけるわけにはいかないだろうと、私は思います。というのは、なにしろまったく急に選考が行なわれることになったので、おそらく演説者はいわば即席で演説することを強いられるような具合になるでしょうから。

D **ソクラテス** どうしてだね、お人よしさん？ 彼ら弁論家は、誰でも準備ずみの演説をいくつか持っているのだよ。それにまた、少なくとも追悼演説のような内容のものなら、即席でしゃべることだって難しくはないのだ。というのはね、もしかりにペロポンネソス人の中でアテナイ人をほめたり、アテナイ人の中でペロポネソス人を

ほめたりしなければならぬとすれば、聴衆を説得して好評を博するには、すぐれた弁論家が必要だろう。しかし、もし誰かが、まさに彼のほめあげている当の人々の中で、評判を争うのであれば、立派な演説をするという評判をとることも別に難かしいことではない。

メネクセノス　あなたは難かしいことだとは思わないのですか、ソクラテス。

ソクラテス　思わないね、ゼウスに誓って。

メネクセノス　するとあなたは本当に、ご自分でも演説ができると考えておられるのですね、もしそういうことが必要になり、審議会があなたを選んだとしたら。

E

ソクラテス　そうだよ。それにこのぼくの場合にはね、メネクセノス、演説ができて何のふしぎもないのだよ。というのは、ぼくにはたまたま弁論術にかけては凡庸ならぬ女の先生がいるからね。いや凡庸ならぬどころか、彼女こそは、多くの、そしてすぐれた弁論家を育て、なかんずく一人の、ギリシア人の間でぬきんでた弁論家、クサンティッポスの子ペリクレス(1)を育てたのだ。

メネクセノス　誰ですか、その女の先生は？　いや、もちろん、アスパシア(2)のことを言っておられるのでしょうね？

ソクラテス　そう、彼女のことを言っているのだよ。メトロビオスの子コンノス(3)も加えておこう。というのは、

1　アテナイの傑出した政治家(前四九五―四二九年)アテナイの黄金時代とペロポネソス戦争前半の時期を指導した。

2　ミレトスの女で、遊女としてアテナイに来、ペリクレスに愛されて同棲した。美貌と才知で有名であった。

3　プラトン『エウテュデモス』272Cでも「私の竪琴の教師」といわれている。

この二人の人たちがぼくの先生なのだから。コンノスは音楽の、アスパシアは弁論術のね。だからして、こういう先生に教えられた人間が、弁論にたけていても何らおどろくにはあたらないよ。しかし、音楽をランプロス(1)から習い、弁論術をラムヌウス区のアンティポン(2)から習いして、ぼくより悪い教育をうけた者であっても、アテナイ人の中でアテナイ人をほめるのであれば、やはり好評を博することができるだろうよ。

四

メネクセノス では、もしあなたが演説をしなければならないとすれば、あなたはどんな話ができるのですか？

ソクラテス ぼく自身が自分の力でしゃべるとなれば、たぶん何ひとつ言えないだろう。しかし実は昨日も、アスパシアがほかならぬあの戦死者たちのための追悼演説をしまいまでやってみせたのを、ぼくは聞いていたのだよ。というのは、君の言っていること、つまりアテナイの人々が演説者を選ぼうとしているということを、彼女も耳にしたわけだね。そこで彼女は、どういうことを語ればいいか、ぼくにくわしく聞かせてくれたのだ。その一部は即席のものだったが、他の部分は彼女が以前に用意してあったものだった。それは、ぼくのみるところでは、ペリクレスが行なった追悼演説(3)を彼女が起草してやった時のことだと思う。彼女は、その演説に入らなかった残りのものをつなぎ合せて、話してくれたのだね。

メネクセノス ではそのアスパシアの語ったことを、あなたは思いだすこともできるのでしょうね？

ソクラテス もしぼくが悪い生徒でなければね。とにかくぼくは彼女からじかにおそわったのだし、それに、

B

C 忘れでもしたときには、鞭で打たれかねないありさまだったからね。

メネクセノス それならどうして話そうとしてくださらないのです?

ソクラテス しかしね、先生の演説を口外したりして、先生がぼくに腹を立てても困るからね。

メネクセノス そんなことを気にしないで、ソクラテス、さあ、話してください。それに、あなたが聞かせてやろうと思ってくださる演説が、アスパシアのものであっても、また他の誰のものであっても、とにかく聞かせてくださるなら、私はたいへんうれしいのです。さあ、他のことはさておき、とにかく話してください。

ソクラテス しかしたぶん君は、ぼくのことを笑うだろう、もし、ぼくが年寄りのくせにあい変らず子供じみた遊びをやっている、と君に思われたとしたら。

メネクセノス いいや、けっして笑ったりはしません、ソクラテス。ですから、どうあっても、話してください。

五

D **ソクラテス** いや、たしかにこの場は、君の望みどおりにしてあげるべきだね。かりにもし、君がぼくに着物

1 著名な音楽家。ソポクレスの師であるという。

2 著名な弁論家(前四八〇—四一一年)。トゥキュディデスによって当代一流の人物とたたえられている(『歴史』第八巻(六八))。この人々から習うことをソクラテスが「より悪い教育」と言っているのは、この人々をもてはやす風潮に対する皮肉であろう。

3 トゥキュディデス『歴史』第二巻(三四—四六)に伝えられる有名な演説。

をぬいで踊れと命じたとしても、まずはおそらく、ぼくは君の望みどおりにしてあげるだろうよ。なにしろここにいるのはぼくたち二人だけだからね。

さあ、聞きたまえ。もしぼくがまちがっていなければ、彼女はまず戦死者たち自身のことから話しはじめて、こんな風に語ったのだ。

行為のうえでは、われわれの葬儀によって、この人々はみずからにふさわしい敬意を表せられた。彼らはその敬意をわがものとして、公（おおやけ）には国家の、私（わたくし）には家族の見送りを受け、運命によって定められた死出の路へと旅立っていく。

E

しかし言葉のうえでは、追悼の演説によって、いまだ表し尽くされていない敬意をこの男子たちに表するよう、法は命じているのであり、またそれはわれわれの義務でもある。なぜなら、見事な行為がなし遂げられたとき、美しい言葉でそれが語られることによって、行為をなした人々に対する追憶と敬意が、言葉を聞く者の心に生まれるからである。それゆえ、今われわれが必要とするものは、何か次のような言葉である。それは、戦死した人人を存分にほめたたえるとともに、他方では、生き残った人々を心から励まして、息子たち兄弟たちにはこの人人の武勇(1)をまねよと勧め、父や母や、そしてもし、より年上の親族がまだ存命ならそれらの人々には、安らぎを与えるような、そういう言葉である。

237

では、われわれの場合、いったい何を語れば、そのような言葉となるのだろうか？　いや、それより、何から語りはじめれば、このすぐれた男子たち（すなわち、この世にあるときには、その徳によって彼らのはらからを

喜ばせ、みずからの死によっては、生き残った者の安寧(あんねい)をあがなったこの人々)を、正しくたたえることができるだろうか？

B 私には、こう思われる——自然の順序に従い、彼らがすぐれた人々となっていった道筋をたどりながら、彼らをたたえなければならないと。ところが彼らがすぐれた人々になったのは、すぐれた人々から生をうけたからに他ならない。それゆえわれわれは、まず第一に彼らの生まれの良さをたたえよう。ついで第二に、彼らが享受した養育と教育をたたえよう。そしてそのうえで、かずかずの偉業をなしとげたその行為を明らかにしよう、彼らがいかに美しく、またいかに生い立ちにふさわしく、その偉業をなしとげてみせたかを。

六

さて、この人々の生まれの良さは、そのそもそものはじめを祖先たちの生まれにおっている。祖先たちは移住民ではなかった。また、自分たちが他国から来ることによって、子孫のこの人々を居留民としてこの国に住まわせたのでもなかった。むしろ祖先の生まれは、この人々をこの土地から生まれた者、真実父なる国に住んで生きた者としたのであり、他の人々のようにまま母の国土によって養われるのではなく、自分たちがその中に住む母

C なる国土によって養われ、そして今、生を終っては、生み、育て、はぐくんでくれた国土のふるさとに眠る者と(2)

1 ギリシア語は「アレテー」。普通「徳」と訳されるが、本訳では「武勇」、時に「徳」と訳しわけた。

2 アテナイ人も元は北から移住した種族。だが前一一世紀頃のドーリス人南下によって大部分の地方で住民が移動したのに、アッティカはその侵入を防ぎ、住民が変らなかった。そのためにアテナイ人は土着の民と信じられた。

したのである。したがって、まずこの母なる国土そのものに敬意を表することが、何よりも正しいことである。なぜならそうすることによって、同時にこの人々の生まれの良さにも敬意を表することになるからである。

七

わが国土は、ひとりわれわれのみならず、万人によってたたえられるにあたいする。それにはさまざまの理由があるが、しかし第一にして最大の理由は、神々の愛でたもう国であるということにほかならない。わが国土を争った神々の紛争と裁定の物語(1)が、このわれわれの言葉を証明している。神々のほめたもうた国であるなら、その国がすべての人間によってほめられない道理がどこにあろうか？

D

そして第二番目に次のような称賛が、この国に寄せられて当然であろう。すなわち、大地全体が、野獣と家畜とを問わず、ありとあらゆる生きものを生み出し、送り出していたあの太古の時代、その時代にわれわれの国土は野獣を生むこともなく、野獣の棲息を許すこともなかったが、しかし生きもののうちから特に選び出して、人間を生んだのである。そしてこの人間こそ知力において他の生きものにぬきんでると共に、正義と神々を認める唯一の生きものなのである。

E

この国土がこの人々の、そしてわれわれの、祖先たちを生んだというこの言葉には、大いなる証しがある。なぜなら、すべて生むものは、生まれ出でるものにふさわしい養いの糧を有しているのであり、そのことによって女もまた、真に子を生んだ母であるか否かが明らかになるからである。すなわち、もし生まれたものへの養いの泉を持っていなければ、それはもらい子をした女なのである。われわれの母親であるこの国土が、人間を生み出

したということの充分な証拠としてさし出しているのも、まさにそのことにほかならない。なぜなら、あの時代にわが国土のみが、はじめて人間のための糧として、人間の種族をもっとも美しく、もっとも立派に養うことのできる小麦と大麦の収穫をもたらしたのであり、(2)このことによってわが国土は、真にみずからこの生きものを生んだのだということを示しているからである。ところでこのような証拠は、女よりも先に、むしろ大地にあてはまる証拠として受け入れるべきものである。なぜなら大地が女をまねてはらみ、生むのではなく、女が大地をまねて、そうするのだから。

B わが国土はこの穀物を、もの惜しみすることなく、他国の人々にもわかち与えた。またその後には、オリーブの樹を、労苦のねぎらいとして、子供たちのために育成させてやった。そして子供たちを成人するまで養い育てた上で、彼らの統治者として、また彼らの教師として、神々を招き入れた。その神々の名は、このような葬儀の場では言わぬ方がよい――言わずとも、われわれはすでに承知しているのであるから――だがその神々が、はじめてわれわれに、日々の暮しをいとなむための技術を授け、また国土を守るための武器の所有と使用を教えて、われわれの生活をととのえてくれたのである。

1 アテナとポセイドンがアテナイの守護神の地位を争ったとき、ポセイドンは岩から泉をふき出させたが、アテナは大地からオリーブをはやし、アテナに軍配があがったという。

2 麦の栽培は大地の女神デメテルによってアッティカの地にはじめてもたらされたという。

八

C　この人々の祖先は、このようにして生まれ、このような教育をうけて育ち、そして国制をととのえて居住したのであるが、その国制について、ここで手短に触れておくことがよいであろう。なぜなら国制は人間の養育者であり、立派な国制は善き人々をはぐくむが、劣った国制は悪しき人々をはぐくむからである。それゆえ、われわれの祖先たちが立派な国制のもとではぐくまれたということを、そしてまさにその国制によって、かの人々も、またこの戦死者たちを含む今日の人々も、ともにすぐれた人々であるのだということを、ぜひとも明らかにしておかねばならない。なぜなら同じひとつの国制、すなわち《もっともすぐれた者の支配》が、当時もあったし、また今日もあるからであり、われわれは、現在のみならず、あの当時から今日にいたるまでほとんどつねに、その国制のもとで市民としての生活をいとなんできたからである。

D　さて、ある者はこの国制を民主制とよび、ある者は別の気に入った名でよぶ。しかし、真実には、それは民衆の賛同に裏づけられた《もっともすぐれた者の支配》なのである。われわれにはつねに王たち(1)がいる。彼らは時には家柄によって、時には選挙によって、任につく。しかし国家の実権をにぎる者はほとんどの場合民衆であり、民衆が、その時々において最良と思われた者に、官職と権力を与えるのである。そしてその際、他国におけるがごとく、虚弱、貧乏、父親の無名といった理由で拒まれた者は誰ひとりとしてなく、またその反対の理由で尊ばれた者も誰ひとりとしていない。規準となるのはこのひとつのことだけである。すなわち、賢者であるか、あるいはすぐれている、と思われた者が官職につき、統治するのである。

E わが国におけるこのような国制の源は、生まれの平等ということにある。実際他の諸国家は、あらゆる素性の、平等ならざる人間からなり、その結果彼らの国制もまた平等ならざる制度、すなわち独裁制と寡頭制となる。そしてそこでは少数の者とそれ以外の者とが、互いに相手を奴隷であり、主人であると認めつつ暮らしているのである。

239 だがわれわれとわれわれの同胞は、皆がひとりの母から生まれた兄弟であるがゆえに、お互いの奴隷であったり、主人であったりすることを当然であるとは考えない。むしろ自然における生まれの平等は、われわれをして法における権利の平等を求めさせ、徳と思慮に由来する名声のほかには、何ものによっても互いに他に服することのないようにさせているのである。

九

このようにして、この人々の父も、われわれの父も、そしてこの人々自身も、完全な自由のうちに育てられ、また、すぐれた生まれを享(う)けていたために、私人としても公人としても実に多くの見事な功業を、万人の前になしとげて見せた。彼らはこの自由のためには、ギリシア人を守ってギリシア人と戦い、全ギリシア人を守って

B 夷(い)狄(てき)(2)と戦うことが、自分たちの義務であると考えたのである。

---

1 王はアテナイの最高官(アルコーン)の一人で祭祀を司る。しかしここでは王によってアルコーン全体(九人)が代表されている。

2 ギリシア語は「バルバロイ」。ギリシア人以外の異民族をさす。

かくてエウポルモスやアマゾンたち、(1)またよりいにしえの敵たちが、この地に軍を進めたときに、彼らがいかにしてこれを退けたか、そしてアルゴス人を援けてカドモスの族と、(2)ヘラクレスの後裔を援けてアルゴス人と、(3)彼らがいかに戦ったか、その次第をそれにふさわしい仕方で物語るには、与えられた時間は短すぎる。そしてまた彼らの武勇は、すでに詩人たちが調べにのせて美しくたたえつつ、あまねく知らしめてもいるのである。(4)したがって今われわれが、同じ武勇を散文の言葉でたたえようと試みるなら、おそらくは詩人たちにおくれをとるであろう。それゆえ、それらのことには触れないでおくのがよいと思われる――みずからにふさわしい賛辞を、それらはすでに得ているのであるから。(5)

C　しかしいまだひとりの詩人も、それにふさわしい詩をつくることによってふさわしい名声をあげていないような功業、そして今なお手つかずのままになっている功業、(6)それらの功業に関しては、私はここで言及しなければならないと考える。そして私自身がそれらをほめたたえるとともに、また他の人々にも切に求めて、それらを行為の主にふさわしく、歌やその他の詩にうたうようにとすすめなければならない。

D　私のいわんとする功業の第一のものは次のことである。すなわち、ペルシア人がアジアを征覇し、ヨーロッパを隷属せしめんとしたとき、彼らを阻んだのはほかならぬこの国土の子どもたち、すなわちわれわれの祖先たちであった。その人々に思いをいたし、彼らの武勇をたたえることは、まことに正当なことであり、また第一になさねばならぬことなのである。

さて、もし誰かがこれを立派にたたえようとするなら、言葉によってあの時代に身をおいて、その武勇を見つめなければならない。当時アジア全土はすでに三代目のペルシア大王に服従していたのである。それらの大王の

E うち、初代の王キュロスは、ペルシア人を解放したのち、みずからのもくろみに従って、自分の同胞と、かつての主人メディア人を、あわせて同時に奴隷とし、残りのアジアをエジプトにいたるまで支配した。[7] 次いでその息子[8]は、エジプトとリュビアを、進むことができるかぎりのところまで支配した。そして第三代の王ダレイオス[9]は、陸路によっては、帝国の境界をスキュティアまでひろげ、船によっては海と島々を制圧し、その結果、彼の覇権に挑戦しようとする者は誰ひとりとしてなく、万人の心が奴隷根性におおわれてしまった。実にかくも多くの強大で好戦的な民族を、ペルシア帝国は屈従せしめていたのである。

240

1 伝説のトラキア王。アテナイがエレウシスと争ったとき、エレウシスを援けてアテナイと戦ったが、アテナイ王エレクテウスに打ち負かされたという。

2 伝説の女ばかりの勇敢な部族。ギリシア人がアマゾンを攻撃した仕返しに、アテナイ王テセウスの時代にアッティカに侵入したという。

3 テセウスはアルゴス王アドラトスの求めに応じてカドモスの子孫の町テバイを攻め、野ざらしにされていたアルゴス軍の死者を収容したという。

4 ヘラクレスの子供たちがアテナイに逃れてきたとき、これを追ってきたアルゴス王エウリュステウスはテセウスに打ち破られ、捕えられたという。

5 これらの伝説は叙事詩によって伝えられ、また抒情詩や悲劇にもうたわれていた。

6 T、W写本に従う。

7 キュロスは在位前五五九―五二九年。ペルシア人はペルシア湾東岸に小王国を形成し、いくつかの部族にわかれて農耕、牧畜をいとなんでいたが、エクバタナに都をおくメディア人に臣従していた。キュロスはメディア王アステュアゲスの娘とペルシア人の間に生まれた子で、ペルシア人を率いてメディアの支配を覆えした。

8 カンビュセス二世。在位前五三〇―五二二年。

9 在位前五二一―四八六年。以上のペルシア王の事蹟についてはヘロドトス『歴史』第一―四巻参照。

一〇

さてダレイオスはわれわれとエレトリア人を、サルディスに対して陰謀をたくらんだとの口実で非難し[1]、商船と軍船にのせた五〇万の兵と、三〇〇の軍船を、ダティスを指揮官に任じて送りだし、彼に命じて言った、もし自分の首を保ちたいと思うなら、エレトリア人とアテナイ人をつれ帰れと。

B そこでダティスはエレトリアへと、当時のギリシア人の中でも戦さごとにかけてはもっとも名高く、数もすくなくはなかった人々に向かって船を進め、それらの人々を三日で征服し、そしてひとりとして逃れ得ぬよう、エレトリア人の全国土を次のような方法でくまなく探索した。すなわち、ダティスの兵たちはエレトリアの国境に達したのち、海から海までの間に立ちならび、手をつないで全国土を通りぬけたのである――大王に復命して、誰ひとり自分たちの手から逃れはしなかったと言えるように。そして彼らは、同じもくろみをもって、エレトリアからマラトンに上陸した[2]。アテナイ人もエレトリア人と同様に、同じ拘束のくびきにかけて連れていくのは、自分たちには雑作もないと考えたのである。

C それらのもくろみの、あるものはすでに実行され、あるものは着手されつつあったときに、ギリシア人の誰ひとりとしてエレトリア人を援ける者なく、またアテナイ人を援ける者も、スパルタ人のほかには誰ひとりとしてなかった――そのスパルタ人も戦いの翌日に到着したのだ[3]――他のギリシア人はすべて恐怖に打ちのめされて、当面の安泰を喜んで、なりをひそめていたのである。

D かくて当時のこの情況に身をおくならば、誰しも知るであろう、マラトンの野に夷狄の軍勢を迎え撃ち、アジ

ア全体の驕慢をこらしめ、夷狄に対する戦勝の記念碑を初めてうちたてた人々、他のギリシア人の先達となり、ペルシアの軍勢といえども無敵ではありえず、むしろいかなる大軍も、いかなる富も、武勇の前には屈することを教えた人々、その人々が武勇においてそもそもどのような人々であったかということを。

E

したがって私はこう主張する――かの男子たちは、われわれの肉体の父であるばかりでなく、われわれの、そしてこの大陸に住む者すべての、自由の父であると。なぜならギリシア人は、あの偉業を手本に、マラトンの戦士たちの弟子となり、その後の戦いにおいてもギリシアの安寧のためにあえて危険をかえりみなかったからである。

一一

241

かくてこの演説は、第一等の賞を、あの人々に捧げねばならぬが、しかし第二の賞は、これをサラミスとアルテミシオンの沖で海戦を交え、勝利をかちとった人々に捧げなければならない(4)。実際、この人々の場合にも、彼らが陸と海にわたってどれほど恐しい攻撃に耐えぬいたか、そしてそれをいかにして退けたか、それらについて人は数多くのことを語ることができるであろう。しかしここでは、それらの功

1 アテナイとエレトリアはイオニアのギリシア人都市ミレトスを援けて実際に派兵し、小アジアのサルディスを焼いている(ヘロドトス『歴史』第五巻(九七―一〇三))。
2 前四九〇年夏。
3 スパルタは彼らの掟に従って満月の日まで出征を待ったのである。
4 前四八〇年、ペルシアは大軍をもって再度来寇、陸ではテルモピュライの戦い、海ではアルテミシオン岬の戦いを経てアッティカに侵入、アテナイを占領したが、アテナイ対岸のサラミス島の海戦で大敗、ペルシア王クセルクセスは帰国し、残留ペルシア軍も北方に撤退した。

業のなかでももっとも見事だと思われること、そのことについて私は話そう。それはすなわち、彼らがマラトンの戦士たちのあとを継ぐ仕事をなしとげたということである。

B

なぜなら、マラトンの戦士たちがギリシア人に明らかにしてみせたのは、陸においては少数をもって夷狄の多数をよく防禦しうるという、そのことだけであって、海戦においては、ことはなお不明であり、そしてペルシア人は、海にあってはその数と富と技術と力によって無敵であるとの評を得ていたからである。それゆえ、あのとき海戦を戦った人々のこの業績、すなわち、ギリシア人から第二の恐怖をとりのぞき、船と人の数を恐れることをやめさせたということは、まことに賞賛に価するのである。

C

事実この結果、これら双方の人々、すなわちマラトンで戦った人々とサラミスの海で戦った人々によって、その他のギリシア人は教育されることになったのであり、一方では陸の戦士から、他方では海の戦士から、夷狄恐るるにたらずということを学び、かつその考えに慣れたのである。

三

次に私は、プラタイアの功業(1)をとりあげよう。それはギリシアの安全を守った偉業の中で、順位においても、また武勇の点でも、第三番目のものであり、そしてこれはもはやスパルタ人とアテナイ人に共通の功業であった。たしかに彼らは最大にしてもっとも困難な難局を、一致協力して退けたのであり、その武勇のゆえに今日われわれによってたたえられるとともに、今後も後世の人々によってたたえられるであろう。

D

しかしその後も、一方ではギリシア人の多くの国が依然として夷狄の側にくみし、他方ではペルシア大王その

人もふたたびギリシアに侵攻せんと意図していると伝えられていた。それゆえわれわれは、海からすべての夷狄の軍を掃討駆逐し、ギリシアの安寧を達成することによって先人たちの仕事を完成させた人々にも、当然言及しなければならない。それはエウリュメドンの河口で海戦を戦った人々、キュプロスに遠征した人々、エジプトをはじめその他多くの地方に船を進めた人々であり、(2) われわれは彼らのことを心にとどめ、感謝の念を寄せるべきである。なぜなら、彼らはペルシア大王を恐怖におとし入れ、ギリシア人の滅亡をたくらむことよりも、自分の安全をはかることに思いを向けさせたからである。E

一三

242 かくてこの戦いは、まことに国家の総力をかたむけて、自分たち自身と、そして他の同じ言葉を話す人々とのために、夷狄に抗して最後まで戦いぬかれたのであるが、しかし平和が訪れ、わが国の名声が高まると、成功者たちに対して世間の人々からふりかかってきがちなこと、すなわちまず羨望が、ついで羨望から生じる嫉妬が、わが国にむかってやってきた。そしてこのことがまた、この国を、不本意にもギリシア人と戦わねばならぬ事態

1 前四七九年、ペルシア残留軍三五万はプラタイアでギリシア連合軍に敗れた。なお以上のペルシア戦争についてはヘロドトス『歴史』第六―九巻参照。

2 戦後アテナイはデロス同盟を結成して、なおもペルシアと各地で戦った。小アジアのエウリュメドン河口での戦いは前四六七年頃。キュプロス、エジプト遠征は前四六五―四五四年頃。しかし一方ではギリシア諸都市との衝突も多くなっていく。これらの戦いについてはトゥキュディデス『歴史』第一巻(八九―一一八)参照。

に追いこんだ原因なのである。

B こうしてその後に戦いがおこると、わが軍はタナグラにおいてスパルタ人と対戦し、(1) ボイオティア人の自由のために戦った。その戦いの勝敗は異論の余地あるものとなったが、その後の事情が判定をくだしている。なぜならスパルタ人は、彼らが援助していた人々を置きざりにしたまま、撤退して国へ帰ってしまったが、わが軍はオイノピュタにおける戦い(2)で三日目に勝利し、不当に追放されていた者たちを正当に復帰せしめたからである。したがってこの人々が、ペルシア戦争の後に、今度は自由のためにギリシアを援けてギリシア人と戦い、みずからが武勇の男子であることを示すとともに、援けた者たちの自由を回復してやった最初の人々であり、また国家の尊敬を受けてこの墓地に葬られた最初の人々なのである。

C その後戦いが大きくひろがり、(3) すべてのギリシア人が兵を送ってわが国土を荒らし、(4) この国に対して恩を仇で返していたとき、わが軍は海戦において彼らを破り、彼らの主謀者スパルタ人をスパギアで捕虜にした。(5) そして、捕虜たちを殺すこともできたのだが、命を助けて返してやり、(6) 和を講じたのである。(7) それというのも、夷狄に対しては敵の滅亡まで戦うとも、同族に対しては勝利を得たところで戦いをやめるべきであり、一国家の私的な怒りのためにギリシア人の共同体を破滅させてはならない、と考えたからである。

D したがって、その戦いを戦ってここに眠っているこの男子たちをたたえることは、まことにふさわしいことなのである。なぜなら彼らは、もしなんぴとかが異論をとなえ、夷狄に対する先の戦いで他の誰かがアテナイ人より優れていたと言うとしても、その異論の真実でないことを明白にしたからである。すなわちそのとき、この人

E 人は、ギリシアが分裂して争ったその戦いにおいて優越した力を示し、他のギリシア人の指導者であり、かつて

はともに協力して夷狄を破った人々〔スパルタ軍〕を屈服させ、独力で彼らに打ち勝ってみせたのである。

一四

しかし、その平和のあとにおこった第三次の戦い[8]は、予期せざる、かつ恐るべきものとなり、その間に多数のすぐれた人々が戦死して、ここに眠っている。

そのうちの多くの人々は、シケリア周辺でレオンティノイ人の自由のために戦い、おびただしい数の戦勝碑をうちたてた人々である。彼らは、同盟の誓いを守ってレオンティノイ人を救援すべく、かの地方に船を進めたのであった。しかし航路の長さに悩まされて、国家は彼らを支援することができず、そのために彼らは力つきて悲運にみまわれた[9]。しかし、彼らの節度と武勇は、干戈（かんか）を交えた当の敵たちによって、他の人々が味方からほめら

---

1 前四五七年（トゥキュディデス『歴史』第一巻（一〇七―一〇八））。

2 タナグラの会戦の六二日後に行なわれた。

3 ペロポネソス戦争（前四三一―四〇四年）のはじまり。この戦争ではギリシア全体がアテナイ側とスパルタ側にわかれて戦い、その上同盟からの離反やそれに対する制裁、ポリス内部での抗争やそれに対する干渉があいついだ。

4 アテナイはペリクレスの策により田園はスパルタ軍の侵入にまかせ、町と港を城壁で守り、海軍で各地を攻撃した。

5 前四二五年。スパギア（スパクテリア）はピュロス対岸の島。この戦いについては『歴史』第四巻（一―四一）参照。

6 トゥキュディデスによれば、アテナイは捕虜を人質として利用したのである（『歴史』第四巻（四一））。

7 前四二一年の「ニキアスの和平」。しかしその後も戦争状態がつづく（『歴史』第五巻（一八―二四））。

8 シケリア遠征（前四一五年）にはじまるペロポネソス戦争後半の戦い。

9 アテナイはシケリア（シシリー）の支配を意図して大規模な遠征軍を送ったが、スパルタの介入によって全滅させられ、国力と威信を大きく傷つけた（『歴史』第六―七巻）。

れるよりも、もっと強くほめられたのである。

しかしまた、ここに眠る人々のうちには、ヘレスポントスの海戦(1)でたおれたものも数多い。そのとき彼らは一日にして敵の全軍船を捕獲し、加えて他の多くの海戦においても勝利をおさめたのである。

B

だが先に私が、この戦いが予期せざるおそるべきものとなったと語ったのは、次の点をさすのである。すなわち他のギリシア人たちは、わが国に対する嫉妬のあまり、こともあろうにもっとも憎むべきペルシア大王に使節を送ることをあえてなし、かつてわれわれと共同して撃退したその王、夷狄の王をギリシア人に向けて、ひそかにふたたび招き入れ(2)、かくしてこの国に向けてギリシア人と夷狄のすべてを糾合するにいたったのである。しかし、このときにもまた、わが国の力と武勇が明らかになったのだ。なぜなら、われわれの軍船がミテュネレに封鎖され、敵はわが国がもはや力つきたものと思ったのだが、そのときわが市民はみずから軍船に乗りこんで、六〇隻をもって救援し、そして万人が一致して認めるように、勇士の本領をいかんなく発揮して敵を打ち破り、味方を救い出したのである(3)。だが不当なる運命にみまわれて、彼らの遺体は、海から収容されてここに葬むられることがなかった(4)。

C

われわれはこの人々のことをつねに想い起し、ほめたたえねばならない。なぜなら、彼らの武勇によって、われわれはその折の海戦のみならず、他の戦いにおいても勝利をおさめえたのだから。実際、彼らのおかげでこの国は、よし世界のすべての人々をもってしても打ち負かされることはあるまいとの評を得たのである。またその評は正しかった。われわれが敗れたのは、われわれ自身の不和のためであって、他国の人々によってではなかったのである(5)。すなわちわれわれは、なお今日も少なくとも他国の人々によって打ち負かされてはいないのであっ

D

て、われわれ自身が、われわれ自身を敗北させ、また自身によって敗北させられたのである。

E その後他国との関係は鎮静し、平和になったが、その間にわが国におこった内戦[6]は、もし内戦が人間にとってしょせん避けえぬものであるなら、なんぴとも自分の国が、この国と異なった仕方でその病を経過することを祈るものはないであろうような、そのような経過をたどった。事実、市民たちが、ペイライエウスの側とアテナイ市の側から出てきて、いかに喜ばしげに、またいかに親しげにまじわり合ったことか[7]、またおおかたの予想を裏切り、他のギリシア人ともいかに喜ばしげにまじわったことか、そして、エレウシスに逃れた人々に対する戦い

244 をいかにおだやかにおさめたことか。そしてそれらすべてのことの原因は、真の血のつながり以外の何ものでもない。それこそが、祖先を同じくすることからくる堅固な友愛を、言葉ではなく実際の行為のうちに、つくりだ

---

1 前四一一年キュノセマ、アビュドスの海戦。前四一〇年キュディコスの海戦など。

2 前四一二年、スパルタはイオニア諸都市の支配を代償にペルシアと協定、援助を得る。

3 前四〇六年アルギヌゥサイの海戦でスパルタ海軍を破る。この時アテナイでは闘える年齢のものは自由人も奴隷もすべて舟に乗ったという。

4 このためにアテナイ軍の将軍たちは後日処罰された。プラトン『ソクラテスの弁明』32 B sqq. にもこの事がふれられている。

5 アテナイは前四〇五年アイゴスポタモイの海戦に破れて制海権を失い、前四〇四年遂にスパルタに降服した。「われわれ自身の不和のため」といわれているのは、抗戦派と和平派、民主派と寡頭派の抗争が激化していたことを指すのであろう。

6 戦争後アテナイでは寡頭派の三〇人会による独裁が強行され、亡命した民主派が外からアテナイを攻撃して内戦となった。

7 ペイライエウスはアテナイの港湾地区。内戦に勝ち進んだ民主派がペイライエウスに上陸したとき、三〇人会の一派はアテナイを出てエレウシスに逃れた。残った市民は民主派を喜んで迎えたのである。

すのである。

しかしわれわれは、この戦いにおいて、お互いの手にかかって死んだ人々のことをも忘れず、このような葬儀の折には、祈願や犠牲などわれわれにできるかぎりの方法によって、今は彼らを支配する地下の神々に祈りながら、彼らを和解させねばならない。なぜなら、われわれ自身がすでに和解しているのだから。実際彼らが互いに

B

手をかけあったのは、悪意のためでも、敵意のためでもなく、不運のためだった。ここに生きのこっているわれわれ自身がそのことの証人である。なぜなら、彼ら死者と生れを同じくするわれわれが、われわれのやったこと、またこうむったことを、お互いに許し合っているからである。

一五

その後われわれには完全な平和が訪れ、この国は静かに過していた。わが国は夷狄に対しては、彼らがわが国から手痛い目にあわされたために、それにつりあうだけの防戦をしたことを、許していた。しかしギリシア人に

C

対しては、彼らがわが国から恩恵をこうむりながら、いかなる返礼をしたことかと、それを思い出しては怒りを押えかねていた。実際彼らは夷狄と手を結び、かつては彼らを救った軍船をわれわれから奪いさり、われわれが彼らの城壁の破壊を防いでやった代償に、われわれの城壁を取り壊したのだ。わが国は、もはやギリシア人を援けまい——彼らが他のギリシア人に隷属しようと、夷狄のもとに隷属しようと、これを援けまい——と心に決め、その決意のもとに過していた。

われわれがそのような決意でいるとき、スパルタ人は、自由の守護者たるわれわれはもはや没落してしまった

D ものと信じこみ、今はもう他のギリシア人を隷属せしめることが自分たちの仕事であると考えて、その実現に着手したのである。

一六

さて、この話を長びかせる必要がどうしてあろうか？　私がこのさき語ろうとすることは、遠い昔に起ったことでもなければ、昔の人々にかかわることでもないのだから。なぜなら、われわれ自身がよく知っていることであるからだ——ギリシア人のなかでも第一級の国民、アルゴス人、ボイオティア人、コリントス人らが、恐怖におびえてわが国に援助を求めて来たことも、(1)また、これこそ奇怪千万なことだが、あのペルシア大王までが、非 E 常な窮地におちいった結果、かつて熱心に滅亡をはかった当のわが国以外の他のどこからも、身の安全を確保してもらえなくなったことも。(2)

そして実際、もしなんぴとかがわが国に正当な非難を浴びせようと望むなら、わが国がつねにあまりにも同情心に富み、弱者に好意を寄せすぎるという、そのことのみを言うのなら、その非難は正しいであろう。事実またそのときにも、わが国はかたくなな態度をとることもできず、自分で決めておいた方針、すなわち自分たちに不 245 正をなした者たちの誰が奴隷になろうとも援けはしないという方針を、貫きとおすこともできず、己れをまげて

1　スパルタの支配に反撥した諸都市が、今度はアテナイと同盟してスパルタと戦った。たとえばコリントス戦争（前三九五—三八六年）。

2　ペルシアもまたスパルタと対立した。

救援におもむいたのである。そしてギリシア人に対しては、わが国はみずからこれを援けて隷従から解放してやり、その結果彼らは、ふたたび自分で自分を隷従におとしいれるまでは、自由であった。他方ペルシア大王に対しては、マラトンとサラミスとプラタイアにおける戦勝碑の手前、これをあえてみずから援けるということはしなかった。しかし亡命者や有志者が援助におもむく場合にかぎってこれを黙認し、もって衆目の一致するごとく、大王を救ったのである。(1)

B　そして城壁を再建し艦隊を建造してのちは、戦うことを強いられたゆえに、その戦いを引き受け、パロス島の人々のためにスパルタ人と戦ったのである。(2)

一七

ところが大王は、スパルタ人が海での戦いを断念したのを見るや、わが国に恐怖を抱き、われわれとの同盟から離脱しようとして、こう要求した——もし彼がわれわれおよび他の同盟者たちとともに戦わねばならないのであれば、その代償として、以前スパルタ人が彼に引き渡したことのあるあの大陸のギリシア人を引き渡せと。(3) 彼はわれわれがそれを望みはせぬものと見込んで、自分の離反の口実をもうけるために、そのような要求を行なったのである。

C　だが彼は、われわれ以外の他の同盟者たちについては判断を誤っていたのだ。すなわち、コリントス人、アルゴス人、ボイオティア人、そしてその他の同盟者たちは、大王に彼らを引き渡すことを望み、協定し、かつ誓ったのである——もし大王が資金を提供するなら、大陸のギリシア人を引き渡すであろうと。ただわれわれだけが、引き渡すことも、誓うことも、拒絶したのであった。

まことにこの国の高貴で自由な気風は、それほどまでに強固で健全であり、生まれついての夷狄ぎらいなのであるが、それは、われわれが生粋のギリシア人であって、夷狄の血をまじえていないことによるのである。なぜなら、われわれとともに暮す人々の中には、ペロプスやカドモス、アイギュプトスやダナオスの子孫たちもいず、[4] またその他の多くの、生まれにおいて夷狄でありながら、法においてギリシア人である人々もいない。むしろわれわれは、まぎれもないギリシア人だけの、夷狄の血のまじらない住民なのであり、そこからして、他民族に対する憎悪は、きわめて純粋なものとしてわが国の骨肉にしみこんでいるのである。

さて、それにもかかわらずわれわれは、ギリシア人を夷狄に引き渡すという破廉恥にして不敬の行ないをなそうとしなかったために、ふたたび孤立に追いやられた。かくしてわれわれは、以前われわれがそのために敗北したのと同じ事態に立ちいたったのだが、神の加護によって、あの時よりもはるかに有利に戦いを終らせたのである。[5] すなわち、軍船も城壁も、またわれわれ自身の植民地も保持しつつ、[6] 戦いを終結したのだが、このようにし

1 たとえば元アテナイの将軍でペルシアに亡命したコノンは、前三九四年ペルシア軍を指揮してスパルタ海軍をクニドスに破っている。

2 この記事に相当する史実は不詳。

3 243A 注1参照。

4 伝説によれば、ペロプスはピサの王でミュケナイ王家の祖だが、その父は小アジアの王タンタロス。カドモスはテバイ王家の祖だが、その父はフェニキアの王アゲノル。アイギュプトスとダナオスは共にエジプトの王で、前者の息子リュンケウスと後者の娘ヒュペルメストスがアルゴス王家の祖という。

5 前三八七年の「アンタルキダスの和平」。この和平でアテナイ、スパルタ、ペルシアは各々の支配領域を協定し、ペルシアは小アジアの諸都市を得た。

6 レムノス、インブロス、スキュロスはアテナイの植民地と認められた。

て戦いから解放されることは、敵たちにとってもまた望むところだったのである。

246 しかしこの戦いにおいてもまた、われわれは、立派な男子たちを失った。コリントスにおいて不利な地形での戦いを強いられた人々、レカイオンにおいて裏切りにあった人々がそれである。(1) また海からスパルタ人を駆逐して、大王を解放してやった人々も立派であった。(2) その人々を、私はあなた方に思い出させよう。そしてあなた方のほうは、そのような勇士たちを私とともにほめたたえ、敬意を表すべきであろう。

一八

以上が、ここに眠る男子たちの、またこの国のために死んだ他の人々の、功業である。語られた功業は多く、

B そして美しい。だが語り残した功業は、なおいっそう多く、いっそう美しいのだ。実際そのすべてを尽さんとする者には、幾日幾夜をもってしても足りることはないであろう。

それゆえに、この人々のことを思いおこしつつ、彼らの子孫にむかってこう勧告することが、すべての者のつとめである――あたかも戦場におけるがごとく父祖の戦列を離れるな、臆病に屈してあとに退くなと。そしてこ

C の私自身もまた、おお、すぐれた人々の子供たちよ、今もあなた方を励まし、また今後も、あなた方の誰かに出会う時にはいつでも、彼らのことを思いださせて、あたうかぎりのすぐれた人となるように力を尽せと励ますであろう。

しかし今この場では、父親たちの言葉を伝えることが私の義務である。それは、彼らが危地におもむかんとするときに、もしわが身に万一のことがあれば、あとに残る者たちに伝えよと、われわれに託したものなのだ。私は

あなた方に、彼ら自身の口から私が聞いたことを伝え、また、そのとき彼らが語ったことをよりどころに、もし今彼らにその力があれば、喜んであなた方に語ったであろうことをお聞かせしよう。ではこれから私が伝える言葉を、あなた方は、あの人々自身の口から聞いているのだと思わなければならない。彼らはこう語ったのだ——

一九

D 「子供たちよ、汝らがすぐれた父を持ったということは、今汝らの眼前で行なわれている葬儀がそれを明らかに示している。われわれは、醜い仕方でなら生きながらえることができたとしても、汝らと汝らの後につづく者たちを恥辱にさらし、われわれの父親と祖先の全体を辱しめるよりは、むしろその前に美しく死ぬことの方を選んだのである。なぜならわれわれはこう考えるからだ——自分の血族を辱しめる者にとって人生は生きるにあたいせず、そしてそのような者に対しては地上にあっても、また死してのち地下にあっても、人も神も友となるものはひとりとしていないと。

E それゆえ汝らは、われわれの言葉を肝に銘じ、他のどのような仕事にはげむにも、つねに徳をもってことにあたらねばならないのであって、それを欠くとき、財も事業もその一切が醜く悪しきものとなることをわきまえるべきである。

---

1 前三九三年アテナイ軍はコリントスの親スパルタ派にあざむかれ、コリントス西方のレカイオンでスパルタ軍の待伏せにあった。

2 245A 注1の海戦などを指す。

なぜなら、富も卑劣な所有者には美しさをもたらさぬからである。そのような人間は、他人を利するために富んでいるのであって、自分のために富んでいるのではないからだ。また身体の美と力も、卑怯下劣なるものに宿るときには、似つかわしいものであるよりむしろ不似合なるものと見え、その所有者をいっそう目ざわりなものとし、その卑劣さをあらわにする。そしてすべての知識も、正義とその他の徳から切り離されれば、知恵ではなく狡知としてあらわれる。

247

それならばこそ、汝らは、初めにも、終りにも、また全体を通じても、ありとあらゆる力をかたむけて、何よりもまず名声においてわれわれをも、祖先たちをも、凌駕しようと試みよ。もしそうでないなら、よいか、徳においてわれわれの方が汝らに立ちまさるなら、その勝利は汝らの恥辱となり、反対にわれわれが汝らに劣るなら、その敗北は汝らの幸福となるのだということを、よく知っておくがよい。およそひとかどの人物と自負するものにとって、自分の力によってではなく、祖先の名声によって、自分を尊敬される者にすることほどの恥辱はないのだ。しかしもし汝らが、そのことをよく認識し、そして祖先の名声を濫用したり、浪費したりせぬ心がまえを

B

持つならば、何よりもそのときにこそ、われわれが負け、汝らが勝つことが可能になるであろう。

親たちにそなわる名声は、子供にとって美しくまた大きな宝ではある。しかし、財にせよ、名にせよ、みずからの力で得た自分の財や名声を持たぬゆえに、祖先の宝を蕩尽し、これを子孫に渡さぬのであれば、それは恥ずべきことであり、男子にあるまじきことなのである。そしてもし、汝らがこれらの忠告を日々に守り行なうなら

C

ば、ふさわしい運命が汝らをあの世に運ぶとき、汝らはわれわれのもとへ、親しき者をたずねる親しき者として、訪れることになろう。しかし、それを怠り、卑劣なふるまいをするなら、汝らを心よく受け入れるものは誰ひと

りとしてないだろう。
子供たちには、以上のことを伝えてもらいたい。

二〇

われわれのうちには親のある者もいるが、それらの父や母に対しては、もし万一不幸が訪れる結果になったときには、その不幸をできるかぎり安らかに耐えるよう、絶えず励ましてくれるべきであって、一緒になって嘆いてくれてはならぬ。実際親たちにとっては、苦しみを与えるものはもうそれ以上必要ではないだろう。なぜなら起ってしまった不幸だけで、苦しみを与えるには充分であろうから。むしろあなたがたは、彼らの苦痛をいやし、やわらげながら、彼ら両親の最大の願いであったことに、神々が耳を傾けたもうたのだということを、彼らに思い出させなければならない。

なぜなら、親たちは、彼らの息子が不死となることを願ったのではなく、すぐれた、そして名ある人物となることを願ったのであり、そして今、最大の善であるそのことを、手に入れたのだからである。死すべき人間にとって、自分の一生の間に万事が思いのとおりにかなえられるということは、けっして容易なことではないのに。

そしてまた、彼らが雄々しく不幸を耐えるならば、さすがに真実勇気ある息子たちの父であると評判され、父たち自身も同じく勇気ある人々だと評判されるであろう。しかし不幸に屈する父親たちは、世の人々に、あの父親たちはわれわれの本当の親ではないのだろうとか、あるいはわれわれをほめたたえる者はうそをついているのだろうとか、そういった疑念を抱かせるであろう。だがこれらのいずれの疑念も生じてはならないのであって、

(247)

むしろ誰よりもまず彼ら父親こそが、真実勇敢な息子たちの勇敢な父であることを身をもって示し、その行為によってわれわれの賞賛者となってもらわねばならないのである。

248

古くから伝えられている《何ごとにも度を過すなかれ》という言葉[1]は、名言であるとされている。事実それは真実を言いあてた言葉である。なぜなら、自分を幸福にするすべてのものを自分自身に依拠させているか、あるいはそれに近い心がまえの者、そして、他人に依存することなく、したがって他人の浮き沈みによって、自分の方も動揺せざるをえないというようなことのない者、そのような者にあってこそ人生を生きる準備はもっとも見事にととのえられているのであって、節度ある人とはまさしくその人のことであり、また勇敢にして思慮ある人とは、まさしくその人のことであるからだ。その人は、財や子供を得るとき、あるいはそれを失うとき、今の格言に誰よりも忠実にしたがうであろう。なぜなら、己れ自身をたのむからには、喜ぶにせよ苦しむにせよ、明らかに度を過すことはないだろうから。

B

われわれは、われわれの親たちもそのような人であってほしいと求め、望み、また現にそのような人であると主張してもいるのである。そしてわれわれもまた、今死なねばならぬものなら、度をこえて苦しむことも、怖れることもせず、みずからそのような人であることを身をもって示そうとするのである。

それゆえわれわれは、父たちにも母たちにも、われわれと同じこの考え方で残る生涯を過してもらいたいと願うのである。そしてこのことを知ってもらいたいとお願いする。すなわち、われわれを悼み、嘆いてくれることが、とくにわれわれの喜びとなるわけではないのだ。むしろ、もし死者に生者のありさまが何らかの方法でわかるものなら、わが身を苦しめ、不幸の重みに打ちひしがれている親たちの姿は、何よりもわれわれを悲しませる

C

だろう。逆に心を軽くして節度をたもちつつ耐える姿こそ、われわれを何よりも喜ばせるだろう。なぜなら、われわれの運命は、いまはすでに人間にとってもっとも美しい最期をむかえようとしているのであり、それゆえその運命は、嘆かれるより、尊ばれるにふさわしいからである。そしてまた、親たちがわれわれの妻子の面倒をみ、養い、その方に心を向けてくれるなら、それが不幸を忘れるもっともよい道であろうし、またより美しく、より

D

正しく、よりわれわれにとって好ましい生活を、送ってくれることにもなろう。

われわれからわれわれの家族に伝えてもらうべき言葉は、以上で充分である。国家に対しては、どうかわれわれのためにも、父たちと息子たちの面倒をみて、息子たちの方は規律正しく教育し、父たちの方はしかるべく老後を養ってくれるよう頼んでおきたいと思う。しかし、たとえわれわれが頼まなくとも、国家が充分に面倒をみてくれるだろうということは、よく承知している」

二一

E

死者の子供たちよ、そして両親たちよ、以上が、われわれに彼らが告げよと託した言葉である。そして私は、できるかぎり力をつくしてそれを伝えた。私自身も彼らに代り、子供たちには自分の父をまねるよう、親たちにはわが身に憂(うれ)いを抱かぬよう、切に求めるものである。われわれのうちの誰かが、あなた方戦死者の家族に出会うときにはそれが誰であれ、つねにわれわれは公私ともにあなた方の老後を養い、面倒をみるものと思ってくれ

1　七賢人のひとり、スパルタの人キロンの言葉と伝えられる。

てよいのだ。

249 国家が与える配慮については、あなた方自身も知っていよう。すなわち国家は、戦死者の子供と親に関する法律を定めてその面倒をみているのであり、また死者たちの父や母が不当なしうちをこうむることのないよう、国家の最高の機関に命じて、他の市民に優先して格別の保護をあたえているのである。

B また子供たちに対しても、国家が直接その養育に手をかしている。すなわち、彼らがいまだ幼いときには、孤児であることをできるかぎり彼らに気づかせないように努めながら、国家自身が彼らの父親の役目をひきうけ、一人前の男子に成長したなら、完全武装を身につけさせた上で、(1) 彼ら自身の家と財産のもとへ送り帰してやるのである。その際父親が武勲を立てるのに用いた武器を与えることによって、父の偉業を示し、思い出させるとともに、また同時に、父祖のかまどを力で支配するために、(2) 武具に身を固めて出発しようとするその門出を、幸先よいものとしてやるのである。

C そして戦死者自身に対しても、国家はこれを尊ぶことをけっして怠ってはいない。すなわち国家は毎年すべての戦死者に対して、彼らがそれぞれの家で受けているのと同じ祭礼を、国家自身の手で公(おおやけ)にとり行なっており、それに加えて、陸上競技、馬術競技、そしてあらゆる種類の詩の競技を催している。かくして要するに、国家は、戦死者に対してはその相続人と息子の役割を果し、戦死者の息子に対しては父親の役割を、親に対しては保護者の役割を果し、すべての人々のあらゆる面倒をたえず見ているのである。

これらのことをよく心にとめて、あなた方はより平静にこの不幸に耐えねばならない。なぜなら、そのようにしてこそあなた方は、死者たちにも、また生きている者にも、もっとも喜ばれる人となり、そしてまた、もっと

も容易に世話をし、世話をされることのできる人となるであろうから。しかしもはや、あなた方遺族たちも、また他のすべての人々も、ともどもに法の定めに従って戦死者たちに心ゆくまで哀悼の意を表した。それゆえ今はたち去りたまえ。

二三

D これで君は、メネクセノスよ、ミレトスの人アスパシアの演説を聞いたわけだ。

メネクセノス ゼウスに誓って、ソクラテス、あなたのお話をうかがえば、アスパシアという人は真実恵まれた人ですね、女でありながら、本当にあれだけの演説をつくることができるのでしたら。

ソクラテス もし信じられないのなら、ぼくについてきたまえ。そうすれば彼女からじかに演説をきけるだろう。

メネクセノス いえ、ソクラテス、わたしは何度もアスパシアに会っていますし、彼女がどんな人かも知っています。

ソクラテス ではどうだ、君は彼女をたたえないのかね？ また今この演説をしてくれたことで彼女に感謝しないのかね？

---

1 甲、胴よろい、脛あて、盾、剣、槍。ディオニュシア大祭の悲劇競演の前に、成年に達した遺児たちがこの完全武装で登場させられ、彼らが市民の力で成人し、これからは自立する旨の公表がなされたという。

2 家長としての権力をにぎることをさす。

(249)
E

メネクセノス　それはもう大いに、ソクラテス、わたしはこの演説をしてくれたことで彼女に感謝しています。いや、その演説をあなたに話した人が誰であろうと、その人に感謝します。またそれとは別のいろいろな意味で、それをわたしに聞かせてくれた人にも感謝しますよ。

ソクラテス　それはありがたいことだね。しかしぼくから聞いたということはもらさないようにしてくれよ。またこの次もきみに、彼女から聞いたたくさんの美しい政治演説を話してあげるつもりだからね。

メネクセノス　ご心配なく。もらしはしません。だからぜひ話してください。

ソクラテス　いいとも。そうしてあげるよ。

『ヒッピアス(大)』解説

北嶋美雪

はじめに

『ヒッピアス(大)』という対話篇は、これがプラトンの真作か偽作かをめぐって、他の真作とみなされる対話篇とは異なった情況におかれている。この作を論ずるにあたって避けて通ることのできない問題として、「真偽論」をすべてに先行させて独立に取上げるのはそのためである。しかしもとより真作偽作の問題は対話篇の内容と決して別ではないので、必要に応じてその個所で関連して論じられるはずである。

一 『ヒッピアス(大)』の真偽論について

『ヒッピアス(大)』および『ヒッピアス(小)』は、トラシュロス(一世紀)がプラトンの真作と認めて、彼の分類による九つの四部作の第七番目に、それぞれ「美について」「偽りについて」という内容にそくした副題をもつものとして含めているというディオゲネス・ラエルティオス(三世紀)の報告は、この二つの『ヒッピアス』が「論争的・論駁的」な性格あるいはジャンルのものであるという彼自身の注記的な記述とともに、現在われわれに残されている両『ヒッピアス』に完全に合致し、さらにはプラトンの一〇の偽作としてディオゲネス・ラエルティオスが列挙するものの中にこの両『ヒッピアス』を含めてはいないということを合わせ考えるならば、この両対話篇がプ

ラトンの真作たることには議論の余地がないかのように見える。[1]

(1) ディオゲネス・ラエルティオスがそれだけで強力な証言力をもちえないことは、このプラトンの「著書目録」に限って言っても、例えば今日では偽作としての評価がほぼ確定している『テアゲス』や『アルキビアデスII』が何の疑いを示す言葉もなく「真作」とみなされているという事実からだけでも十分に察せられるであろう。

しかるに、いま『ヒッピアス(大)』にのみ問題を限定するならば、この対話篇に関してプラトンの真作でないとする説が十九世紀はじめ、アスト(一八一六年)によって唱えられて以来、他のプラトンの対話篇に対する偽作説とちがって、真作説、偽作説は相半ばし、今日では真作説のほうがやや優勢であるように思われるものの、なお決着はついておらず、両陣営の論戦は今後もつづくものと予想される。[2] しかしいま真偽論の議論の細部に立ち入ることは許されないので、ここでは必要最小限のことだけをおさえておくにとどめたい。

(2) Ast のあとをうけて、プラトンの真作でないという説をとるのは Ueberweg, Zeller, Horneffer, F. W. Röllig, Zilles, Bruns, Jowett, Winderband, Goedeckemeyer, Gomperz, Pohlenz, Wilamowitz, D. Tarrant, A. K. Rogers, H. N. Fowler, J. Pavlu, Gigon などであり、他方真作とするのは Socher, Steinhart, Susemihl, Munk, K. F. Hermann, Stallbaum, G. Burges, Dümmler, Apelt, Vrijlandt, Wichmann, Depréel, Adam, Burnet, Mattersberger, Raeder, Ritter, von Arnim, Cornford, Shorey, A. E. Taylor, G. M. A. Grube, Sir D. Ross, M. Soreth, A. Capelle, R. G. Hoerber, W. K. C. Guthrie などである。

上記のほかに古代において『ヒッピアス』の名が言及される書物にアリストテレスの『形而上学』があるが、ここで「同じ人が偽りの人であり、また真実の人であるという『ヒッピアス』における議論は人を迷わすものである云々」(第五巻(1025^a6 sqq.))で言われることは明らかに『ヒッピアス(小)』に対応点をもつので(365D〜369B, 371E〜376C)、このことは、アリストテレスが知っていたのはプラトンのただ一つの『ヒッピアス』であった、つまり『ヒッピアス(小)』だけであったとして、ここに『ヒッピアス(大)』を否定する一つの論拠を置く人たちがいる。

けれどもこれに対しては、プラトンが二つの『ヒッピアス』を書いたなら、アリストテレスが「『ヒッピアス』においてて」と限定なしに言った場合に、彼はどちらの『ヒッピアス』をさすか自分でもむろん承知していたはずであるし、聴講者にもわかるはずだとみなしていたであろう、というロスの反論(Sir D. Ross, *Plato's Theory of Ideas*, 1951, p. 3)のほうがより説得的である。

さらにこれとは別にアリストテレスが『トピカ』の中で「定義」を問題にして、その典拠を明かさずに引用する次の二つの「定義」がある。その一つは「美とはふさわしいものである」(第一巻(102ª6)、第五巻(135ª13 sqq.))というのであって、これは『ヒッピアス(大)』(293D～294E)を思いおこさせるものであり、もう一つは「美とは視覚を通じての、あるいは聴覚を通じての快いものである」(同書第六巻(146ª21 sqq.))というもので、この「定義」とそれにつづく議論はまた「美とは視覚と聴覚を通じての快」という同じく『ヒッピアス(大)』(297E～303D)に対応を見出すものである。(3)『トピカ』のこのあとのほうの「定義」の例は、「存在するもの」の定義として「作用を受けたり、及ぼしたりしうるもの」という引用例が同時にあげられるが、これからただちにわれわれが思い浮かべるのはプラトンの『ソピステス』(247D～E)であろう。

(3) アリストテレスの場合に引用される定義は「あるいは」(ἤ)という離接的接続詞で言われているので、『ヒッピアス(大)』の定義が「それぞれにも両方にも」適用されることが強調される299C以下の議論と抵触する点を指摘し、『ヒッピアス(大)』との関係を否定する説がある。たしかにアリストテレスの議論と『ヒッピアス(大)』とでは論点にずれがあり、厳密な対応を欠いている。しかしこれはむしろアリストテレスの常套というべきであろう。ちなみに『ヒッピアス(大)』のほうでも、この定義が持ち出された当初のルースな形では、一個所ではあるが「聴覚ないし視覚を通じての快いもの」と離接的な形で言われている(298B)。

以上を総合してアリストテレスという有力な証人から、われわれは本対話篇がプラトンの作でないという証言は引き出しえず、むしろプラトンの作であることの示唆を見出すのではないだろうか。

とはいえしかし、トラシュロス、ディオゲネス・ラエルティオスを傍証としうるとしても、アリストテレスを証人として本篇がプラトンの真作たることを絶対的な確信をもって断言できない以上、これと一応切り離して、『ヒッピアス(大)』そのものにおいて、すなわち文体、構成、内容といった点で偽作を実証ないし示唆するものがかなり顕著にうかがえるかどうか検討してみることは、あながち徒労とは思われない。本篇に関するいくつかの文体上の研究は、偽作説を主張する者もそのほとんどが、「ある二、三の点を除いてはプラトン的」特色を示していることを告げている。「アカデメイアの一員の作」、「プラトンの弟子の作」説がなされるゆえんである。ともあれこの文体といい、構成上、内容上の疑点といい、当の『ヒッピアス(大)』の細部にまでわたる入念な検討と、他の対話篇との比較考証という作業を必要とするが、これまでに偽作論者によって提出されてきた問題点と論議の主要なものに関していえば、それらは筆者の調査の力の及ぶかぎりでは、本篇をプラトンの真作でないとするだけの論拠とはなりえていないし、また十分な説得性をもつものでもない。

これだけのことを確認したうえで、以下の論をすすめることにしよう。

二　登場人物と対話設定年代

登場人物

ヒッピアス(Hippias)　ディオペイテスの子で、ペロポネソス半島北東部のエリス出身のソフィスト。ヘゲシダモスの弟子と伝えられるが、この人に関しては何も知られていない。前五世紀後半アテナイを訪れたソフィストたちのうちでもヒッピアスが、プロタゴラス、ゴルギアス、プロディコスと並んで高名であったことは、本篇からだけでなく、プラトンの他の対話篇からも知られるが、しかしヒッピアスについての資料は予想外にとぼしく、後代のものは別として、彼の生存中のものはプラトンとクセノポンがあるのみである。

いま彼の年代を推定するのに唯一の手掛りとなるのはプラトンであるから、それによってみるならば、㈠本篇において、ヒッピアスはプロタゴラスよりずっと若いと言われていること(282E)、㈡『プロタゴラス』で、ヒッピアスも含めて、この対話篇の舞台となっているカリアス邸の集会に集っていた人たちのなかで、プロタゴラスがその父親になれないような年齢の者はいないと述べられていること(317C)、以上の二点からしてプロタゴラスとヒッピアスの年齢の差は少なくとも二〇歳以上と考えることができる。したがってヒッピアスはプロタゴラス、ゴルギアスに較べて一世代若く、ソクラテスと同世代かそれに近い世代の人ということになるだろう。のちに述べる理由で『ヒッピアス(大)』の対話は前四二七年をさほど経ていない頃に設定しうるので、本対話篇におけるヒッピアスは、その冒頭部分からもうかがえるように、この当時すでにソフィストとしての名声も確立しており、政治・外交上の業績も成し遂げ、その評価も定まっていると見てよく、とすると彼はこの対話の時点で少なくとも壮年期を迎えていて、四十代半ば前後という年代を想定してよいであろう。

ヒッピアスの活動や人柄を伝えるものも既述のようにプラトンとクセノポンが同時代のものとしてはすべてであるが、わけても二つの『ヒッピアス』と『ソクラテスの弁明』『プロタゴラス』がほぼその全般を尽くしており、クセノポンの『ソクラテスの思い出』(第四巻)にせよ、後代のピロストラトス(二世紀。*Vitae Sophistarum*, I, II, の記述)にせよ、それ以上に出るものではない。したがってプラトンによってヒッピアス像の概略を描くならば、彼はエリスの外交使節として公的な面で活躍した、——私人としては青年の教育を標榜する教師、ソフィストとしてギリシア各地やシケリアを遍歴し、評判を得ていた、——またそれによって金銭を受けとり、その額を誇っていた、というような典型的な当時のソフィスト像が浮かび上がる。「弁論・修辞の術の大家」という大方のソフィストに冠せられる面も、ゴルギアス流の修辞法を駆使したヒッピアスの文章や弁論を予想しうるものは本篇の随所にうかがわれるし、『プロタゴラス』(337C～338B)のヒッピアスの演説は、彼の作からの引用であろうという意見もあるほどで、その特色をよく表わしているものであろう。

以上とは別にヒッピアスにやや独自な点を求めるならば、まず第一に、『ヒッピアス(小)』の記録によると(368B sqq.)、彼がオリュンピアの祭礼に出向いた時に身につけていたもの、——指環、刻印、垢擦り、香油瓶、靴、衣服、ベルトといったようなものがことごとく自作のものだったということである。またその際彼が携えていったものに叙事詩、悲劇、ディテ

ュランボスなどの詩、それに散文による多彩な文章があったと言われる。あるいは同じ箇所に、彼の得意とするものとして音韻や音階、あるいは字母や綴り(文字)の正しい使用法、つまり今日でいう和声学や文法・文章法、それに記憶術といったものがあげられ、『ヒッピアス(大)』のほうでもこれらに関しては同じ記事が見られる。ヒッピアスの記憶術に関しては有名であったらしく、クセノポンの『饗宴』第四巻(六二)にも、後代のいくつかの記録にも現われている。このほかヒッピアスが通暁していたものとして数学と天文学がしばしばあげられるが、『プロタゴラス』のなかでプロタゴラスがヒッピアスにあてつけて言っているのもこれらの分野であり(318E)、のちにプロクロスほかが数学、および天文学上の実際の業績をあげて、それをヒッピアスに帰していることからも、この分野でのヒッピアスの活動には特筆すべき点があったのかもしれない(Proclos, *In Eucl. Comm.*; Schol. Arat. なお『ヒッピアス(小)』解説二一七ページ参照)。さらに歴史、考古学の領域に属する知識、雑録の編纂などが加わるが、以上列挙してきたもののなかから、ヒッピアスの自己宣伝めいたものや、あるいはヒッピアスという同名異人の仕事が、後世このエリスのソフィスト、ヒッピアスに帰せられたのであろうと推測しうる点も考慮に入れて、それらを割引いて考えるとしても、彼がその知識の該博さゆえに「博識・博学の人(ポリュマテース)」としてもてはやされたとしてもあながち不思議ではないであろう。

しかし本篇でもそうであるように「博学」というのは往々にして皮肉な意味で、軽蔑の念さえこめて使われる。みずから博識を豪語しながら、ソクラテスの「美とは何か」の問に対してヒッピアスの与える答えは滑稽であり、ソクラテスの反論に他愛なく破れていくさまはぶざまである。劇的な効果のためとして説明するにはヒッピアスの愚かさをあばき出していくプラトンの手法は冷酷にすぎ、その態度は揶揄がすぎるきらいがある(これも本篇をプラトンの作でないとする説が着目する点である)。しかしいまはこの問題はこのままに放置して、プラトンの描く別のヒッピアス像があることを指摘しておくにとどめよう。それは『プロタゴラス』(315C)に見出されるヒッピアスであって、そこでは、上にも注意したような天文学上の事柄を論じているヒッピアスではあるけれども、これに熱心に耳を傾け質問をしているのは、エリュクシマコスやパイドロスといった当時のアテナイのひとかどの教養人である。これはヒッピアスの一面を語るものであり、かつプラトンのヒッピアスに対する評価の一側面を示すものであろう。

ソクラテス(Socrates)　次に述べる本篇の対話の設定年代から四二、三歳頃と想定される。

対話設定年代

クセノポンは『ソクラテスの思い出』第四巻(四—五)のなかでソクラテスがヒッピアスと正義について論じた話を紹介している。そのはじめのところに、「久しぶり」にアテナイにやって来たヒッピアスはソクラテスが二、三の人を相手に例の調子で正義の問題について話しているのに出くわす。これを聞いてヒッピアスが、「ソクラテス、君はぼくが以前にいつか聞いたのとまるで同じことを話しているのだね」と皮肉るところがある。

ここに見られるヒッピアスのアテナイ訪問の二つの「時」がプラトンの『プロタゴラス』のカリアス邸の集まりの時と、『ヒッピアス(大)』のアテナイ訪問の時と同じだと断定するだけの根拠はない。けれどもヒッピアスのアテナイ訪問がそう頻繁ではなかったことは、いまのクセノポンの言葉からも、本篇冒頭のソクラテスの挨拶の言葉やヒッピアス自身の説明からもうかがわれ、そして高名なソフィストの数少ない来訪ともあれば、その際の言行がプラトンやクセノポンのような人によって同時に記録されたとしても不思議ではないであろう。

さて本篇の対話が行なわれた年代を推定する一つの歴史的事実がある。前四二七年、ペロポネソス戦争第五年目の夏の終り、シケリアではシュラクゥサイとレオンティノイの間に争いが生じた。前者はこの大戦の開戦当初からスパルタ側に組していたため、レオンティノイ側はアテナイとの間にあった攻守同盟をたのみとして使節をアテナイに送り、援軍派兵の説得にあたらせた(トゥキュディデス『歴史』第三巻(八六)参照)。この時の使節の主席代表としてその任にあたったのがゴルギアスであったと言われ、本篇のソクラテスのゴルギアスについての言及(282B)はこれをさすものと思われる。本篇の対話設定年代はしたがって、ゴルギアスのアテナイ来訪の際の演説の記憶とその印象が人々にまだ失われていない、四二七年夏からさほど遠からぬ頃、少なくともそれから一、二年以内と推定しうる。

他方『プロタゴラス』の集会は前四三三年と想定されるから、今回の訪問との間に六、七年のへだたりがあるであろう。本篇冒頭の「大そう久しぶりですね」というソクラテスの言葉や、先のクセノポンの二つの「時」も、もしこのことと重ね

合わせることができるとすれば、より具体性を帯びてくるように思われる。

三　本対話篇の構成

久しぶりにアテナイを訪れたヒッピアスに出会いがしら、ソクラテスがヒッピアスにその活躍ぶりを彼自身の口から語らせるところからこの対話ははじまる。ついでこのソフィストの人物、人柄、業績、各地での評判など次々と紹介され、そして最後にヒッピアスの口をついて出た「青年が業とすべき美しい営み」という言葉をきっかけにして、ソクラテスは「美とは何か」の吟味へとヒッピアスを誘い込む（286Cまで）。

以上の序説的部分につづいて「美とは何か」の追求がこの対話篇の以後最後にいたるまでの主題である。ところでソクラテスはここで、「最近ある議論で自分を完全に行詰りにおとしいれた」という「ある男」——これはずっとあとになって「ソプロニスコスの子」（298C）、「わたしと非常に近い身内の者で、同じ家に住んでいる」（304D）と、はっきりそれとわかる形でソクラテス自身であることが明らかにされるが——なる仮想上の人物をいわば陰の人物として登場させ、その男の役を演ずるソクラテスとヒッピアスとの受け答えという形で対話の大筋は展開される。

さて「美とは何か」の問題は美の定義の形で示されるが、それは次のような構成と順序でなされる。

〔I〕　ヒッピアスの提出する美の定義

1　「美しい乙女」（286C～289C）

2　「黄金」（289D～291C）

3　「裕福で健康で、ギリシア人に尊敬され、老齢まで生き、自分の両親亡きあとこれを立派に弔い、そのあとで自分の子供たちによって、立派に、そして偉大な人間に似つかわしい仕方で埋葬されること」（291D～293C）

「美とは何か」というソクラテスの問に答えて提出するこれらの定義はすべて定義としての資格を欠くことが暴露され、ついでソクラテス自身の美の定義が提案される。

〔II〕 ソクラテスの提案する美の定義

1 「ふさわしいもの」(293D～294E)

2 (a) 「有能にして有用なもの」(295A～296D)

(b) 「有益なもの」(296D～297D)

3 (a) 「聴覚と視覚を通じての快」(297E～303D)

(b) 「有益な快楽」(303E～304A)

しかしこれらの定義もそれぞれに論理的矛盾を露呈する。

かくて最後は、こうした結末に立ちいたったのはすべてソクラテスが言論の細切れ(スミークロロギアー)にかかずらっていたからなのであって、そんなことよりは法廷や政務審議会などでの国家公共の重大事にかかわる言論にこそ努力を傾注すべきなのだというヒッピアスの大上段に構えた結語と、それとは対照的に、ソクラテスの自己の無力についての謙虚な、切々たる表白で終っている(304Eまで)。

四 内容上の問題点

前章に図式的に示された美の定義を若干くわしく吟味検討していく過程で何が明らかになるか、言いかえれば本対話篇の意図、提出しようとした問題は何であったかをこれからさぐろうとするにあたって、あらかじめ注意しておかねばならないことがある。それはすでに気づかれているであろうように、「美」「美しいもの」「美しいこと」と訳出したギリシア語のト・カロン(τὸ καλόν)という言葉の問題である。この言葉の概念や意味内容は日本語の「美

しいもの」「美しいこと」の含意するものよりは広範であって、「美しい」とギリシア語で言われる対象は、(1)人や物の外形、(2)人間の営為・仕事、風俗習慣、制度、法、学問、そして、(3)道徳的行為、のすべてを包括するので、(2)や(3)のような場合には、われわれの言葉では「立派な」「すぐれた」「善い」「ふさわしい」「ほめられるべき」「名誉とされる」というような言葉で表現されるほうがむしろ適切な場合がある。ヒッピアスの定義〔I〕の3や、ソクラテスの三つの定義は、「美」の定義としては、この言葉にこれだけのインプリケイションがなければ出て来ないものだろうし、また理解しがたいものだろう。

これだけのことを前提として、本対話篇の主題である「美とは何か」の問の検討に入ることにしよう。この問は、先に触れたように、ヒッピアスの唱える「青年の業とすべきいろいろな美しい営みについての言説」に関連して、ソクラテスの提出する問であるが、それは、正しい人々が正しいのは、正しさによってであり、この正しさとは何かあるものである。また知恵ある人たちが知恵があるのは知恵によってであり、すべて善いものが善いのは善によってであるが、それら知恵や善はそれぞれ何かあるものである、――同様にして「すべて美しいものが美しいのは美によってである」(287C)が、その美は「何かあるもの」であるはずであるから――「何ものでもないもの」によって何ものにせよ美しくあることはないから――、しからばその「何かあるもの」である「美」とは何かという形で、初期の対話篇に共通の、ごく自然な問の導入のされ方がなされている。しかし他方、それはただちにこの問は「何が美しいか」という意味の問ではなく「美とは何か」の問であるとして、ソクラテスによってこの問の本質的な意味が明示されることによって、問われている「美」は、すべての美しいものがそれによって美しくある「何かあるもの」として、任意の美(x)ではなく、普遍的な美(X)なのだということが、そもそもの最初から示されている点で、本篇における「美とは何か」の問はかなり整備された形をとっている。

しかるにヒッピアスのこれに対する答えは「美しい乙女」(〔I〕の1)というのであるから、「すべての美しいもの

が美しいのは、美しい乙女によってである」ということになってしまう。つまり彼の答えはソクラテスの期待する「何かあるもの」(X)ではなくて、任意の「何かあるもの」(x)であるために、「美しい乙女」に相当するxは無限にある、すなわち「美しい牝馬」「美しい竪琴」「美しい土鍋」等々といったように。任意のxを美の基準にすえるかぎり、「神々の種族」を持ち出せばどんな「美しい乙女」も醜いということになるから、これでは「美とは何か」に対して「美しくもあるが、それに劣らずまた醜くもあるもの」(289C)を答えたことになり、定義として破綻している。

かくてソクラテスは第二段として問の意味を更に明確にする、――「〈美〉そのもの――他のものはみな、それによって飾られ、またその相がつけ加わる場合につねに美しく見えもするところの――その〈美〉とは何か」(289D)ということだと。「飾られる」「つけ加わる」を表面的、具体的意味に解したヒッピアスは、これに対して「黄金」(〔I〕2)と答えるが、この解答は依然として任意のxを言っているので、ほかに象牙にせよ石にせよ木にせよ「それがふさわしい場合にはものを美しく見えさせる」というふうに、「ふさわしい」という条件が加わればすべてのものに妥当するし、また逆に「ふさわしくなければ醜く見えさせる」わけであるから、ソクラテスが例証する黄金がふさわしくない場合、つまり「豆のスープと土鍋にふさわしいのは、いちじく製の杓子であって、黄金製のでない」というところから、ここでも第一の「美しい乙女」の場合と同様に、他の同類のものがいくらでもあげられるという難点と、美しいと同時に醜いものを答えているという難点によって、定義としての妥当性を欠いている。

さらに第三段では、第二段でソクラテスが行なった問の意味の明確化の段階ではまだ曖昧であった点の一層の明確化と補充がなされる。すなわち第二段で言われたことに加えて「あらゆる人々にとって、つねに美しくあるものとしての美」(291D, 292E)とは何か、ということである。ヒッピアスの答え(291D〜E、〔I〕3)はここに至って「長たらしいディテュランボスをあれほど調子はずれに歌い、質問の本題からまったくそれた答えをしている」

(292C)と「ある男」の怒りを買うが、いまの観点に照らすと、この定義は、神々のすべてと英雄神の一部にはあてはまらないという例外が生ずる。つまり「時には、ある者たちにとっては醜い」ことになり、「あらゆる者にとって、つねに美しくあるもの」という条件をみたしていない。先の二つの場合と同じ仕方でではないが、ここでもやはりヒッピアスはxを答え、Xを答えていないことによって、このような困難に導かれる。

以上ヒッピアスが「美とは何か」を問われて次々と与える極めて単純な解答(定義)の吟味を通じてプラトンが意図していたのは単に、該博な学問知識を誇るソフィスト、ヒッピアスの、このような問答に臨んでの他愛なさ、愚かさをあばいて見せるだけのことではないであろう。ソクラテスがヒッピアスとの問答を通じて順次打ち出していくのは、「すべて美しいものが美しいのは美によって美しいのだ」というある意味で単純明快な、だれでも承認する事柄のなかに含まれている重要な意味であって、「美によって」というその「美」とは何なのか、それは決して任意のxではなくて、「美そのもの、もしそれがつけ加わるなら、それがつけ加わった一切のものが、石であれ、木であれ、人間であれ、神であれ、どんな行為であれ、どんな学問であれ、みなことごとく美しくありうるところの美そのもの」(292D)、「あらゆる人々にとって、つねに美しくあるものとしての美」(292E)Xとは何なのかを問うことで求められるものであるということである。そしてこれは一般的には「ソクラテス的問」と言われるものの本質であって、作者はこの問の性格の克明な規定に努力を傾注していると見なすことができよう。

したがってこのようなものとしての美(X)を求めるのだということがここまで明確化されると、次の段階、つまり本篇の第二部ではもはやヒッピアスは答え手としての役はつとめてはいるものの、ほとんど有名無実の存在となり、ソクラテスの内面の対話と言いかえてもよいものとなっている。その最初の定義は「ふさわしいものそのもの、ふさわしいものそのものの本性、これが美である」(〔II〕1)というものであるが、しかしこの定義は「ふさわしいものはそれがそなわる対象のそれぞれのものを美しく見えさせるもの」か、「美しくあらしめるもの」か、それと

もその両方かであるが、いずれの場合も論理的困難に導かれるというような批判が下される。

第二の「有能にして有用なものが美である」(〔Ⅱ〕2(a))という定義は、「何か悪いことを仕出かすのに有能にして有用」ということもあるので、無条件にそれが美であるとは言えず、「何か善いことをすることにかけて有能、すなわち有益なものが美」(2(b))であると修正される。しかしこれは「有益なもの」は「善きものを作り出すもの」であり、「作り出すもの」(原因)は「作り出されるもの」(結果)の原因であるから、有益なものが美であるならば、美は善の原因である。しかるに、原因と、原因によって作り出されるもの(結果)とは明らかに違うから、美は善ではなく、善も美ではないという、ソクラテスにとっては最も不本意な帰結に導かれる。

第三の「聴覚と視覚を通じての快が美である」(Ⅱ3(a))という定義は、この「聴覚と視覚を通じての快」をとりわけ他の快楽と区別して美とする根拠が求められなければならないが、それは「それらを美しくあらしめている何か同一のもの、それら両方に共通にそなわっているし、それぞれに個別的にそなわっているような、共通のもの」によるはずであるが、この定義はこの条件をみたしえない。かくて最後に「有益な快楽が美である」(3(b))という定義が持ち出されるが、これも2(b)と同じ理由で斥けられる。

このように見てくると、第一部のヒッピアスの定義が、その検討を通じて「ソクラテス的問」の性格を明示しようとしたものであると見ることができるのに対して、第二部は、その上に立って各定義の論理的妥当性を追究したもののようである。しかしこれらはいずれも美の定義としてソクラテス、プラトンが真剣に求めた定義とするにはあたらないように思われる。指摘されるように、単なる論理的妥当性、「定義に際して生ずる論理的問題一般」が追究されている観がある。けれども問題はもう少し先にあると考えられる。

もはや結論的に要約するならば、第一部でその性格が規定された「ソクラテス的問」は第二部に入ってさらに

「ふさわしいものそのものの本性」、「もしそれがそなわるならばそれぞれのものを美しく見えさせるもの、あるいはあらしめるもの」、あるいは「それらを美しくあらしめている何か同一のもの、それら両方に共通にそなわっているし、それぞれに個別的にそなわっているような、共通なもの」というように「問」のX性を補強しつつ、美に関する論理的に未熟な定義をくつがえそうとしたとみなすことができよう。

ところで美のX性としてこれまでに意図的に指摘してきたもの、ソクラテスが「何であるか」として問おうとしたもの、それはのちにプラトンが本格的なイデア論を展開する『パイドン』や『国家』でイデアに関して用いるのと共通の術語で言われているがゆえに、本篇にイデア論がありとみて、そのことからこの作品の年代決定をしたり、「作者」の想定をしたり、いろいろの結論が引き出されるにいたっている。けれどもここでほぼ網羅しつくした語句によって明らかなように、これらは初期対話篇に個別的には見られるものであり、それらの対話篇における と同様に、本篇にイデア論は存在しない。「美そのもの」「美はそれ自体として」というような表現は本対話篇においてはじめて見出され、このこと自体はきわめて注目すべきことではあるけれども、しかしこれは決して美のイデアを意味してはいない、すなわち超越的実在としての美はどこにもあらわれてはいないのである。ひるがえって本篇における美の何たるかを問う定義がすべて不満足であることが見出され、最後が行詰り(アポリアー)に終っているのは、『カルミデス』『リュシス』『ラケス』『エウテュプロン』など初期対話篇と同じであるが、「美とは何か」を問うて最終的な解答はやはり美のイデアを考えることなしに不可能であろう。『饗宴』や『パイドロス』における「美」の形が先にあることは確かである。美の定義として充全な定義はしたがってイデア論をまって得られるものであり、本篇はそのことを予知せしめると言ってもよいであろう。

五　本対話篇執筆年代と結び

前章にくわしく検討されたような「ソクラテス的問」の性格規定と、最後に下したイデア論不在の裁定とは、本対話篇の位置を推定させるよすがとなる。「ソクラテス的問」がプラトンのイデア論に発展する必然性とその過程は本篇において最もよく表わされていると言ってよく、整備され、成熟した形で「ソクラテス的問」が現われている点で、『カルミデス』『リュシス』『ラケス』のような初期対話篇よりも、またそれらよりはあとの作品と思われる『エウテュプロン』よりもあと、おそらく『プロタゴラス』『エウテュデモス』『ゴルギアス』のような、『ヒッピアス(大)』もまたその性格を同じくする「論争的・論駁的」な対話篇群の前後に位置づけることができるだろう。

さらに若干の補足を加えるならば、本対話篇は「構成」の章で示したように「幾何学的」(クロワゼ)とも形容されるような、シンメトリカルな構成をあらゆる点で見せる興味深い対話篇である。ソクラテスが第二部で三つの定義を提出するにあたって、その都度示す躊躇(293D, 295A, 297E)にはヒッピアスの強気がコントラストをなしているなど、細部にいたるまでの対応があり、きわめて計算ずくめの作品ということができる。先に指摘されたヒッピアスに対する不自然とも感じられるソクラテスの揶揄も、プラトンの作り出したこのようないわば数学的な一種の純粋状況の中にあっては、歴史的実在人物としてのヒッピアスに対する終始まじめな、あるいはまともな批判というよりは、意識的な「戯画化」の精神の産物と見ることができるのではないだろうか。ひるがえってみるに、この対話篇は場所がアテナイとあるだけで何の情況設定もなされていないし、登場人物も二人だけの、単純化できるだけ単純化しつくした、その線で考えるなら、「対話設定年代」の詮索などむしろ余計な作品なのかもしれない。

主な使用文献

L. F. Heindorf, *Platonis dialogi selecti*, vol. I, Berolin., 1802.
F. Ast, *Platonis opera*, vol. IX, Lipsiae, 1827.

H. N. Fowler, *Cratylus, Parmenides, Greater Hippias, Lesser Hippias,* (Loeb Classical Library), London & Cambridge (Massachusetts), 1920.

O. Apelt, *Platons Dialoge : Hippias I und II, Ion,* 2 Aufl., Leipzig, 1921.

A. Croiset, *Platon Œuvres Complètes,* (Budé), Tome II, Paris, 1921.

D. Tarrant, *The Hippias Major*, Cambridge, 1928.

The Dialogues of Plato, tr. by B. Jowett and ed. by R. M. Hare & D. A. Russell, Vol. I, London, 1970.

『ヒッピアス(小)』解説

戸塚七郎

この対話篇は、おそらくアテナイの体育場あたりで、ヒッピアスが大勢の青年を前にしてホメロスの詩について演説を試み、これが喝采裡に終って、人々が立ち去りかけている場面で始まる。ここで一言、登場人物について触れておきたい。

登場人物

ヒッピアス(Hippias) エリス出身のソフィストで、プロタゴラスと同時代に活躍した。年齢的にはプロタゴラスよりかなり年下になる。したがって、ソクラテスとはあまり年齢の開きがないと見てよいであろう。彼は、若いに似合わずソフィストとしては一流で、人一倍多額の謝礼を要求したにもかかわらず、多くの青年を集めた(『ヒッピアス(大)』282D〜E)。その知識はきわめて多彩で、天文学、幾何学、算数術、文法術、詩、音楽に及び、最高の知者であることを自認していた(『ヒッピアス(大)』285B sqq.『ヒッピアス(小)』366D, 367E sqq.)。一例を数学にとると、数学者としての彼には、角の三等分やテトラゴーニズゥサ(τετραγωνίζουσα)と名づけられた曲線(後のquadratrix)、つまり円の求積法に用いられる曲線などが業績として帰せられている。これに関しては、証言の正確度になお疑問が残っているとはいえ、このような発見と結びつけて考えられるほどの知識を彼が持っていたという証拠にはなるだろう。また、記憶力においても常人をはるかに越えており、一度に五〇人の名を覚えることができたと言われる(『ヒッピアス(大)』285E、『ヒッピアス(小)』368D)。この能力は、おそらく、彼独自の技術によって高められたものであろう。その他、彼は手工芸においても秀で、衣服、服飾品、日

常生活の小物類のことごとくを自ら製作するほどであった(『ヒッピアス(小)』368B sqq.)。彼は常に高価で華麗な衣服を身につけていたと言われるから、彼のこの方面での技術も素人の域を出ていたと推察される。

この対話篇では、オリュンピアの祭典がある度に出掛けて、他人に後れをとったことがないと語り、人の望み通りのことを語って聞かせると豪語しているが(363C sqq.)、上のような才能の多彩さを想えば、その自信もうなずけようというものである。したがって、世に出るための有能さを渇望していた当時の青年たちの目には、彼こそこよなく優れた人物であり、自分たちが求める理想の姿として映ったに違いない。彼らが、高額な報酬を支払ってまで、先を争って彼の門を叩いたのは当然と言える。しかし、これほどの才能を誇ってはいたものの、プロタゴラスやゴルギアスに比して、オリジナルな精神の持主であったとは考えられない。

エウディコス(Eudicos)　ソクラテスとヒッピアスの対話を取りもつ人物として登場する。彼については『ヒッピアス(大)』でも一言触れられているが(286B)、本対話篇におけると同様、父親がアペマントス(Ἀπημάντος)であるということ以外は何も語られていない。話しぶりから推して、彼はヒッピアスと昵懇(じっこん)であり、おそらくはヒッピアスを尊敬して小パトロン的役割をしていた人物と考えられる。

ソクラテス(Socrates)　年代を暗示するものは特に見当らないが、年令を四二、三から五くらいと見てよいだろう。

『ヒッピアス(大)』と『ヒッピアス(小)』

『ヒッピアス』の表題を持つ対話篇はプラトンに二つある。これらにはそれぞれ大、小の修飾が与えられ、『ヒッピアス(大)』(Ἱππίας μείζων)、『ヒッピアス(小)』(Ἱππίας ἐλάττων)と呼称されている。トラシュロスによると伝えられている副題が、前者は「美について」(περὶ τοῦ καλοῦ)であるのに対し、『ヒッピアス(小)』は「偽りについて」(περὶ τοῦ ψεύδους)であって、内容的に両者が別個のものであることは明らかである。共通点と言えば、共にソフィストのヒッピアスを主な対話者とし、彼の才能や人柄に関する比較的詳しい資料を提供していることくらいで

あろう。事実、ヒッピアスに関する資料の多くは、プラトンのこれら二つの対話篇に求められているのである。

ところで、同名の対話篇に与えられた「大」、「小」の限定が何を意味するかは謎とされてきた。これが、作品に見られる技巧とか作品のもつ価値の優劣を表わすものなのか、あるいは年代的前後関係を示しているのか(その場合でも、いずれが前でいずれが後か問題である)、それとも、文字通り受け取って、単純に作品の長短を示すと解すべきなのか(この点では大小の規定が対応し、『ヒッピアス(大)』は『ヒッピアス(小)』のほぼ二倍の長さである)、これらに決定的な解答を与える鍵は見当らない。

ディオゲネス・ラエルティオスが伝えている著作目録によれば、『アルキビアデス』では、『アルキビアデスII』には δεύτερος(第二の)と付記されていて、現在の呼称と同一であることが判るが、『ヒッピアス』に関しては「二つの『ヒッピアス』」とあって、α′とβ′の記号が大小の代りに与えられているだけである(Diog. L. III 59-60)。α′、β′は数の一、二を表わす記号にすぎない。これが『ヒッピアス』二部作のうちの一、二を示すものなのか、それとも、同名の対話篇が二篇あるところから、便宜上一、二と付記されただけのものなのか、それすら確めることはできない。まして大小の別となると、長さの違いとたまたま符合しているということ以外、その意味は全く不明である。

この問題は、両対話篇の真偽の問題とも必ずしも無関係ではない。これを価値的・技巧的優劣と見る場合には、これまで『ヒッピアス』の真偽決定問題においては、『ヒッピアス(小)』(以下『(小)』と略記)よりもむしろ『ヒッピアス(大)』(以下『(大)』と略記)が疑いの目をもって見られてきた点に若干の危惧が感じられる。かりに『(大)』が偽作であって、プラトンの弟子によるものとか、古い文献に基づいてヘレニズム期に編集されたものとし、そして一方の『(小)』をアリストテレスの証言を基にして真作であるとした場合でも、偽作が真作より優れていてならぬ理由はないと言えるかもしれない。しかしその場合でも、偽作にあえて『(大)』の修飾を冠することは、単に作品そのものでなく、プラトンの作品として扱う場合には問題であろう。

このように、大小の別は判然とせぬままではあるが、それぞれが異なったテーマを扱う別個の対話篇であり、特に両者を関連づけなくても読むのに不自由は感じないから、ここでは一応便宜的区分としておくのがよいであろう。

真偽の問題

次に、この対話篇の真偽の問題であるが、この点では、『(大)』と異なり古くから疑われることが少なかったと言える。それはアリストテレスの証言が有力な根拠となっているからである。アリストテレスは『形而上学』第五巻二九章で「偽り」の意味を分析し、そこで『(小)』に触れて次のように言っている。

「……それゆえ、『ヒッピアス』における議論、つまり、同一人が偽りの人でもあり真実の人でもあるという議論は、ひとを混乱に陥れるものである。なぜなら、その議論では、偽る能力のある者が偽りの人である(そして、その能力のある者は知識のある者であり、思慮ある者である)とされ、さらに、意図をもって悪しきことをなす者がより優れている、と解されているからである。」(1025^{a}6–9)

ここに示されている議論は明らかに『(小)』の主題をなすもので、特に365D～369Bで述べられ、371E以下で繰り返されているものである。このことから、アリストテレスが言及している『ヒッピアス』が『(小)』であることはまず疑いえないであろう。もっとも、『(小)』をアリストテレスが単に『ヒッピアス』と呼んでいることをもって、『ヒッピアス』はただ一つであり、今日の『(小)』がそれであると断定することには問題が残るが、しかし、少なくとも『(小)』が真作と認められる一つの、しかも重要な根拠となっている事実は否定できない。

執筆年代

ついで、『(小)』の書かれた時期、つまり作品の年代に触れておきたい。この中に示されている議論が、根底に

ソクラテスの思想を置いていることは明らかである。にもかかわらず、この対話篇はあまり重視されていなかったと言える。その理由の一つに、ソクラテスの思想を直接述べるというよりは、むしろ逆説的な議論に終始し、それのみが表面に出ているという風変りな点が挙げられるだろう。しかも、形式の上でも、単純で、ドラマティックな創意も少なく、なんの変哲もない対話に終っている。逆説的表現はなにもこの対話篇だけに限ったことではないが、その点だけをあからさまにむき出している未熟な点に、師の基本的な教説に忠実で、これを守り通そうと努力している若い信奉者の姿を見ることは、さほど困難ではないかもしれない。その意味で、『(小)』が初期のいわゆるソクラテス期対話篇と時期を同じうすると見て差し支えないと考えられる。大方の研究者の結論もこの点では一致を見ているようである。

対話篇の内容について

内容の上で特に目につくのは、ここの議論が導くショッキングな結論であろう。「故意に過ちを犯したり不正を働いたりするのは、善い人間をおいて他にない」(376B)は、ソクラテスの有名な命題「自ら進んで悪をなす者はいない」に反するものである。ソクラテスにおいては、道徳的な過ちはすべて無知に基因する。悪を進んで求める者というのは、その悪を善と思い込んで求めるか、悪を悪と知って求めるかのいずれかでなければならない。しかし「悪を悪と知って」求める者は、その悪が自分に利と幸福をもたらすと考え、悪が所詮は自分に害を及ぼすことを知らないのであり、一方の「悪を善と思い込んで」求める者も、悪の悪たることを知らないわけであるから、結局は、いずれも悪を悪とは知らずに求めていることになる。つまり悪行はすべて無知に帰せられることになる(『メノン』77B〜78B)。このことは、万人が本性的によき生(幸福)を求めている以上、「何人も進んで悪しき行為をしない」という結論を導くことになろう。したがって、本対話篇の結論はこれと明らかに矛盾したものである。

常識的に見ても、優れて善き人間が意図的に不正を働くとは納得できぬことであろう。ヒッピアスが、議論の筋道を認めながら、その結論については強い拒絶反応を示すのも当然である。しかし、諸技術、所有物、道具など多くの実例について展開される議論が、或る意味では肯定できることもまた事実である。計算において意図的に過つのは計算において能力の優れた者であるということ、これは誰しも認めざるをえないであろう。その者が同時に正解を与えうるということも、また認めなければならない。いつも同じように(366E)偽ったり過ったりするのは、真実を知りえぬ者には不可能だからである。とすれば、或ることについて能力のある者、したがってそのことについて優れている者が、当の事柄に関して真偽いずれをもなしうるという議論は、正しいものとしなければならない。

問題はこれが一般化され、道徳の領域に持ち込まれた時である。正しさの何たるかを知り、それを行なうことのできる者は、そして彼のみが、これまでの論法からすると、意図的に不正をなすことができる訳である。徳に関して知があり能力のある者、それはまた徳に関して優れている者、つまり有徳者であろう。この点では諸技術との類比が成り立つ。

しかし、有徳者が不正をなすことがありうるかどうか、という点になると、必ずしも諸技術と一様ではない。上の論法では「偽りの人は能力のある者である」と定義されたが(365D)、しかし「能力のある者は偽りの人である」とは断定されていない。したがって、有徳者が能力のある者であるとして、その有徳者が必然的に偽りの人、つまり意図的に過つ(不正を働く)者であるとは言えないであろう。技術の場合では、例えば医術が、時として意図的に過つ(あるいは健康維持以外のことに知識を向ける)こともありうるかもしれない。他のより大きな善のために、生かす技術を殺す技術に転用することもないとは言えまい。それと同じことが有徳者にも言えるか、つまり、有徳者に、不正を働いてそれが認められるような場合がありうるか、あるいは、諸技術の場合のように、有徳者についても、正しく行なうこと以上に大きな善が他に求めうるか、となると問題である。むしろ答えは否定的であろう。こ

こに、技術的知と徳の本質としての知との大きな差異を認めざるをえない。

ソクラテスにとって、正を行なうことはそれ自体がよき生(幸福)に関わる究極的な目的である。したがって、これ以上の目的は存在しえないから、不正が許される余地は全くないと言わなければならない。それゆえに、「不正を働くか不正を蒙るか」の選択を求められる時には、ソクラテスは躊躇することなく「不正を蒙る」ほうを採るのである。

では、ソクラテスの信条とは相反する結論をあえて導き出したプラトンの意図は、どこにあると見たらよいのだろうか。

プラトンがこの論を真面目にとりあげたのでないことは、この対話篇の終り(376B sqq.)に見られるソクラテスの言葉から推察できる。そこでは、「故意に過ちを犯したり恥ずべき不正なことをなしたりする者は、善い人間をおいて他にない」と意外な結論を導く際に、「かりにそういう人間がいるとしたら」と限定が付加されており、そのような人間の存在、あるいは、善き人間が故意に過つ場合のあることに、留保というよりはむしろ、責任を避ける態度を覗かせているのである。さらに、「この問題についてはは考えがふらついている」と一見懐疑的態度も示している。しかし、プラトン自身この問題について懐疑的であったとは考えられない。先に示したソクラテスの信条は揺ぎないものであり、プラトンもこれを自己のものとしていたはずである。とすれば、このような言葉も、むしろ結論に対するプラトンの否定的見解を暗示するものであろう。

また常識的に見ても、『(小)』の結論が道徳的に承認できぬものであることは明らかである。このことは、同じような議論を掲げているクセノポンの一節からも知られよう。『ソクラテスの想い出』第四巻(二の一九―二〇)で
ソクラテスとエウテュデモスの対話が描かれているが、そこでは、ソクラテスの問「故意に偽るのと心ならずも偽るのとどちらが不正か」に対し、エウテュデモスは、他の実例を考え併せて確信を失いながらも、なお「故意に偽

るほうだ」と答えている。偽って薬を飲ませ、偽って全軍の士気を鼓舞するというような行為の正しさを考えれば、故意に偽ることの正しさも認めざるをえないわけであるが、それでもなお意図的な偽りを不正と答えるのは、この判断が常識的に正しいと認められているからであろう。先述のヒッピアスの拒否的態度もこれと同様である。

このように、ソクラテスの信条に反するのは勿論、常識的にも許されそうにない結論をあえて導き出した理由は、一つには、読者に不審の念を起こさせ、その注目を惹くことにより、いわゆる知識と、徳の本質としての知との違いについて読者の新たなる認識を促すためであり、これによってソクラテスの信条を改めて世に問うことを意図していたためと考えられる。プラトンの対話篇は、自己の教説を説き聞かせるというよりは、読者に課題を与え、その解答を要求するという性格が強い。してみれば、この対話篇の議論も、ソクラテスの命題を、逆説的表現を用いて問いかけ、間接的に主張していると見るべきであろう。

この翻訳をするに当り参照した文献は次のとおりである。

I. Bekker, *Platonis Dialogi graece et latine*, vol. I/2, Leipzig 1816.
F. Ast, *Platonis quae exstant Opera*, vol. IX, Leipzig 1827.
G. Stallbaum, *Platonis Opera Omnia*, vol. VIII/1, Leipzig 1869.
M. Croiset, *Hippias Mineur ; Platon, Œuvres Complètes*, tome 1, Paris 1925.
Plato with an English Translation, vol. VI, by H. N. Fowler, London 1926.

『イオン』解説

森　進一

一　総論、登場人物、年代について

総　論

本篇には、副題として、「『イリアス』について」という言葉がそえられている。ホメロスの吟誦のみに長じていると語る吟誦詩人イオンとソクラテスとの対話には、『イリアス』の詩句の引用されることが多く、この副題も、その面で、一つの妥当性をもつと考えられる。しかしまた、対話の主題とされているものは、吟誦詩人の才能とはなにか、という問題であり、それはさらに、もっと一般的に、詩人の本質とはなにか、という問題につながるものをもっていて、プラトンの芸術観の一端をつたえているということもできるであろう。

吟誦詩人(ラープソードス)という言葉の由来については諸説がある。また、パンアテナイアの大祭に、ホメロスを語る彼ら詩人たちの競演がとりいれられた習慣は、ソロンにはじまるともいわれている(これらについては、補注(I)A参照)。もしホメロスが、クセノパネスの語るように(Fr. 10(DK))、ギリシア人にとって教師の役割をはたしていたとするならば、それを吟誦し、また私的な会話では意見をのべたとも思われる吟誦詩人もまた、一つの教育的な役割をもつ存在ではなかったかと考えられる。しかしまた、クセノポンの『饗宴』第三巻(六)——また『ソクラテスの思い出』第四巻(二)——の中で、吟誦詩人は、ホメロスの詩句をよく憶えてはいるが、愚かしい存在で

あるというような言葉が見られるように、一部の知恵を愛する人たちの目には、そのようなものと思われていたのであろう。本篇においても、俳優とひとしく扱われているところや(532D, 536A)、その絢爛(けんらん)とした技術を羨ましく思うと語るソクラテスの皮肉な言葉には(530B〜C, 532D, 536A)、そうした軽視の感情があらわれている。吟誦詩人イオンは、まさしくそうした存在としてソクラテスと読者の前に登場し、なぜ自分は、ホメロスについては得意だが、他の詩人になるとなんの関心ももてなくなるのだろうか(532B〜C)、という質問をすることがきっかけになって、吟誦詩人とはなにか、という問題が、展開されるのである。

登場人物

イオン(Ion)　本篇において語られていること以外には、不明である。エペソス生まれの、とくにホメロス語りを得意とする吟誦詩人。エピダウロスのアスクレピオスの祭に優勝し、つぎのパンアテナイアの大祭にも勝利をたずさえたいと、ソクラテスに逢って正直に語るその登場ぶりには、吟誦詩人としての世俗的虚栄心について、なに一つ疑問を抱いていない単純な性格がうかがわれる。それはまた、ソクラテスの皮肉な追求の前で、恰好のからかわれ役になるような、そういう一つの類型的人物として描かれているともいいうるであろう。

ソクラテス(Socrates)　つぎに語られる劇中の対話年代の推定時期から考えて、六五歳頃から死までの、晩年の一時期に、イオンと逢ったものと思われる。

対話設定年代

結論を先にすると、対話が行われたと推定される年代(対話設定年代)は、前四〇六/四〇五年頃と推定される。本篇541C〜Dに、アテナイとエペソスとの間に、アテナイが指導権を握った上での友交関係の保たれていることを暗示する言葉が見られる。この時期を、補注(I)Dにおいて語られた両国の関係をもとにして考えてみると、

(A)前四一五年のシケリア遠征以前か、
(B)同補注に見られるデモステネスの言葉に従って、アテナイが指導者であった期間をもうすこし拡大し、前四〇五年のアイゴスポタモイの敗戦までとするか、
(C)下って前三九四年のクニドス海戦頃から前三九一年頃の間とするか、
以上のいずれかにしぼられる。
ところで、やはり、541Dにおいて、外人でありながらアテナイの要職についた人として、パノステネス、ヘラクレイデスの名前があげられている。このうち、
(一)パノステネスは、前四〇六/四〇五年頃、将軍になっていたものと推定される(補注(I)E参照)。
(二)ヘラクレイデスは、前三九三年頃にはアテナイの要職について、民会出席者の手当を二オボロスに引上げる処置を行ったと推定され、またすくなくとも前四世紀初頭の頃には、アテナイ市民権をえていたと推定される(補注(I)F参照)。
(三)また本篇では、両者をアテナイ人たちが将軍や官職に選んだことを語るところで、その動詞に現在形や現在完了形が使われている。このことは、対話が行われたと想定される時期と、その両者の存在が、同時代にあって重なっていることを暗示しているとも考えられる(補注(I)G参照)。
そこで以上(一)、(二)、(三)の条件を満足させる期間を、先のエペソス、アテナイ間の(A)、(B)、(C)三つの友交期間から求めれば、まず(A)の想定は不可能となり、(B)(C)が残る。そのうち、
(B)の前四〇五年頃という想定は、一方パノステネスの条件の方はすぐにこれを満たすが、他方ヘラクレイデスの条件は、その市民権をあたえられた時期を、前四世紀初頭よりさらにさかのぼった期間中のことと修正することにより、満たされることになる。
これにたいし、
(C)の前三九四—三九一年頃という想定は、ヘラクレイデスの条件の方はすぐにこれを満たすが、他方パノステネスの条件は、将軍就任後、その市民権獲得の期間が、当然その頃まで下って継続していると考えることにより、満たされることにな

る。

したがって、(B)(C)はそれぞれ、或いはヘラクレイデスの条件をさらに以前にさかのぼって考えることにより、或いはパノステネスの条件をさらに下って継続するものとすることにより、それぞれ類似の修正のどちらかを行なうことによって成立するわけで、その点、対等の可能性をもつと考えられるであろう。学者の間でも、たとえばシュトック(G. Stock)、マクグレガー(J. M. Macgregor)は(B)説に近く、メリディエ(L. Méridier)は(C)説をとっている。両説それぞれ決定しがたい。しかし(C)説で考えると、その想定年代は、ソクラテス死後の期間にあたるという時代錯誤をともなう。もっともそれとて、創作上、虚構の自由を考えればそれまでであろうが、[1] 訳者としては、(B)説を仮定したい。

（1） たとえば、『メネクセノス』においても、ソクラテスが、245 A, E などにおいて、自分の死後に起こった出来事を詳述するという時代錯誤が見られる。その点、劇中の想定年代にたいしては、極端な正確さを求める必要がないとも思われる(G. Stock, M. A., *The Ion of Plato*, Oxford. 1909. Introduction X)。

執筆年代

以上、対話設定年代の推定条件として考えられたもののうち、執筆年代の推定にも適用できるものがある。541D におけるヘラクレイデスへの言及や、エペソス、アテナイ間の友交関係を暗示する言葉が、それである。アテナイの要職についた外人の一人として、ヘラクレイデスへの言及は、補注(I)Fにおいて語られたアリストテレスの証言と照合して考えてみるのが適切であるように思われる。つまり、民会出席者の手当を、アギュリオスの一オボロス案と競って、二オボロス案にしたというヘラクレイデスの処置について、その記憶がまだ新しい時期での言及ではなかったかと推定されるからである。それと、エペソスとの友交関係という条件を合わせて考えれば、本篇の執筆年代は、すくなくとも前三九四／三九三年よりさかのぼることはなく、また前三九一年より下ることはないとするメリディエの推定が、適切であるように思われる。この推定はまた、次項で語る本篇の内容を考えてみた場合にも、

充分に認められるであろう。

また本篇において引用されている『イリアス』の詩句のうち、537A～Bの詩句の前半、および538Cの詩句の末尾の一行が、クセノポン『饗宴』の第四巻(六―七)においてそれぞれ引用されている詩句と、まったく一致するところから、本篇とクセノポン『饗宴』との先後関係が問題とされる。しかしこれについては、補注(I)Hにおいてすでに見たように、充分な妥当性をもって、本篇の先行性を結論することができると思われる。したがって、先の推定年代が、この先後関係の問題と抵触(ていしょく)することはない。(2)

(2) (A)本篇をプラトンの真作とするかどうかの真偽問題については、一九世紀においては賛否相半ばするものがあったが、今日では、その真作であることは疑われていない。(十九世紀においては、たとえば、シュライエルマッハー(F. E. D. Schleiermacher)の、多少躊躇を示しながらの否定論は、ベッカー(A. E. Bekker)においてさらに大胆に進められ、アスト(F. Ast)、ツェラー(E. Zeller)、リッター(C. Ritter)がこれに従った。これにたいし、他方、ヘルマン(K. Fr. Hermann)、ニッチュ(G. G. Nitzsch)、シュタルバウム(G. Stallbaum)、デュムラー(F. Dümmler)、ステーリン(F. Stählin)、マイヤー(Ed. Meyer)、ゴンペルツ(T. Gomperz)などが真作説を支持した。ヴィラモヴィッツ(Wilamowitz-Moellendorff)は最初長く否定説をとっていたが、のちこれを撤回した。シュライエルマッハーはその反対理由として、㈠イオンにたいするソクラテスの態度の非礼、㈡作者によって追求されている主題の曖昧さ、㈢議論の進行において、たとえば技術にかんする前半(531B～533C)の議論と、後半(536E～541B)の議論の間に一貫性を欠くこと、㈣その他二、三のギリシア語法の不適当、などをあげているという。しかし全体的にうかがわれるプラトン的な調子から、プラトンの弟子がプラトンの草稿をもとにしてつくったものか、或いは、プラトン自身の充分な推敲を待たぬ早熟の作品であるか、そのいずれかであろうとの躊躇を示している。しかし以上の四つの理由は、問題とされるものではない。)

(B)さらに製作年代にかんし、『パイドロス』を初期作品と見なした上で、本篇では、『パイドロス』においてすでに詳論された主題が、より劣った鮮明さと迫力をもってとりあげられているという理由から、これを『パイドロス』の後のものと見るシュライエルマッハーの見方や、或いは本篇を『国家』より後のものとする、今世紀初めのシュトック(G. Stock)の見解

は、今日では認められないであろう。（シュトックの理由はつぎのようである。㈠本篇538Bにおいて、傷ついたマカオンに、プラムノス酒にチーズを混じた薬用の飲物をあたえるという、『イリアス』の詩句が引用されている。これと同じ傷の療法を語る詩句が、『国家』Ⅲ. 405E～406Aにも引用されているが、そこでは、引用のされ方があいまいに行なわれている。そのために、ホメロスの詩句を暗記している吟誦詩人たちから、当然攻撃のあったことと推量されるが、本篇はそれへの解答の意味をもつ。㈡原文の用語法から。532B6(σχεδόν)の(τι)を省略した語法、530B4(ἐὰν θεὸς ἐθέλῃ)が、初期作品に見られる(ἂν θεὸς θέλῃ)でないこと、530B7(πρέπον…εἶναι)が(πρέπειν)と同等の意味をもつ分析語法であること、533D1(ἔστι…ὄν)が(ἔστι)と同等の意味をもつ分析語法であること、542A6(πότερα)に複数形が使用されていること――これらはいずれも、後期作品の用語法を示しているという。）

二　内容について

まず対話の推移を概括してみると――

ホメロスの吟誦がたいへん得意であると、無邪気に誇示するイオンにたいし、得意なのはホメロスのみか、それともヘシオドスその他の詩人についてもなのかと、ソクラテスの質問するところから、対話は展開される（530A～531A）。

イオンが、ホメロスのみに長じていることを答えると、しかしホメロスもヘシオドスも同じことがらをうたっている以上、一方に長じておれば、他方もやれるはずだと、ソクラテスは反論する（531A～532B）。

イオンは、そのことは認めても、現実においては、ホメロスについてであれば言葉に窮することはないが、他の詩人については、すっかり当惑する自分の実状を告白し、その理由の探究をソクラテスに依頼する。これにたいしソクラテスは、それはイオンが、技術と知識によって吟誦していないからだと答え、技術の全体性を解明する（532

C〜533C)。

イオンは、それは認めるが、しかしそれではどうして、ホメロスだけが得意である、というようなことになるのかと、今一度初めの、ホメロスのみに長じていることの原因に話を戻す。

それに答えて、それは「神の特別の恩恵」によっているのだという、ソクラテスの長広舌(533D〜535A)がつづき、その問題をめぐって、話が展開される(535A〜536D)。

イオンは、そのソクラテスの説は認めるが、しかし同時に、自分はホメロスにかんするかぎり、すべてが可能であり、すべてを知っていると反駁する(536E)。

ソクラテスは、しかし、もしホメロスの方は知っていて、イオンの方はその知識をもっていないようなことががあるとすれば、どうだろうかと問い直し、それがきっかけになって、ホメロスにあつかわれている技術の例があげられてゆく。御者の術、医術、釣師の術、予言の術、舵をあずかる者の術、牛飼いの術、毛糸を紡ぐ女の術、などがとりあげられ、それぞれの問題において、その語られる方の巧拙を判定する者は、吟誦詩人なのか、それともそれぞれの技術者なのか、という問いが展開される。イオンは、それらいずれにおいても、吟誦詩人が、判定者としては無能であることを認める(536E〜540D)。

それでは、吟誦詩人の技術とはいったいなにを対象にしているのかと、ソクラテスに問いつめられ、イオンは、それは将軍の術と同じである、と答える(541A〜B)。

ではなぜ、一方吟誦詩人としてすぐれているのであれば、他方イオンは同時に、すぐれた将軍であってもいいではないか、どうして両立しないのか、とソクラテスに重ねて問いつめられる(541B〜C)。

イオンは、エペソス、アテナイ間の国際情勢を理由に持ち出し、目下アテナイもエペソスも、エペソス生まれの将軍を必要としないからだと答える(541C〜D)。

しかし、ソクラテスはなお意地悪く追求し、アテナイ人は、たとえ相手が外人であろうと、それが有能の士でさえあれば、これを手厚く迎えて官職につけているではないか、と反対する。そしてさらにイオンの今までの答弁は、じっさいはホメロスについて何の知識もなく、むしろ「神の特別の恩恵」によって吟誦しているだけであるのに、知識をもっていると欺くぺてん師(ἄδικος)であることを、暴露しているにすぎないと語る。そしてイオン自身に、神がかりになって吟誦している事実を認めさせるところで、対話は終る(541D～542B)。

以上の概括を要約すれば、吟誦詩人が巧みにホメロスを吟誦しうるのは、むしろホメロスについてなに一つ知識をもっていないことによるという、いわば吟誦詩人の皮肉な秘密が、作品の主題になっているとも見られるであろう。それを明らかにするソクラテスの、本篇533Dから535Aにわたる長広舌は、本篇内容の中核をつくっている。吟誦詩人、あるいは一般に詩人の才能は、狂気によっているというのが、そのソクラテスの主張であった。そしてその狂気とは、神にとりつかれ、神がかりになった霊感であり、その意味で、「神の特別の恩恵」(θεία μοῖρα)であるというのである。ムゥサの女神からあたえられるその「特別の恩恵」としての能力が、まず詩人自身に、つぎには詩人の詩句を吟誦する吟誦詩人に、さらにはその吟誦に耳を傾ける観客へと、つぎつぎのりうつってゆくありさまが、磁石(マグネシアの石)の力にひきつけられ、つぎつぎつながりながらくさりをつくる指輪や鉄片に喩えられている。さらにそれはまた、神がかりになったバッコスの信徒たちにも喩えられる。詩人は、自分のとり憑かれているムゥサからあたえられた霊感によってのみ詩をつくり、また吟誦詩人は、自分のとり憑かれている詩人からうける霊感によってのみ吟誦する。そして彼らを貫いている霊感は、マグネシアの磁石の牽引力さながらに、一つの同じ狂気であるという。イオンは、この狂気にとり憑かれ、吾を忘れ、正気を失うことによって、むしろ巧みに吟誦できるのであり、それは正確な知識によってではないというのが、ソクラテスの主旨であった。

補注(I)Bにおいて語られているように、この詩人狂気説は、ホメロス、ヘシオドスの昔から見られる、ギリシア人の、詩人にたいする見方の一つであった。またプラトン自身においても、たんに本篇のみではなく、たとえば『パイドロス』においては、一段と徹底したかたちで追求されているものでもあった。正気の人のつくった詩より、狂気の人の詩の方がはるかにすぐれているというような言葉も、そこには見られる(245A)。これは、われわれにもまた親しい思想であると言いうるであろう。詩人や作家の創造活動において見られる、意識と無意識との、知性と情熱との、事実と想像との、つまり正気と狂気とのたたかいにおいて、すくなくともすぐれた創作を可能にするものは、つねに正気よりもむしろ狂気の系譜であることを、われわれもまたよく知っている。知識と技術によってではなく、神にとり憑かれた狂気によって、吟誦詩人は吟誦しているのだと、ソクラテスをして語らしめたプラトンは、吟誦詩人に託して、ひろく芸術の創造にまつわる秘密を、見事にとらえていたと言うこともできるであろう。

それでは、(吟誦)詩人をしてすぐれた(吟誦)詩人たらしめているその狂気や「神の特別の恩恵」を、プラトンその人は、無条件に認めているのであろうか。われわれは『国家』の中で、もしそういう詩人が、

みずからの姿と作品を誇示しようとして、われわれの国へやってきたなら、われわれは彼を、神のごとき人、驚嘆に値する人、愉しみをあたえる人としてこれを敬いはしても、しかし、そのような人はわれわれの国には存在しないし、また生じることも許されてはいないのだと語るであろう。そして、香油をその頭にふりかけ、羊毛の冠を戴かせて、他の国へ送り出すであろう(『国家』III. 398A)。

と語られながら、婉曲にそうした詩人の訪問の拒絶されていることを、知っている。あるいはまた、『パイドロス』において語られているアドラスティアの掟で、真実在を眺めた魂の序列にふれ、詩人にたいしては、九位のうち、辛うじて第六位という順位のあたえられていることも、われわれは記憶している。それらにおいてわれわれの見るものは、詩人への尊敬であるよりも、むしろ警戒であるといわなくてはならない。それはまた、外人教師(ソフィ

スト）たちにたいする警戒とも、重なるものであった。ホメロスもヘシオドスもシモニデスも、また秘儀神託をさずける人たちも、みな、詩人や予言者の仮面にかくれたソフィストであったと、『プロタゴラス』(316D)の中で、プロタゴラスをして、プラトンは語らしめている。

そうしたことを念頭におきながら、詩人にあたえられた「神の特別の恩恵」(θεία μοίρα)という言葉を考え直してみると、たとえそのような詩人が「神のごとき人、驚嘆に値する人」として敬われてはいても、その尊敬には、あきらかに鋭い皮肉のこめられていることを、見のがすことはできないのである。そしてその皮肉は、またわれわれに、テミストクレスなど当代一流の政治家たちの徳をあつかった、『メノン』を連想させるであろう。政治家をして有能な政治家たらしめている徳とは、人から教わったり、人に教えたりできる知識としての、本来の徳ではなかった。それはむしろ、たまたまうまくいった場合の有効性においては、知識のもたらす結果と一致することはあるにしても、しかし知識のように、いつもかならず成功するとはかぎらない「正しい思惑」(ὀρθὴ δόξα)であり、「思惑の確かさ」(εὐδοξία)であった。それは言いかえれば、なぜに成功したかという理由を自覚しない一種の無知であり、「知という点にかけては、例の神託を伝えたり、神の意をとりついだりする人たちと、なんら異るところはない」ものであった(『メノン』99C)。そしてその無知に立った政治家の徳は、それが生まれつきのものでも知識として教えられたものでもない以上は、それは、「神の特別の恩恵」(θεία μοίρα)によってあたえられたものであると語られているが、『メノン』のその箇所(99E6)においても、『イオン』の場合と同じく、(θεία μοίρα)(「神の特別の恩恵」)という言葉が使われている。イオンの——ホメロスの中でうたわれていることがらについてなに一つ知ることもなしに、巧みに吟誦しているイオンの無知も、またこの政治家の無知と、同じものだったのである。われわれはまた、それら政治家や詩人などの無邪気な無知にたいする批判が、『ソクラテスの弁明』においては(21C〜22C)、ひとまとめにして語られていたことを知っている。その『弁明』におけるソクラテスは、政治家、悲劇作者やディテュ

ランボスの作者たちの、とりわけすぐれていると評判されている者たちと語り合うのであるが、そこにおいてソクラテスの見出したものは、彼らの仕事や創作も、つまりは神の啓示をとりつぎ神託をつたえる人たちのように、神がかりの状態において行なわれている、ということであった。口ではいいことをたくさん語ってはいるが、その自分の言葉の意味については、なに一つこれを知ってはいないという、自知の喪失であった。

吟誦詩人イオンもまた、そのような一連の無知の上に立って、吟誦の職業にたずさわっていたのである。それはまた、この世のあらゆる職業や専門化された仕事において、多少とも見られる無知であると言いうるかも知れない。「神の特別の恩恵」という美しい言葉は、じつはそのような無知を意味する、皮肉な言い方なのである。むろんそれは反面、芸術上の創造や吟誦の仕事を見事に成功させるための不可欠の狂気となるものではあるにしても、しかしそれがまさに狂気であり無知であるかぎりにおいて、自分自身の言行にかんする自省自知の麻痺にほかならなかった。そしてそのかぎり、やがては、自分にはもとより、他人にも重荷となるような禍をつくっておきながら、一向それに気づかぬ無邪気な心の病であるとしなくてはならぬものであった。

このように考えてみると、本篇の最後において、ソクラテスの質問に答えているイオンの答弁はほほえましい。ソクラテスはつぎのように質問する。イオンよ、君は、ホメロスについて技術と知識を心得ていると言いながら、その証しを一向に見せようとしないぺてん師と見られたいか、それとも、技術によってではなく、「神の特別の恩恵」によって、神がかりになりながら吟誦していることを認めて、神につかれた男と見られる方を望むか、さあ、どちらかを選びたまえと。ソクラテスからこのように問われたイオンが、「ずいぶんの違いですね、ソクラテス。だって、神につかれた男と思われる方が、はるかに美しいことですから。」(542B)と答えているのは、愉快である。「神の特別の恩恵」にこめられているソクラテスの皮肉は、最後に及んでもイオンには見えていなかったのである。むしろその言葉はそのままに、ただ美しい言葉と思われていたのである。それはちょうど、『メノン』におけるメ

ノンと、同じであるとも考えられるであろう。[3] しかしその種の自知の不足こそは、なによりもソクラテスには気になった、人間の悪徳だったのである。

（3） R. S. Bluck, *Plato's Meno*, Cambridge, 1964. p. 435.

小品である本篇の内容も、以上のようなひろがりに立って考えてみれば、小品ではあるが、きわめて重要な問題が扱われていると言わなくてはならない。それはプラトンの、芸術にたいする洞察の深さと、同時にそれゆえの警戒とを、さりげなく背後にひそませた作品なのである。それはまた、『ソクラテスの弁明』において、無知の知を解明するための契機としてとりあげられた、政治家、予言者、詩人の問題、つまり、彼らははたして知識の名に値するものをわきまえているのか、という問題が、つぎつぎと別個にとりあげられていった、いわゆる初期対話篇の一つであると見ることができるであろう。

使用文献

St. George Stock, *The Ion of Plato*, Oxford, 1909.
J. M. Macgregor, *Platonis Ion*, Cambridge, 1956.
L. Méridier, *Ion, Ménexène, Euthydème*, (*Platon Œuvre Complètes* Tom. V, 1 Partie) 1964.
G. Stallbaum, *Platonis opera omnia*, vol. IV, sect. II, Goth. et Erford., 1833.
W. R. M. Lamb, *Ion*, (*Plato, The Statesman, Philebus Ion*, Loeb Class. Lib.), Cambridge (Mass.), 1925, reprint. 1962.

『メネクセノス』解説

津村寛二

登場人物

メネクセノス（Menexenos）　メネクセノスは、この対話篇以外にも二度ばかりプラトンの作品に登場する。『パイドン』（59B）では、ソクラテスの死に立ち会った人々としてその名があげられ、『リュシス』では、デモポンの息子でリュシスのいとこ、そしてまだ少年のメネクセノスが登場して、作品の一部でソクラテスと対話している。本篇ではメネクセノスは、ソクラテスの言葉にもあるように、「教育や教養」をおわり、「もっと大きな仕事に向かおうとしている」青年として登場する。当時の名門の子弟たちは、成人すれば国家公共の仕事で名をなそうと望むのが常であった。そしてその場合には、当然弁論術に関心をいだくことになる。メネクセノスもそのような青年の一人である。

ソクラテス（Socrates）　ソクラテスは、もちろん晩年の、六五歳から七〇歳ぐらいのソクラテスが想定されなければならない。

一　総　説

（対話篇の梗概　戦死者の葬儀と追悼演説に関する解説　真偽問題　対話設定年代　執筆年代）

『メネクセノス』は、プラトンの対話篇の中でも風変りな作品であって、ソクラテスが弁論ずきの青年メネクセ

ノスに話してきかせるという設定で、戦死者のための追悼演説を披露してみせることが作品の主題になっている。

ある日ソクラテスは、広場から帰ってくるメネクセノスに出会う。メネクセノスは、近く行なわれる戦死者の葬儀の追悼演説者に誰が選ばれるかを知るために、審議院にいってきたのである。それをきいたソクラテスは、さっそく例の調子で、追悼演説者たちがいかにみごとに戦死者やアテナイをほめたたえるかを、皮肉たっぷりに語る。しかもソクラテスは、追悼演説がむずかしい仕事だと思っているメネクセノスに対して、何もむずかしいことはない、追悼演説のようなものは即席でもできる、と言ってのける。ではあなたにも演説ができるのかと問われて、ソクラテスは、自分でもできると思う、なにしろペリクレスを育てたアスパシアが私の弁論術の先生で、そのうえ実は昨日も、追悼演説をおそわったところだからという。メネクセノスは、その演説をぜひとも聞かせてほしいと言いだし、ソクラテスは、アスパシアが怒りはしないかとためらいながらも、結局話してきかせることを承諾する。そして「戦死者をたたえ、遺族を励まし、慰める」長い追悼演説が語られる。この部分が本篇の主題であり、全体の八割ほどを占めている。演説がおわると、メネクセノスは、すっかり感心してソクラテスに礼を言い、ソクラテスは、私からきいたことは口外するなと念をおして、二人は別れる。

この作品の主題となっている追悼演説は、アテナイの伝統的なしきたりにのっとったものである。アテナイには、戦死者のために毎年国家が葬儀をいとなみ、またその際にすぐれた人物を選んで追悼演説をさせる習慣があった。この習慣はソロンにはじまるとも言われ、また実際にはもっとおそくペルシア戦争のころにはじまるとも言われているが、はっきりしたことはわかっていない。確実に知られているものとしては、トゥキュディデスによって記録された前四三一／四三〇年冬の葬儀がある(『歴史』第二巻(三四))。その記録によると、ペロポネソス戦争勃発の年に行なわれたこの葬儀は、およそ次のようなものであった。

葬儀の数日前から、祭壇に戦死者の遺骨が祭られ、供物がそなえられる。葬儀の日がくると、遺骨は部族ごとに

ひとつの糸杉の棺におさめられ、さらに遺体の収容されなかった死者のために、空の棺が用意される。棺は車に乗せられ、市民の葬列につきそわれて、美しい郊外の墓地へ運ばれる。そして埋葬が終ると、そこにあらかじめ設けられている演壇に演説者が登り、追悼の演説を行なうのである。この葬儀のときに、演説者として選ばれたのはペリクレスであり、彼は祖国アテナイを「ギリシアが追求すべき理想の顕現」であるとたたえた有名な追悼演説を行なった。この演説はトゥキュディデス『歴史』第二巻(三五—四六)に収録されている。

プラトンの『メネクセノス』は、こういったアテナイの習慣を背景にして書かれたのであるが、しかしプラトンの作品の場合にはもうひとつの背景、すなわち当時における弁論術の流行を考えておかねばならない。

われわれには、ペリクレスの演説以外にも、ギリシア古典期の追悼演説がいくつか残されている。アテナイに居留民として住んでいた弁論家リュシアス(前四五九—三八〇年)の追悼演説、アテナイの弁論家ヒュペレイデス(前三八九—三三二年)の追悼演説、デモステネスの名のもとに伝えられた追悼演説、それにこのプラトンの『メネクセノス』である。これらの作品は、ペリクレスの場合とはちがって、演説が第三者によって記録されたものではなく、作者自身が演説のために、あるいは刊行するために、書いたものである。

ギリシアのポリスのように、市民の動向が政治に直結している社会では、弁論というものが大きな役割をはたす。ことを為すには、さまざまの集会において市民を説服し、市民の賛同を得なければならないからである。民主制下のアテナイではとりわけそうであった。弁論術は、はじめシケリア(シシリー)において法廷弁論として発展したが、ゴルギアスをはじめとするソフィストたちの活動とむすびついてアテナイにもたらされ、そういうアテナイの事情によく適合して、人気を博したのである。そしてこのような雰囲気の中で、実際に演説が行なわれるだけでなく、弁論の技術書が出版され、また政治、裁判、儀式など各分野の弁論が記録されたり、書かれたりして、お手本として刊行された。プラトンの『メネクセノス』も、主題になっている追悼演説だけをとりあげれば、弁論の分野で

「エピタピオス(追悼演説)」とよばれていたものの、ひとつの見本なのである。

しかしプラトンがこのような追悼演説を公表したということは、ロゴグラポス(弁論の代作家)として有名であったリュシアスなどの場合とちがって、われわれにとって難問をひきおこす。よく知られているように、プラトンは弁論術の強硬な批判者であった。プラトンは『メネクセノス』の中でも、はじめの対話の部分で弁論家たちを痛烈に皮肉っている。そのプラトンが、なぜ弁論術の見本のような追悼演説を書いてみせたのか。その意図はどこにあるのか。この問題が古くから対話篇『メネクセノス』に関する最大の争点となってきたのであるが、それについては後に考察しよう。

ところで、弁論術を否定しているプラトンが、なぜ追悼演説を書いたのかという疑問は、この作品がはたしてプラトンの真作であるかどうかという疑問にもつながる。そして以前には、アストなどのように、偽作説をとる人がかなりあった。しかしこれには有力な反証がある。アリストテレスは『弁論術』の中で二度、この対話篇の「アテナイ人の中でアテナイ人をほめるのは難しくない」という部分を引用している(『弁論術』第一巻(1367b8)、第三巻(1415b30))。もっともアリストテレスは、これをソクラテスの言葉としているが、それはアリストテレスがプラトンの作品から引用するときの通例である。またキケロは「アテナイにあって戦死した人たちが集会でたたえられるとき、その演説を用いるのが習慣とされていたプラトンの公的な演説」と語り、そのプラトンの作品がアテナイの人々に「たいへん歓迎されたため、あなたも知っているように、毎年その日に朗読されねばならなかった」(Orator 151)とのべているが、これは『メネクセノス』の追悼演説のことを言っているのであろう。一般に古人の著作、とくにプラトンの弟子でもあったアリストテレスの著作に、プラトンの著作に対する言及が見いだせるときには、それはその作品がプラトンの真作であることの有力な証拠となる。したがって『メネクセノス』が真作であることはまず確実であり、また最近の学者で異論をとなえる人はほとんどない。

『メネクセノス』の舞台は、ペリクレスの演説から四〇年あまりのち、前三八七年のアンタルキダスの和平の直後に設定されている。というのは、『メネクセノス』の追悼演説に語られるアテナイの戦史が、ちょうどアンタルキダスの和平で終っているからである。このころアテナイは、ペロポネソス戦争の敗北からたちなおり、コリントス戦争などにおいて、ふたたびスパルタと戦っていた。そして和平を獲得してのち、戦死者の葬儀が行なわれることになり、青年メネクセノスは誰が演説者にえらばれるかを知ろうと審議院に出かけ、その帰りにソクラテスに出会ったのである。もっともこの設定にはちょっとした年代錯誤がある。ソクラテスは実際には前三九九年に刑死しており、その一〇年ほどのちのアンタルキダスの和平を語れるはずはない。しかしこのことは、あらためて『メネクセノス』がプラトンの真作かどうかを疑わせるような材料ではなく、この作品の場面設定が仮構であることを示しているにすぎない。

プラトンが実際にこの対話篇を書いた年代も、アンタルキダスの和平を手がかりに推定されている。追悼演説にアンタルキダスの和平がふれられ、それ以後の事件が出てこないところからすれば、作品の執筆年代も前三八七年以降で、それよりあまり年数を経ないころであろう。前三八七年はプラトン四〇歳で、アカデメイア学園を創設したころである。作品群の中での位置づけから言えば、『メネクセノス』は初期対話篇から中期対話篇への移行期にあたるものと思われる。

二 『メネクセノス』の追悼演説 (演説の梗概　演説の性格)

序文

追悼演説の梗概を、本文の章わけに従ってまとめてみると、次のようになる。

五　章　追悼演説の意義とプラン
《演説の目的は、戦死者をたたえ、また遺族を慰め、励ますことだとされる。これに対応して演説は前半（称賛の部）と後半（慰めと励ましの部）にわかれる。さらに前半の戦死者の称賛は「自然に従い」、その生まれ、養育と教育、武勲の順にするという》

生れの称賛

六　章　戦死者の生まれと祖先の生まれ

七章前半　国土
《戦死者の生まれは祖先の生まれに由来し、祖先はこの土地から生まれた土着の民であり、この点にアテナイ人の生まれの良さがあるとする。さらに祖先を生んだのは国土であり、母なる国土をたたえることが戦死者の生まれをたたえることになるとして、わが国土が神に愛され、人間を生んだ国であるという》

養育と教育の称賛

七章後半　国土と神々によるアテナイ人の養育と教育

八　章　国制
《国土は穀物とオリーブによってアテナイ人を育て、神々が生活の技術と武器の使用を教えた。また国制は人間の養育者であるとして、アテナイ民主制と、その本質である自由と平等をほめる》

武勲の称賛

九　章　伝説の時代の戦い。ペルシア戦争前夜の情況

一〇章　ペルシア戦争――マラトンの戦い

一一章　サラミスとアルテミシオンの海戦

一二章　プラタイアの戦い。その他のペルシア軍との戦い
《自由のうちに養育されたアテナイ人は自由を守るために戦ってきたとして、アマゾンとの戦いなど伝説の時代の戦いに軽くふれ、ペルシア戦争に移り、ペルシア戦争で祖先たちがギリシア人の先達となって夷狄を撃退したことをたたえる》
一三章　ペロポネソス戦争――その原因。ボイオティアの戦い。スパギアの戦いと和平
一四章　シケリア遠征。スパルタとペルシアの同盟。アテナイの孤立。ミテュネレの海戦。ペロポネソス戦争の終結。三〇人政権と民主派との内戦
《ペロポネソス戦争前半の戦いでは、スパルタを破り、武勇をあらわしたことをたたえ、後半の戦いでは、破れたりとはいえ、多くの戦いで武勇をあらわしたことをたたえ、敗北は国内の不和のためで、敵に打ちまかされたのではなく、内戦は模範的に終結されたという》
一五章　戦後の情況
一六章　ギリシア諸国およびペルシアとの対スパルタ同盟。コリントス戦争
一七章　戦争の終結と和平
《ペロポネソス戦争後、わが国がもはや他国を援けまいと決意していたのに、援助を請われてスパルタと戦ったのは同情心のためであり、ペルシアとの取引きをアテナイだけが拒絶したのは、アテナイ人の自由の気風、夷狄の血をまじえない純血のゆえであるとたたえる》
遺族への励ましと慰め
一八章　武勲の称賛から遺族の激励への移行
一九章　戦死者から息子たちへの言葉

《戦死者が息子たちに伝えよと託した言葉を通じて、息子たちに、武勇において父親の名声をしのぐように力をつくせと励ます》

二〇章　戦死者から親たちへの言葉

《不幸を平静に耐えるようにと、慰め、励ます》

二一章　演説者からの励ましと慰め

《国家が遺族に与える保護にふれつつ、遺族たちを慰め、励ます》

以上の演説は、追悼演説としてはほぼ典型的なものであろうと考えられている。現在残されているいくつかの追悼演説を比較してみると、もちろんそこには作者または演説者によるちがいはあるけれども、演説でとりあげるべき題材、またその順序などに共通の形式があったことがわかる。たとえばこの『メネクセノス』の演説をふくめ、いずれの演説も全体として称賛と慰めの二部分より成っている。その称賛においては、アテナイ人、とくにその生まれをほめること、祖先をほめることなどが共通している。また『メネクセノス』の演説にでてくる題材は、他の作者の演説にもでてくる。たとえばアマゾンとの戦いなどの伝説は、リュシアス、偽デモステネスの演説にもとりあげられ、ペルシア戦争はリュシアス、偽デモステネス、ヒュペレイデスでもたたえられる。アテナイの国制の称賛は、ペリクレス、リュシアスにもある。同様に、遺族に対する慰めと励ましにおいても、類似のテーマを見つけることができる。たとえば戦死者の息子たちに対する国家の配慮を、ペリクレス、リュシアス、ヒュペレイデスがとりあげている。

『メネクセノス』が、これらの題材を構成していく方法にも、弁論術のスタイルが写されていると言われている。まず全体を戦死者の称賛と遺族の慰めにわけ、戦死者の称賛を、生まれと養育と武勲の称賛にわけ、生まれを祖先

の生まれに、祖先の生まれを土着の民としての生まれに還元し、その生まれから母としての国土と、国土による養育を語り、またその生まれからアテナイ人の平等と自由をひきだし、その自由から、自由を守る数々の戦いをひきだして、それらの戦いを第一、第二、第三と順序だてて語っていく。このように題材の関連を意識的にととのえるやり方は、弁論術の技術を思わせるのである。

そして言葉の技巧においても、『メネクセノス』の追悼演説は弁論術の技術をふんだんにとり入れている。たとえば「公には国家によって、私には家族によって」(236D)、「立派な国制は善き人々を、劣った国制は悪しき人々を」(238C)といった対句などがその例である。

三　対話篇『メネクセノス』の目的

プラトンがなぜ追悼演説をかいたのか。この演説はまじめなものであるのか、それとも風刺であるのか。この問題はすでに古代から議論されていた。たとえばハリカルナッソスのディオニュシオス(前一世紀から後一世紀ごろの人)、タルソスのヘルモゲネス(後二世紀ごろの人)は、プラトンの意図を「まじめなもの」と考えていたようである。しかしその場合の「まじめ」とはどういう意味であろうか。プラトンが、自分自身の内面的な欲求から出発したにせよ、あるいは弁論家を批判するためであったにせよ、とにかく真にすぐれた追悼演説を書こうと欲し、また書けたと信じて、公表したのであろうか。

この演説が立派な追悼演説であることは、おそらくまちがいのない事実であろう。先にものべたように(二四〇ページ)この作品がアテナイ人に「たいへん歓迎された」ことは、キケロの証言するとおりである。そしてまた、このような証言が存在することは、この作品がアテナイ以外の国でも有名であったことを示している。しかしこれらのことは、あくまでもこの作品が追悼演説としてすぐれていたことを、また弁論の一分野の見本として有名にな

ったことを意味するだけであって、この作品がたとえば哲学的な内容においても立派であるということを意味するものではない。

そして実際、この演説の中には、プラトンらしい哲学的考察をうかがわせるような部分はあまり見あたらないのである。もともと演説の前半はアテナイの国土や祖先の武勲の称賛であって、そこには哲学的といえるようなものはない。さきにあげたハリカルナッソスのディオニュシオスは、演説の後半の遺族に対する励ましと慰めの部分にプラトンのまじめな意図を認めたと伝えられるが、しかしそこに見られる「徳へのすすめ」は、説得力に富んだ美しい言葉で語られてはいるけれども、その内容はかなり月並なものであり、また他の追悼演説にもみられるものであって、プラトン自身の哲学を写しているとは思われないのである。そして、このなかで戦死者の息子たちに対して学ぶようにとすすめられている徳、勇気、正義といった徳目、あるいは戦死者の両親たちに求められている節度、思慮などの徳目は、いずれも世俗的な意味で、すでにわかっているものとして前提されている。しかしプラトンの哲学は、本来それらがそもそも何であるのかとたずねることから出発したのであった。同様のことは、アテナイの国制と、その本質をなす平等と自由についても言えるだろう。この演説では、それらの価値は自明のこととして前提されているが、プラトンは『国家』においてそれらを問いなおし、そして事実上、それらが無条件的に最高の価値があることを否定しているのである。

またこの演説の読者は、ここに語られているアテナイの歴史の中に、プラトンらしからぬものを見いだすかもしれない。たとえばこの演説は、神話を根拠としてアテナイの国土をたたえ、何十年も昔のペルシア戦争における栄光をあい変わらずふりかざし、アテナイ人の戦いをすべて「ギリシア人の自由を守るため」と美化し、ペロポネソス戦争における敗北を、自分たち自身の不和によって破れたのであって敵によって負かされたのではないと弁解する。このアテナイの戦史を、ヘロドトスの『歴史』やトゥキュディデスの『歴史』と比較してみると、具体的な事

実のかなりの部分がかくされ、若干の部分は歪曲されていることがわかる。たとえばペルシア戦争について見ても、ダレイオスは口実をかまえてギリシアに侵攻したとされているが(240A)、ヘロドトスによれば、アテナイとエレトリアは実際に派兵してサルディスを焼いたのである。マラトンの戦いでは、アテナイだけで戦ったように書かれているが(240C)、ヘロドトスはプラタイア軍の来援を伝えている。ペルシアの二回目の侵攻のとき、テルモピュライで死守全滅したスパルタ軍の武勇については一言もふれられず、サラミスの海戦もヘロドトスによるとギリシア連合軍三七八隻(うちアテナイ軍一八〇隻)によって戦われたものであるのに、そのことは書かれていないのである。

この演説に以上のような欠陥があるとすれば、それはなぜか。プラトンがこの作品に限って哲学的に意識がひくく、また歴史については無知や偏見に支配されていた、というようなことはまず考えられない。むしろプラトンは、承知の上で、そのようなものを書いたのだと考えるべきであろう。そして、その理由は、これが追悼演説だからであろう。追悼演説は本来大衆的な水準のもので、またアテナイをほめるためにあるのだから、哲学的に低く、歴史観が偏っているのは当然なのである。

この結論が正しいとすれば、プラトンが「まじめ」にこれを書いたとは考えられない。プラトンは、自分の立場からは肯定し得ないものを、わざと書いているのだからである。それはプラトンの愛国心から出たものである、と説明することもできようが、しかしプラトンのように真実の追求ということを目標としてかかげてきた人物が、愛国心というようなものからこの演説をそのまま是認するだろうか。また、プラトンは弁論家に対抗して自分にも演説が作れることを示したのであり、その限りにおいては「まじめ」であったと説明することもできようが、しかしプラトンが、そのような目的のためだけに、自分の哲学に反する内容のものを書いて、公表するだろうか。むしろこの演説は、やはりこれ自体が風刺であり、プラトンが承知の上でつくりだした哲学的内容の乏しさや歴史観の偏

向は、追悼演説ではそれもやむをえないということを示すのではなく、逆に追悼演説がそのことによってのみ成立し、また成功するということを示しているのではないだろうか。

『メネクセノス』の対話の部分を考えてみれば、そこに弁論術に対する批判、そして追悼演説というもの自体に対する批判が見られることは明瞭であり、したがって、ソクラテスの語る追悼演説も、弁論術を風刺するために書かれていると考える方が本来筋がとおっている。ただこの解釈の困難は、演説がすくなくとも表面的にはまともに作られており、なぜこれが風刺となるのかはっきりしないという点にある。しかし先に述べたように演説の中にプラトンが肯定するはずのない欠陥が内在しており、しかもプラトンがそれを承知で書いているとするなら、それを対話の中にみられる弁論術批判と結びつけることができるように思われる。

ソクラテスは、追悼演説者たちの腕前がどれほどたいしたものかを皮肉って(235A～C)、かれらが「真に当人の手柄であることも、そうでないことも」引き合いに出すと言っているが、これは演説の中でもアテナイの戦史をゆがめる形で行なわれていることである。また演説者たちは、「言葉をつくして飾りたて」るのであるが、それも演説の中の言葉の技巧にあらわれている。そして演説者たちは「ありとあらゆるやりかたで」国を、死者を、祖先をほめたたえるのであるが、まったくその通りのことが演説のなかで行なわれているのである。

しかもソクラテスは、このような追悼演説がすこしも難しいものではないという。その理由のひとつは「彼ら弁論家は、誰でも準備ずみの演説をいくつか持っている」(235D)からであるが、演説を準備しておけるということは、弁論には形式があって、何をいかに語ればよいか大体きまっているということであり、そして先にもこの解説の第二章でのべたように、『メネクセノス』の演説はまさにそのような弁論術の形式に従って作られているのである。さらにソクラテスは追悼演説のようなものはとりわけやさしい、「ペロポネソス人の中でアテナイ人をほめて」好評を博するにはすぐれた弁論家を必要とするだろうが、「アテナイ人の中でアテナイ人をほめるのであれば」、好評

を博するのは容易なことだという(235D, 236A)。なぜこれが容易であるのかは、やはりソクラテスによって説明されている。ソクラテスは、追悼演説者の称賛の仕方がいかに見事かを皮肉ったあとで、つづいてそのような演説がいかに効果的であるかを自分にことよせて語っている。すなわち、そのような演説をきくと、「自分がすっかり偉くなったような気」になり、「聞きほれ、魅惑されながら、立ちつくす」のであり、一緒に来ている外国人に対しても自分が「一段と威厳のそなわったような気」になるのである(235B)。人間は誰でもほめられると満足し、満足のゆえにその称賛が真実であるような錯覚におちいり、その錯覚に陶酔する。したがって、ほめることを本性とする追悼演説が好評を博するのはあたりまえなのである。

要するにプラトンは、対話の部分でソクラテスに託してのべたことを基礎にして、追悼演説を作っている。プラトンは弁論術の手法と形式を用い、内容を世俗の水準まで落し、アテナイの戦史をまげ、アテナイ人を喜ばすようなことを書き、そして実際にアテナイ人の喝采を博した。プラトンは、この演説を作ることによって追悼演説の本性を明らかにし、弁論術に対する自分の考え方の正しさを証明してみせたのであり、そのことが、この演説を作る目的であったのである。したがって、この『メネクセノス』も、『ゴルギアス』から『パイドロス』に至るプラトンの弁論術批判と同じ線の上に位置づけられるのである。

プラトンが弁論術をまねて、もっともらしい演説を作った例は他にも多い。たとえば『饗宴』の中のアガトンの演説(194E〜197E)、『パイドロス』の中でパイドロスが語るリュシアス作の演説(230E〜234A)などがある。これらは作品の中では否定されるために存在しており、次にソクラテス自身の演説がくることによって否定されるのである。『メネクセノス』の追悼演説も、おそらく弁論術をまねて作られた否定されるための演説なのであろう。ただ『メネクセノス』では、この演説はソクラテス自身の語るものであって、次に別の演説がくるわけではない。しかし否定さるべき演説がソクラテスによって自分にもできるという形で語られたところに、『メネクセノス』を

一貫している弁論術に対する風刺と皮肉があるのだろう。

最後に付言しておきたいことは、『メネクセノス』の追悼演説は、否定さるべきものではあるけれども、やはりそれ自体の価値を持っているということである。シュタルバウムはこの作品について、「アテナイの弁論家たちや市民たちを、同時に笑うためにつくられている……彼らの、空しい称賛や栄光を欲するあわれむべき欲望のある種の姿を示すために、弁論術を利用しているのだ」とのべているが、この見解は基本的には正しいとしても、『メネクセノス』を冷酷なものにしすぎている。先にのべた『饗宴』の中のアガトンの演説も、『パイドロス』のリュシアスの演説も、それ自体おもしろい読みものであり、またそこからさまざまのことを考え、学ぶことができる。『メネクセノス』の追悼演説も、そのようなものとしてつくられているのである。そして、否定すべき対象をむきだしに否定するのではなく、その対象をひとつの作品に仕上げるところに、プラトンの作家としての腕前と、四〇歳をこえたプラトンの余裕を感じることができるのである。

主な使用文献

C. E. Graves, *Plato Euthyphro and Menexenus*, Macmillan, 1969. (Elementary Classics)
J. A. Schawyer, *The Menexenus of Plato*, Oxford Clarendon Press, 1906.
O. Apelt, *Platons Dialoge, Menexenus* (Philos. Bibl. Bd. 177) 1922.
L. Méridier, *Ménexène* (*Platon, Œuvres Complètes* Tom. V) Paris 1949.

邦訳

加来彰俊訳『メネクセノス』(世界の名著、プラトンI)(中央公論社)
岡田正三訳『メネクセノス』(プラトーン全集第四巻)(全国書房)

ヤ 行

『メネクセノス』索引

数字とABCDEは，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字とBCDE(Aは数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア 行

カ 行

サ 行

タ 行

ナ 行

ハ 行

マ 行

タ 行

ナ 行

ハ 行

マ 行

ヤ 行

ラ 行

『イオン』索引

数字と ABCDE は，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字と BCDE(A は数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア 行

カ 行

サ 行

ハ 行

マ 行

ヤ 行

『ヒッピアス(小)』索引

数字とABCDEは，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字とBCDE(Aは数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

マ 行

ヤ 行

ラ 行

『ヒッピアス(大)』索引

数字とABCDEは，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字とBCDE(Aは数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア 行

カ 行

サ 行

プラトン全集 10　　第5回配本(全15巻　別巻1)

1975年2月5日　発行

¥2200

訳者　北嶋美雪（きたじまみゆき）
　　　戸塚七郎（とつかしちろう）
　　　森進一（もりしんいち）
　　　津村寛二（つむらかんじ）

発行者　岩波雄二郎

東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　精興社印刷・牧製本